

春秋に義戦なし



春秋に義戦なしの目次

『まえがき』	・ ・ ・ ・ ・ 1	④儒教	・ ・ ・ ・ ・ 44
		⑤道教	・ ・ ・ ・ ・ 46
『テロと戦争』	・ ・ ・ ・ ・ 3	⑥ヒンズ教	・ ・ ・ ・ ・ 47
「正義」	・ ・ ・ ・ ・ 4	⑦ジャイナ教	・ ・ ・ ・ ・ 48
「報復」	・ ・ ・ ・ ・ 5	⑧シク教	・ ・ ・ ・ ・ 49
「無知と誤解」	・ ・ ・ ・ ・ 7	⑨ゾロアスター教	・ ・ ・ ・ ・ 50
「環境」	・ ・ ・ ・ ・ 8		
		『失われた宗教』『世界の秘密宗教』	・ ・ 52
『テロと宗教』	9		
「なぜ宗教はテロ集団を生むのか」	・ 10	『世界漫遊紀行』	
「原理主義と宗教」	・ ・ ・ 12	「イスラエル」(含パレスチナ)	・ ・ 55
「イスラム原理主義」	・ ・ ・ 14	「アラビア半島」	・ ・ ・ ・ 65
		「クウェート」	・ ・ ・ ・ 65
『世界の宗教』	・ ・ ・ 17	「バーレン」	・ ・ ・ 68
「宗教とは何か」	・ ・ ・ 17	「カタール」	・ ・ ・ ・ 70
「世界宗教」(三大宗教)	・ ・ ・ 19	「オーマン」	・ ・ ・ ・ 70
①仏教	・ ・ ・ ・ 19	「アラブ首長国連邦」	・ ・ ・ ・ 71
②キリスト教	・ ・ ・ ・ 23	「イスラムの天国観と殉教精神」	・ ・ 72
③イスラム教	・ ・ ・ ・ 27	「ビンラディン氏の行動」	・ ・ ・ ・ 73
「民族宗教」	・ ・ ・ ・ 32	「イラン」	・ ・ ・ ・ 74
①神道	・ ・ ・ ・ 32	「パキスタン」	・ ・ ・ ・ 75
②現人神教	・ ・ ・ ・ 35	「アフガニスタン」	・ ・ ・ ・ 77
③ユダヤ教	・ ・ ・ ・ 41	『あとがき』	・ ・ ・ ・ 81

まえがき

「春秋に義戦なし」と中国・戦国時代の孟子は述べている。いつの時代に於ても正義の戦争はなかった。葛藤(カクワ)の世代を体験した我々が期待した新世紀(21世紀)も、やはり戦争の世紀となってしまった。「火を弄(モテツ)ぶ者は自ら火傷(ヤド)する」と老醜(オウシウ)の身をさらして絶叫(ゼツキョウ)する。(中国・春秋時代は前770～前403、戦国時代は前403～前221)

上記は平成14年(2002)の私が差し出した年賀状の添書(ソエガキ)だが、葉書の狭い紙面では十分に意を伝えたとは思えず、若干(シヤク)補填(ホテン)する。「戦争の世紀」と呼ばれた20世紀が終わり、明るい希望にあふれた21世紀が到来すると誰もがある種の期待感をもっていた。しかし昨年9月11日、晴天の霹靂(ケキ)奇想天外(キウケイガイ)な米国への大規模自爆テロと報復戦争によって、新世紀がスタートするとは誰が想像しただろうか。

有史以来、人類が戦ってきた戦争の中に、義戦や聖戦でない戦争が一つでもあっただろうか。我等も聖なる戦(イサ)だと教えられたからこそ、男子は喜んで戦場に馳せ参じて一命を捧げてきた。今から不正義の戦争を始めると宣言して戦争をした国が地球上の何処にあったか。

兵馬恹恹(ハイバウツウ・鬱)の間、屍山血河(シヅケカ)の極限状態の戦場を馳駆(チ)すること四年間、その間に3回に及ぶ戦傷を受けた我が身も傘寿(カサヅ)を超してしまった。死生の境を身を以て体験したからこそ平和を希求(キキウ)する心は誰よりも鞏固(キョウコ)であり、戦後の口先だけの平和論者と「日と同じくして語るべからず」である。すなわち両者の平和論の間には大差があり、同日の論ではないのである。

さて何故に祝賀の年賀状に上記のような添書を書いたのか。その理由は、平和の願いから我々の戦闘(戦争)体験を風化させない為とともに、世界貿易センタービルの同時多発自爆テロ事件とアフガニスタン戦争の悲惨さを、地球人として何時までも忘却の彼方にやることなく戦争の暴虐性(オウケイ)を伝え、世界の平和を心から懇願したいからであった。

正義のために悪を討つのが戦争である。しかし正義と悪(不正義)とは、立場によっていつでも入れ替わってしまう。故に「春秋に義戦なし」と言ったのである。だから正義がある限り戦争はなくなるまいだろう。

今回の9・11テロ事件を、アメリカはイスラム原理主義者によるテロだと言い、一方のアラブ側では、イスラエルとパレスチナの問題が解決しないからだと各々相手方を誹謗(ヒコ)し、永久的な平行線の様相を呈している。だから正義と正義の衝突と言えよう。しかし物事には原因と結果がある。結果が独り歩きすることはない。因果応報(イガワリ)という原因～結果～原因～結果の繰り返しで、このテロ事件もまた然りである。

イスラム教という信仰も、キリスト教という信仰や民主主義という政治思想も、みんな正義を追求するものと思う。しかしイスラム教徒もキリスト教徒や民主主義者も戦争を否定しながら、実際には戦争を繰り返してきた歴史をもっている。私は両者とも本質的には平和な、そして平穏な社会を求めていると信じている。

アメリカが罵詈(バ)するイスラム教徒「ムスリム」の日常の挨拶(アイツ)では、世界中のどこでも「アッサラーム・アライクム」である。それは「あなたに平安がありますように」という

意味である。そしてその返事は「ワアライクム・サラーム」で、「あなたにも平安がありますように」というのである。日々「サラーム」すなわち平安を求めているのがムスリムである。

正義のために悪を討つ。そのために戦争やテロで人を殺してもやむを得ないと考えているのが歴史であり、現実であろう。しかし戦争やテロは神の意思に反していると思う人が圧倒的に多数派であることは言うまでもない。

私の老後は「人生は快樂」だと世界漫遊すること60数回、90数ヶ国に及んだ。旅三昧で世界を「観た」ことは、すなわち世界を「感じた」ことであった。旅によって民族や国々の歴史や宗教を知り、戦争の原因等も我ながら或る程度は認識してきた積もりである。

今次のテロ事件で惨憺(カンタン)たる被害を蒙った米国には1976年の建国200年記念を最初に数回訪れ、貿易センタービルにも脚を運んだ。また今回の事件の根幹ともいえるイスラエル(パレスチナ暫定自治政府成立前)には1985年、アラビヤ半島諸国には1994年、イランには1995年、パキスタンには1978年を始め5回、中央アジア地区には1975年、中国・西疆ウイグル自治区には1985年に足跡を残した。

今回激しい戦火に見舞われたアフガニスタンは未踏の地だが四周の国々には訪れている。中国・唐時代の僧「玄奘三蔵」(ゲンジョウサンゾウ、602-664)の「大唐西域記」に書かれている「大月氏国」(ダイゲツシヨク)はアフガニスタンであり、概要は把握(ハク)している積もりである。

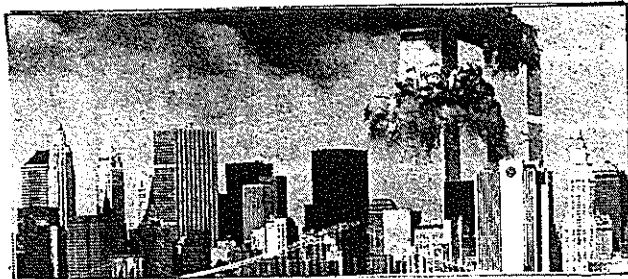
宗教について考えたのは、宗教そのものへの興味もさることながら、それが社会に及ぼす影響が大きいからであった。その影響から論より証拠だと世界を飛び回り、見聞の旅に取りつかれた。

5年半前の胃癌手術の失敗による抗生物質の多投が原因で五感が喪失し、その延長線だろうか、昨年春ころから四肢が痺(シビ)れる末梢神経障害症状が現れ、一時は寝たきりの病状となって、再起不能を覚悟した。しかし鍼灸(シキョウ)の先生の献身的な御努力により、一縷(イチル)の光明が見えてきた。一日2~3時間程度ならばキーが叩けるだろうと、春三月から「春秋に義戦なし」と題して拙文を綴(ツヅ)り始めることにした。

世界を漫遊したものの生翹(ナマガリ)りであるとともに、それは「一斑を見て全豹をト(約)す」に過ぎない。又、私の浅学と無知から見当外れが多いことも承知している。

人生最後と思う一知半解(イチハツカケ)の愚劣な文章は、蛙や蟬が鳴きわめくような騒々しい愚にも付かない文になってしまった。傘寿を過ぎた耄碌爺(モロクジイ)が恥も外聞も気にせず、頭巾(カブ)で頬被(ヒカム)りして綴(ツヅ)ってみることにした。

(下の写真はテロが乗っ取った航空機が突入し炎上する世界貿易センタービル)



『テロと戦争』

私が未だ体力があったころの散歩コースの中に、真狐池(マコエ池)という周囲約200㍍の湖水があった。松籟(ショウライ)の静寂な湖面にはいつも七羽の家鴨(アヒル)が悠々閑々(ユウユウカンカン)として泳いでいたが、じっくり観察していると七羽の家鴨は常に四羽と三羽に分かれていた。

初めのうちは二群になっていることに特別な関心はなかったが、長い観察の付き合いの中から、彼女らの分かれこそ、平和に見える中にも争いの何物かが存在しているように見えてきた。人類の社会に於いても人が住む所には争いが絶えないことを教えていた。

昭和62年(1982)にパプア・ニューギニアに旅行した時のことであった。小型飛行機をチャーターして中央山脈の熱帯雨林を旅行中、男女とも局部を隠すだけの真ん裸の二つの部族が原始的な弓矢で武装し、殺し合いをしている場面に遭遇(ウケウ)した。何が原因か解らないが、一方の部落の一人が殺されると、必ず片方の部族が相手方の一人を殺すまで復讐するという習慣があり、血なまぐさい殺戮(サツリ)事件の惨状を眼の当たりにした。

結局、何れの国の歴史を繙(ヒト)いてみても「人間の本質は勝負する動物」であった。

「戦争」とは、武力を用いて争うことである。特に国家が自己の意思を貫徹(カンゲツ)するため他国家との間で行う武力闘争が戦争だ。中国の史記・秦始皇帝本紀に、戦争は武力による民族・国家間の争いだと記している。言わば民族の生存競争であり、双方の自己主張の衝突である。

「テロ」とは、テロル・テロリズムの略である。「テロル」は「恐怖の意」で、あらゆる暴力的手段を行使し、またその脅威に訴えることによって、政治的に対立するものを威嚇(イカ)することである。「テロリズム」とは、一定の政治目的を実現するために暗殺・暴行などの手段を行使することを認める主義を言う。「テロリスト」とはテロルに訴えて自分の政治目的を実現させようとする者のことである。

今回の大惨事の9、11同時多発自爆事件は国家間の闘争でないから、テロ事件と呼ぶのであろう。現代の戦争は、どれほど悲惨であっても、制度の上では「許される暴力」であり、テロは制度外の「許されない暴力」だとされている。だから国家単位の戦争であれば、報復も非難も可能である。しかしテロという行為は恐ろしいだけでなく、如何に卑怯で厄介なものであるかを実感した。そして我々が知らなければならないことは、自らを殺してまでも為し遂げなければならない「正義」があることである。今やテロは既に「戦争の一形態」となっている。

古代中国の兵法書「孫子」の最初に、「兵は国の大事なり。死生の地、存亡の道、察せざるべからず」と記しており、最も慎重(シツウリ)に考えなければならないと諭(サ)している。我々は身を以て戦争を体験し、戦争は痛恨の至りだったと反省している。

孫子にはまた「兵は詭道(キウダウ)なり」と記している。詭道とは、いつわりあざむくような、正道ではない方法・戦術のことである。生か死か、繁栄か滅亡かの戦争(戦闘)は常道では勝てないと教えており、テロも含まれていると推察する。即ち戦いには「定石(ジョウセキ)」がないのである。負ければ死あるのみが戦いであり、「いかに生きるか」が戦いである。だから手段を選ばないことも戦いの実相で、負ければ何にもならないのである。これが凄惨な戦闘体験者としての教訓である。

米国は第二次世界大戦緒戦(フセツ)の日本軍の真珠湾奇襲をテロだと言い、日本は終戦間際の米軍の広島・長崎への原爆投下を、無辜(ムコ)の民を殺戮したからテロだと言っている。人間は自分の痛みしか解らず、つまるところは自分の都合の良ように解釈するのである。

正義感だけにとらわれていては戦いに勝てない。そこに策謀・奇計の深謀遠慮(シホクエンリョ)が生まれ、畏(ヲ)をしかけて敵の盲点を衝くのが実戦である。阿鼻叫喚(アビョウカン) の実際の戦闘を身を以て体験した一人として、「戦争」(戦闘)や「テロ」を言葉上だけで区別することは肯定できない。あの自爆テロの光景は、我々が敢行した歩兵隊の突撃や神風特別攻撃隊のような精神的なものを伝えていた。

「正義」

歴史は戦争を含めて、人間社会が時間の経過とともに移り変ってきた過程と、その中の出来事を或る秩序と観点のもとにまとめた記録・文書である。しかし歴史は「勝者の綴った歴史」であり、「時の権力者」が自分に都合のよように書いたものである。だから歴史はそのことを前提にして考える必要がある。「勝てば官軍、負ければ賊軍」と言われているのは、この道理をうまく表現した名言であると思う。

異国の地で敗戦を迎えて屈辱(クツヨク)を肌で感じ、戦後の苦境をなめた戦争(戦闘)体験者達が、戦勝国に憎悪(ソウオ)・卑屈(ヒクツ)・復讐(フクシユ)などという感情が無かったと言えば嘘である。しかし昨年(2001年)の9月11日に発生した同時多発自爆事件について言えば、米国は自分たちの行動を是が非でも正当化しようとしたと感じている。大東亜戦争(太平洋戦争)に於いて米国は正義の国で、日本は野蛮な国だと排斥(ハイキ)したのと同じように感じたのであった。

戦争はみな自分の方が正しいと主張し、自分の戦争だけが正しく他国の戦争は悪い戦争だと宣伝するものだ。世界には189もの国家があるから、189の異なった正義が存在することになる。正義は人間一人ひとりによつて違い、国によっても違う。だから正義という感覚で物事を捉えると、間違いが起こることを念頭におくべきである。

常に己の正義ばかりを正当化しようとする、他の国家・民族と正常な関係を維持することは出来ない。そこで仮想敵国を作っておかないと国家が成立しないのが米国である。その歴史は欧米諸国が繰り返している。第二次世界大戦時の日本やドイツ・イタリア、戦後の中国・北朝鮮、冷戦中のソ連を眼の仇(カキ)にしたきた。

今回もまた文明の衝突だと呼び、自分達が正義だと主張するのは彼らの常套手段である。そしてイスラムをテロ国家、悪の枢軸(スウツク)と決め付け、自国民や同盟国の正義感を養成してきた。

世界最大の核保有国であり武器輸出国である米国は、今や地球を取り巻くように世界各地に米軍を駐留させ、米国に刃向かうものは悪だとする一国覇権主義の超大国である。

「霸道」とは武力・策略などで世界を支配することで、「王道」と反対である。世界の全ての人たちが米国の正義に同意する訳がないことを、自覚した欲しいのである。第二次世界大戦で敗れた我々は侮辱(ブヨク)を嘯(カ)みしめながら、「戦争とは戦勝国が正義の名によって裁くものではない」ことを学んだ。同盟国(私は隷属国だと思っている)の一員として「正義」に就いて私見を簡単に述べた次第である。

「報復」

9、11の同時多発自爆テロ事件から既に半年を経過した。現時点において私の脳裏に強烈な印象として刻まれているのは、ブッシュ大統領が最初に全世界に向かって獅子吼(シウ)した「十字軍」という言葉である。これはキリスト教とイスラム教の全面対立に発展すると言うことで、誰かに注意されたのか直ぐに取り下げた。曰(イハ)く付きの発言であった。しかし彼の本心から出た本音であることは間違いなく、敵はイスラムだと断じたのである。

狭義の「十字軍」は、11世紀来から13世紀にかけて、ヨーロッパのキリスト教徒が結成した遠征軍のことである。聖地エルサレム(イスラエルの首都)をイスラム教徒から奪還することを目的としていた。しかし数回にわたって行われた遠征も当初の目的を達成することは出来なかった。

広義の「十字軍」は、中世キリスト教徒が行った地中海諸地域をイスラム教徒から開放する意味や、巡礼団による自発的な遠征を言ったものである。ともにイスラム攻撃であった。

「報復」とは「仕返しをすること」であり、同様な行為をすることである。米国大統領は最初に報復だと言い、後に「これは自衛のための戦争」だと言い換えている。しかし最初に述べた言葉が本心であり、間違いなく報復であった。「テロ」は国家が相手ではない。戦争は国家が相手であることに気付いてから米国は自衛のための戦争だと称した。同盟国には集団的自衛権による協力を求め、日本も安保条約から協力を踏み切った。

ユダヤには「眼には眼を、歯には歯を」という言葉がある。だからユダヤとパレスチナとは絶え間なく報復を繰り返している。キリスト教では、いかなる正義といえども裁くのは「神」だけだと言われている。即ち自ら「報復」行動を取ってはならない。報復禁止である。

ブッシュ大統領は「責任ある者を発見し、裁きを受けさせる」と言明している。彼が言う「裁き」の意味は当然、軍事的な制裁のことである。するとまた「軍事制裁だけでは報復が報復を呼び悪循環に陥りかねない」ことになる。

テロは絶対に許すことのできない犯罪である。しかし武力による報復戦争も亦、犠牲にされる無辜の人々の無念と悲惨な死を思うと、同罪であると考えたいのである。テロ集団の挑発よりも、さらに米国主導の世界戦乱には同意し難いものがある。後日になって大統領は「報復ではなく正義を求めるために」と、仕掛け人はイスラム原理主義者だと盛んに述べ、前言を有耶無耶(ウヤムヤ)にってしまった。

ここで若し、テロを戦争と言えるのかどうかと問題を突きつけられたら、米国は狼狽(ウバイ)しただろう。それをブッシュ大統領は「新しい戦争」だと誤魔化(マカ)してしまった。テロなら警察の領域であり、軍隊を出動することはできない筈である。21世紀型の「新しい戦争」ということで同盟国は続々と協力態勢を採ったのである。

復讐(フシウ)といい、それに対する報復といい、それらは全てテロではないだろうか。ソ連を通じて終戦を希望していた末期症状の日本に対し、実験に成功したばかりの原爆を投下したトルーマンは、隠れ蓑(カバ)を着た「テロリスト」であったと思っている。日本の各都市の非武装地域を猛爆し、非戦闘員を多量に殺戮したことは、戦闘行為ではなく完全なテロ行為であった。一時の感情論的な報復的軍事行動は、事態を悪化させるのではないかと心配するのである。

これまで記述したことの多くは米国の「ご都合主義」を批判する記事となった。しかし私はオサマ・ビンラディン氏たちのイスラム原理主義者によるテロを強く批判するが、これを決して擁護する積もりは全くない。聾(ツボ)の私に入ってくる情報は耳からの情報は何一つない。凡てが新聞や雑誌類の活字からのもので、それもほとんどがアメリカ発のものばかりである。そのために、それに対する私見が多くなったのは当然な成り行きである。

結論として述べると、①報復は報復を呼ぶだけである。ビンラディン氏はイスラエルの親分はアメリカだと信じている。米国は政治・経済界の指導者だけでなく、宗教界を含めた全ての指導者たちが真剣な行動を開始すべきであり、宗教外交の重要性を強調したい。②テロは絶対に許されるものではないが、それに対する軍事的報復では、イスラエル・パレスチナ問題を見れば解る通り、怨(ウラミ)骨髄(ツツイ)に徹(ツツ)す積年の抗争は解決されないのである。

「原理主義者」とは「根本主義者」のことである。物事を成り立たせる根本となる決まりが「原理」である。多数決の原理、相対性の原理などと言われるように、世界や現象の原因となる根本要素が原理主義だと私は理解している。(イスラム原理主義に就いては後記する)

ビンラディン氏たちをイスラム原理主義と言うのであれば、アメリカが各種のことに対して自分の主張を世界に押しつけているのも又、アメリカ原理主義と言われても仕方がない。彼らの言う民主主義は世界に通じる万能薬だろうか。貧者や落ちこぼれの大きな歪(ヒズ)を生み出していることも忘れてはならない。

9、11テロ事件の根本原因は、イスラム原理主義と伝統的なアメリカ原理主義の衝突だと私は思っている。地球温暖化防止の京都議定書の問題にしても、世界の趨勢(スケイ)に米国だけが反対していることを考えれば、アメリカ原理主義も理解できるのではないだろうか。世界の国々、人々の中には、表立っては「テロ撲滅(ホツマツ)賛成」と言っているけれども、個人的な気分としては「すかつとした」と言う人も決して少なくはないだろう。

「怨みは怨みによって果たされず、忍を行じてのみ、よく怨みを解くことを得る。これ不変の心理なり」という仏教聖典の一例を掲げ、終わりなき報復戦争の終結を願うものである。

ここに本年1月9日の新聞記事を掲載しておく。米フロリダ州・タンパの高層ビルに15才の男子高校生が操縦した小型機が突入した。高校生は自殺覚悟で故意にビルに衝突したと警察は断定した。ところが彼の遺体のポケットから米中枢同時テロの首謀者とされるウサマ・ビンラディン氏に共感し、同時テロを支持すると書いた内容のメモが発見された。彼の担当教師は「同時テロについて討論した際、多くの人命が失われたことに怒りを表していた」と、言っている成績優秀な高校生であったと評している。しかし自殺覚悟の行動は彼の本心だったと誰もが信じているだろう。国民にテロ肯定論が芽生えていることは確実性が高いと思われる。

純真な高校生の意見は価値甚大だと推察している。超大国米国が国際社会から支援を受けると自認する反テロの戦いは、見えないテロ組織「対」国家という「非対称型」であることから、「新しい戦争」と称し、ブッシュ大統領は忍耐強く長い戦争になると宣言した。

しかし米国による一極支配構造は、もう成り立たなくなるのではないだろうか。武力や経済力が圧倒的に世界一で、唯一の超大国という地位は変わらなくても、それだけで世界の諸問題が解決する時代ではなくなった。勝手なことは出来ない時代になって来たのである。大統領に外交政策はあるのか、彼の知的資質に疑問がないのだろうか。

「無知と誤解」

イスラム教は今日の世界の中で大きく誤解されている。時には歪(ユガ)められた解釈がなされているのを見ると、多くのイスラム国家に足跡を残してきた私にとっては、胸が痛むことばかりである。

アメリカ大統領が驕(ワ)りたかぶりながら、無愧(ムキ)になって烈火のように怒り、イスラムとの戦いではなく、テロリストとの戦いであると主張し続けなければならないのは、如何に世間一般ではイスラムが誤解され、偏見に満ちた眼でみられているかを、端的に表しているように思えてならない。

人間は弱さや狡(カ)さに寛容になってしまい、他の宗教の影響下にある人にとっては、徹底した自分自身に厳しいイスラム教が、とても恐ろしいものを感じられるのかも知れない。私はイスラムの信者でもなければ宗教の専門知識もない。ただ十数回もイスラムの世界に足を運んで遍歴(ハルキ)しているから、一般の人と比較するとイスラムの強烈な魅力を知っている。また同時に、イスラムの価値観や感性に対して大きな考え方の隔(ヘリ)たりも抱いている。

日本人は古来から緑に恵まれた森の住民であった。だから灼熱(シヤクネツ)の太陽に照らされた砂漠の遊牧民から生まれたイスラム教に対し、強烈な憧(アガリ)と恐怖を感じているのではないだろうか。砂漠の思想とも言われるイスラム教は我々にとって最も理解し難いものの一つである。しかしそこに魅力があると私は考えている。

不毛の砂漠だからこそ神を頼る以外に何も無かったのであろう。即ち何の宗教も魂の休憩場であり、希望であり、不幸な人々の頼みの綱であるはずだ。その異なるものに対する態度が、これからの世界を考える上で重要になってくるのである。異なるものを拒絶するのではなく、また媚(コ)びるのでもない。理解したつもりになって、それ以上に知る努力をしないのも相手に対して無礼なことである。

肝心なことは相手を無理に理解することではなく、自然に受け入れることなのかも知れない。自分と同じ類(タガイ)の人間しか受け入れがたい性質を持つ人間が、自分と違うものをどれだけ受け入れられるか、その根本と忍耐と知恵こそが、宗教が本来、意図していたものだという気がするのである。

それらの意味に於いて、現在も世界で引き起こされているイスラム原理主義派のテロと、それに対する対応は、特別に現代を象徴する問題であるように考えられる。しかし現実には互いに自分を主張し、異質な相手の論理的な矛盾を探り、言質を取り、自らの正当化を画策し、相手を排除しようとして、国際世論を味方につけることだけに国家戦略を注いでいる。

現在の世界の争いが直面している根源は貧富の差から派生している。それから異なる宗教が衝突してテロ事件にまで発展した。これからの世界は力尽(チカラヅク)くで相手をねじ伏せることで解決できない時代となっている。

戦争肯定や戦争反対、聖戦だとか報復だとか、そのような掛け声に世界の良識のある人々がついて行く時代は終わったのである。民主主義を声高く叫んでも所詮は人間が作ったもので、決して最高最善なものではなく、自分本位の平和主義であってはならないのである。世界中の全人類が望む大切なものは金の量ではなく、幸せの量である。

「環境」

文明の基となる環境や気候風土、その風土に生きてきた連綿と続いている人間生活の歴史を理解することもなく、現在の物質的文明の価値観だけによって現象を見ると、各文明を理解することは出来ない。

私が自分の足で見てきたアラビヤ半島から中近東一帯、エジプトからモロッコにかけての北アフリカ大陸、中央アジアからパキスタン地域、中国・西疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠などを回顧すると、一般の人たちは前記したような「砂の文明」を理解することは不可能だと思う。その砂の文明が育てた宗教、イスラムの求心力となっているのは血縁関係であり、その団結心の強靱なことは恐ろしいものがある。

日本の国土には河川が至る所に流れているから、怨みを「水に流す」という言葉がある。しかし砂漠の中には流れる水はなく地下水だけであり、怨みを水に流すという意味も通じない。

神の概念自体もキリスト教の神の概念と、イスラム教の神の概念、ユダヤ教の神の概念、多神教、あるいは仏教等、神や仏の概念は土地土地によって違い、全ての文明も土地によって異なっている。そして自分の信仰する神の方が上だと感じている輩は始末におえない。

歴史観と文明観、風土にまつわる自然観を比較しなければ、何も見えてこないのである。何も見えてこないのが今回の同時多発自爆テロ事件であり、これが新しい戦争の実相である。自然の形態や、そこに生活する人々がどういう文明を作っているのか、どういう宗教を信じているのか、更に近代化をどういう形で導入しようとしているのか、等を考えなければならない。

世界は欧米型の近代国家の枠組(ワガミ)みの中だけに生きていくのではなく、生きられない人々が多くいることを忘れてはならない。近代国家の枠組みに入らないから捨ててしまうと言う発想は、言語道断であり、残忍と言わなければならない。

このことを地球上の人間が真剣に考えながら対処していかないと、テロの根絶どころか、テロの増発を促(ワガ)すことになってしまう。21世紀に生きていく人間がこのまま進めば、あらゆる意味のテロが続出する危険をはらんでいると思う。20世紀に経験したテロと違うことを肝に銘ずべきである。

テロを近代的な武力で押し込んでしまっても問題が解決しないことは、前記した通りである。ビンラディン氏が「私の血の一滴が流れると、それによつて第2の私が現れる」と言っていたが、そういうことになることを心配している。一方ではテロだが他方では殉教者なのだ。

各々の文明はどうしても価値観が異なり、行動様式も違う。又それぞれの歴史や文化が違うのだから当然、社会の組織も秩序も感覚も違ってくる。要点はそれぞれに棲みわけ、分化して治めていくという形をとるべきである。米国が世界を支配したいのであれば、アジアはアジアの国々が、欧州は欧州の国々が、アラブはアラブの国々が、米州は米州の国々が纏(マ)めていく、という形で世界の支配を考えない限り、必ず無理が生じてくると思うのである。

彼らが卑劣極まるテロをなぜ敢行したのかという事実を見るだけでなく、少なくとも数世紀以前までの世界史を読み直して欲しいのである。アメリカの世界戦略が、米国を頂点にしたピラミッド型を希望しているとすれば、その夢は必ず狙われるところであろう。世界は広く盲従(マ)する国ばかりではないのである。

『テロと宗教』

9・11米同時多発自爆テロが宗教を介して、宿命の永久戦争の世紀にならなければ良いがと心配しながら、我が手指は『テロと宗教』に就いて書くように滑って行った。特別に宗教を勉強したこともなく、特別な宗教の信者でもない私が、あのテロ事以降、かって訪れたことのあるイスラエルとパレスチナ自治区（当時はイスラエルの軍事占領下）のことが忘れられない。

毎日のようにパレスチナ開放機構（PLO）の過激派がイスラエルに対して自爆テロを敢行し、これに対してイスラエルは強力な掃討作戦の報復を繰り返し、尊い人命が犠牲となっている光景は見るに忍びない。この根本原因は一種の文化と言える宗教対宗教の戦争である。

この拙文を書き始めた3月に入るとインド西部グジャラート州で、インドのヒンズー教徒の乗車した列車がイスラム教徒によって放火され、暴動となって死者が485人に達した。インド（ヒンズー教）とパキスタン（イスラム教）は私も訪れたことがあるカシミールの問題で、テロによる紛争は絶え間がない。これはテロの域を越した宗教戦争である。

しばしば宗教は形が出来上がると、宗教本来の心を大切にしようとするよりも、他の宗教に対して自己の正当性や優越性を主張し、組織や制度を守ることに勢力の大半を費やすようになる。それがテロや戦争に発展していくのだ。ユダヤ教もキリスト教も「旧約聖書」を幹として生まれた宗教であり、その後のイスラム教の発生も旧約聖書を全く無視しては考えられない。

ユダヤ教は偉大な経典を持ち続けたために、国が滅んで民が四散しても、誇りと団結を持ち続けたから再建国が出来た。キリスト教は省略するが、イスラムの「コーラン」を一読すると「旧約聖書」が約8割、「新約聖書」が約2割である。これはムハンマド（英語読みはマホメット）に神が乗りうつり、独自に解釈を行ったという印象がする。

信仰の世界である宗教は仏教であろうがキリスト教、イスラム教、ヒンズー教であろうと、真理は一つ、根本は一つではないだろうか。しかし現実には嘆かわしく理想と異なつて反目の連続である。私は宗教が政治に関係すると「ロク」なことがないと思っている。だから「宗教はアヘンである」とカール・マルクスが言ったのであろう。

冷戦時代のあと民族にまつわる戦乱、宗教の名の下に引き起こされたテロや紛争が際だって多くなってきた。それとともに民族的な正義が声高々と主張され、宗教的な「憎悪(ソウイ)」がむき出しの顔を表すようになった。その趨勢(スウエイ)が20世紀から21世紀に向けて加速されている。パレスチナの宗教対立紛争から米国同時多発テロへと展開した歴史は、何のような結果に落ち着くだろうか、正に21世紀は不気味に動くかも知れない。

2001年9月11日は世界情勢をテロが変えたと言える。近代世界の独裁者ともいうべき米国は、内に愛国主義、同胞の助け合い、外に向かつてはなりふり構わず積極介入に変容を遂げたようである。それが何時まで続くのか、世論というものは予測が不可能である。

『日本のマスコミ用語では「ゲリラ」と「テロリスト」は混同されているようだ。テロリスト（3頁参照）という言葉は新約聖書時代からあるらしく、今日のような意味で広まったのは19世紀のロシアの暗殺者ブームからである。「ゲリラ」はスペイン語で小戦争の意。敵の後方や敵中を奇襲して混乱させる小部隊、遊撃隊のことである』

「なぜ宗教はテロ集団を生むのか」

オウム真理教事件が、世界中の人類が釘付けになった9・11テロ事件の一つの魁(特効)となったような感じがしている。それは事件が特異であるだけでなく、真理的に解るような気がするからである。人間の中にある破壊願望を刺激している部分は、悲しい存在だが残酷である。地下鉄サリン事件のとき「聖なる狂気」という言葉がはやったことを覚えている。宗教は現実の世界をはるかに超越している面があるから、我々の常識では捉(とら)えられないばかりか、予測もできないものである。

自爆テロ事件以来、「21世紀はテロリズムの時代だ」と騒いでいる。正面装備だけではアメリカなどの先進国の軍事力に対抗することは不可能である。弱者の方にとって自己の政治的な主張を繰り広げていくには、どうすれば良いのか。その一つは「テロ」であり、他の一つは「宗教」などの別な思想体系によって、新たな信念や幻想を広げていくことであろう。同時に両方を発進させる方法も編(7)み出されるだろう。

通常は「威圧的な脅迫手段によって自分の目的を押し進めようとする者」を「テロ」と定義していると前記した(3頁)が、今までにはナチズム、スターリン主義等があった。日本では忠臣蔵、幕末の井伊大老暗殺(桜田門外の変)、昭和5年の浜口雄幸首相・東京駅ホーム狙撃事件、5・15事件、2・26事件、70年・よど号ハイジャック事件、72年・岡本公三らのテルアビブ乱射事件、95年・オウム地下鉄サリン事件等がある。第二次世界大戦末期の日本軍の「神風特攻隊」も或る意味(当時の日本・神国信仰)ではテロと言えるかも知れない。

どうして「カルト」(宗教的な崇拜。転じて、一部の集団による熱狂的な支持)が宗教という分野から出てくるのか。長い伝統のあるイスラム教、キリスト教、佛教等の中から、どうしてテロ集団が出てくるのだろうか。そして新しい新興宗教集団からでもある。すなわち宗教の総べてからと言えるようだ。

宗教には神秘的な体験、いわゆる宗教体験を経(8)ないと釈迦なり、イエスなり、イスラムのムハンマド(英語よみマホメット)が本当に伝えようとした世界が、なかなか解らないという側面を持っている。

人間には食欲、性欲、生存欲の三つがあり、先進諸国は日常的生活では満足している。しかし人間は自分の五感だけでは判らないことが一杯ある。それが目に見えない第六感であり、第七感であり、次々の感があることが分かってくる。現代社会のように目に見えるものだけを大切に、金に換算されるものだけを重視すると言う傾向が強くなると、見えない部分の「観」や「識」が傷ついてくるのではないか。

神秘的な、超自然的なカルト現象は目に見える世界だけを重視している。一方の目に見えない世界からの復讐といか、バランスを取り戻そうとする現象も、深い根を持っていることも忘れてはならない。

洋の東西を問わず靈魂とか霊の世界という言葉が、否定されながらも何回も復活している。それは人間にとって見えるものだけが総べてではない、と言うことを意味しているようだ。宗教の見えない部分の特徴の一つには、「聖なるもの」とか「純粹なもの」とかと言われる領域がある。この領域を求める心が人間の心の中に存在し、正義感に燃える青年の中に多いようだ。

この「聖なるもの」に対する衝動や要求に対して現代社会は答を出していない。結局は金だけが総べてであるような社会である。「聖なるもの」の世界を求めるものに十分、応えるだけのものを与えていないと思うのだ。

このような背景から、このような要求を満たしてくれる、心の衝動に突き動かされる人々が、神霊感情を満たす宗教団体に吸収されていくのではなからうか。

近代社会ではカトリック集団によるプロテスタント集団への無差別殺害事件が、頻繁に北アイルランドで起こっているから、宗教的なテロが無かったわけではない。「悪に強い者は善にも強い」という言葉があるように、人間の中には善を求める心と悪を求める心が同居しているのである。宗教的なテロリズムは不完全な宗教者の教養の所産であり、今後も、このようなテロ行為が起こされると予想できる。

釈迦にしても、キリストにしても、ムハンマドにしても、内心の世界の中に存在する悪魔と戦っている。そして、その戦いに勝利している。そのため彼らの伝えるものは人の心を心底から動かし、不朽の力を持っている。

悪の主な内容は既存の秩序の破壊だけである。世界の破壊を目標にしている。だから一気に新しい社会を実現しようとする急進的な動きとして現れてくる。大急ぎで社会を変革しようという集団的な了解が、教祖やそれを取り巻く幹部たちの間に成立すると、思い切った行動に出てくるのである。これが同時多発自爆テロではないのか。

宗教と民族が歴史の彼方へ追いやられるどころか、世界の表面に躍り出てきたのである。文明の興亡の歴史は、いつでも民族と宗教の果たした役割を明らかにしてきた。今こそ国際テロの歴史的背景をさぐり、一日も早くその病巣を除去しなければならない。

そのためには宗教の認識の重要性が要求される。特に中東の複雑な宗教や人種、国際情勢は怪奇であるから、日本の報道機関は我々一般視聴者を懇切丁寧(コンツェイネ)に理解さすべきである。今日ほどイスラムの認識の欠如を感じたことはない。我が国では「剣かコーランか」という偏見しかなく、文明の衝突などという前にイスラム文化を知る必要がある。

「テロは弱者に残された唯一の武器」ではない。不明な点が多く存在する21世紀を平和な世紀にするために、文明の「衝突」から「対話」へと進んで欲しい。

(右の写真はテロリストの攻撃後、崩壊し始める世界貿易センターの南側タワービル)



「原理主義と宗教」

戦争はこれまでのように、或る国が別の国に攻撃を仕掛けることではない。世界にはグローバルな規模でテロを実行できる勢力が多数存在しているのである。彼の9・11テロの衝撃で慌(アワ)てふためいたアメリカの姿、否、全世界の人々の驚愕(キョウガク)する光景を見て、あのようなテロは、イスラム原理主義者だけに限られるとは思えなかった。

白人対有色人種、強者対弱者、権力者对被権力者、大国対小国、地域対地域、異教徒間の対立、貧困や環境、無知や嫉妬(シツ)といった問題とともに、「原理主義と世界主義」の対立は、21世紀の姿となるかも知れない重要な問題である。

原理主義者は「生きる道は一つ。他の者は私に道を譲(ユズ)るべきだ」という考え方である。一方の「世界主義者」(コスモポリタン)は多様な文化の存在を認めあい、対話と共存が必要であると主張している。

世界の現状を眺めてみると「宗教の原理主義」だけではなく、「民族の原理主義」や「国家原理主義」等も存在している。いずれも常に暴力とつながって極めて危険な存在である。一般に原理主義は若者たちを巻き込み、一種の狂信主義に転じる特徴があるようだ。この点は悲哀の戦争に明け暮れた我々も経験済みで、何時までも懺悔(ザンケ)として忘れられない。

地球は今こそ、世界主義的な社会を造りあげる時ではないだろうか。世界に多くの問題があることは当然だが、世界環境はかつてないほど相互依存の度合(ドアイ)を深めなければならない時である。それは宗教・経済問題だけでなく、地球温暖化防止・京都議定書等の批准問題もまた然(カ)りである。この問題で反対している米国には同意できず非難すべきだ。

原理主義の「原理」を辞書で調べてみた。大漢語林によると、①おおもとの道理、iものによって立つ法則、ii認識や行為の根本前提・規範。大辞林によると①物事を成り立たせる根本②世界や現象の原因となる根本要素、と書かれている。

結局、原理主義者は根本主義者のことになる。即ち、あらゆる教義は磨きに磨けば原理主義になるようだ。だから原理主義はイスラム教だけに存在するものではない。キリスト教を始め総べての宗教には原理主義が存在し、各国々にはそれぞれの国家の原理主義がある。又、各国には反原理主義(日本で言えば反日原理主義、自虐主義等)も存在している。

宗教の信仰は行為の世界で欧米のキリスト教各派は、覇権主義国家群のようにして世界を植民地化してきた。そして現在のアメリカは「未開の民を導く使命がある」と言う思い上がりがあるように見受けられる。その傲慢(ガクマン)なところがアメリカ原理主義の原点で、それが今回のテロの原因の一つとなっている。大東亜戦争末期に広島・長崎の原爆投下やベトナムの枯葉剤投下も亦、一種の国家原理主義と言うべきであろう。

世界には様々な影響力をもった多様な勢力が存在している。イスラム教の内部も分化しているから、固定して9・11テロ事件は「文明の衝突」だと一口に決定することは出来ない。宗教の多様性は社会や集団の多様性を反映している。宗教をめぐる動きも、その教義にあるのではなく、宗教を利用する集団や彼等の解釈によって決まり、一般論だけで答えられない。

日本の宗教界は多少の問題があるにせよ、平和共存しているのは幸いだ。しかし突然変異のようにオーム真理教が国内を攪乱したばかりか、その影響力がイスラム原理主義者のビンラディ

ン氏にまで及んでいるとは驚きである。

かつてイスラム教は西欧諸国よりも進歩した文化を持っていた。彼等はイベリア半島（ヨーロッパ大陸の南西端部）を何世紀にも渡って統治していたが、キリスト教徒やユダヤ教徒たちと共存していた歴史がある。代数学などの様々な学問や文化・文明の源流となっていた。

文明には平和は長続きしなかった。全地球の表面で絶えずくり返してきた愚行が、即ち戦争であった。戦争は文明の仮面である。現代のイスラム世界の一部は近代を敵視している。近代化は墮落(タカ)をもたらすと見る人もいれば、他の文明が先行することに憤慨する人もいる。その結果、近代文明の利器を利用したテロ事件を起こしている。これが歴史が繰り返すという宿命かも知れない。歴史は実際の事実を記述するだけで、今の私には肯定も否定もできない。

反米テロの根底にあるものは何であろうか。唯一の超大国・大覇権原理主義国家に世界の人々が抱く感情は、間違いなく複雑怪奇である。称賛する一方で、敵意や妬(ネ)み、怒り、不信等がある。同盟国や友好国、隷属国の中にさえ、米国の衝撃(シウキ)を陰でいい気味だという感じが潜(ヒ)んでいる。

市民を狙ったテロはイスラエルでは常に起っているから、語弊(ゴヒ)といわれるが慣れている。しかし今次の9、11テロ事件はアメリカ国民にとっては「驚き桃の木、山椒(サシヅ)の木」で、心底から恐怖心を感じている。米英が肩をもつイスラエル（ユダヤ教・キリスト教）とアラブと兄弟国のパレスチナ（イスラム教）の紛争が、テロリストにとって格好の口実となっている。しかし実際のウサマ・ビンラーディン氏の対米憎悪は、彼の祖国サウジアラビアに米軍が駐留していることから芽生えたのである。

アッラーからの啓示をムハンマドが預言して書いたコーランは、イスラムをユダヤ教やキリスト教と兄弟の宗教として描写しており、1300年の歴史を持っている。そのような過去から見ると、少なくとも今回の9、11テロは極一部の過激派～原理主義者の卑劣な犯罪的行為であると認識しなければならない。

あくまでもイスラム国家群中の一部の原理主義者による戦争的犯罪行為であるから、軽率に「新十字軍」だとか囃(ハヤ)すのは嚴重に注意すべきである。

9、11テロ事件以降の米国の外交は変更したのであろうか。我々の最も注目することは、一国覇権主義を放棄するのかどうかであった。しかしアメリカは放棄するどころか、弾道弾迎撃ミサイル（ABM）制限条約から撤退したように、一国覇権主義を続けるだろう。間抜けな指導者だと見られたブッシュは何度か愚かな言葉を発したが、最近は少々慎重になったようである。とかくアメリカは余りにも自己中心主義が強すぎるのである。

「目には目を、歯には歯」というユダヤの言葉を5頁の「報復」で書いた。これは誰もが知っている言葉で、日本の諺だと思っている人もいないだろうか。これは、実は「旧約聖書」の「レビ記」には、次のように書いてある。

「人に傷害を加えた者は、それと同一の傷害を受けねばならない。骨折には骨折を、目には目を、歯には歯をもって、人に与えたのと同じ傷害を受けねばならない」

これを同害報復の原則というのである。復讐は何も生み出さないのだ。傷つけた方は相手に負わせたのと同じ傷を罰として受けなければならない。原理主義者も宗教を信仰する者も、この原則を遵守(ジュンジュ)して欲しいのである。

「イスラム原理主義」

イスラムとはアラビア語で「神への絶対的な服従」を意味している。この命名が象徴するように、イスラム思想の根幹は、神の命令とされるイスラム法に従って生きれば来世で天国に行けるし、逆らった場合には地獄を見るという信条にある。服従と天国、不服従と地獄が因果関係にあるとすることが理解される。

同時にイスラム教は、共同体が神の命令に正しく従っていれば、政治・経済・軍事・文化のあらゆる面で繁栄を続ける一方、神の命令に逆らった場合には存亡の危機に瀕(ヒ)するという確信を持っている。そこからイスラム原理主義への支持が生まれた。

歴史的に見た場合、「イスラム原理主義」の著しい高揚には一定の条件が必要になる。それは外敵の優勢あるいは侵入である。イスラムは元来ユダヤ教やキリスト教の誤りを正す完璧な宗教として自己規定しており、神はムスリム(イスラム教徒)にこそ栄光をもたらすと信じられてきた。こうした信仰のもとでは、外敵の優勢が共同体の現状に対する反省に直結せざるを得ないのである。

自分たちがイスラム法を守らなかったからこそ、外敵の優勢という天罰が下ったと考えられてきたのである。イスラム法の厳格な実施を求める「イスラム原理主義」が高揚される原因はここにある。まさに因果関係という概念の産物と言っていいだろう。

イスラム共同体を理想とし、腐敗した社会を是正して、イスラム法に基づいたイスラム国家を建設することを基本理念した国家は、現代ではイラン・イスラム共和国(1979年樹立)である。私は1995年にパーレビ国王を追放したホメニー体勢のイランを訪れて実感した。

「原理主義」は元々キリスト教用語を転用したもので、否定的な意味合いが強いことから、「イスラム復興主義」「イスラム政治運動」と呼ぶ研究者も多いようだ。これらは過激派(力による聖戦)と、穏健派(平和的手段でイスラム国家建設)に分かれ、エジプトに設立されたのが始まりであった。81年にサダト大統領を暗殺したのは過激派である。

現代における原理主義活発化の原因は？

1950～60年代はアラブ民族主義全盛の時代で、我々年代の者にとっては記憶に新しいことだ。エジプトのナセル大統領に代表される世俗的な政権は、アラブが団結することで西欧植民地主義に対抗する路線を歩んできた。

しかし第三次中東戦争(1967)でアラブがイスラエルに大敗したことなどにより、アラブ民族主義は急速に勢いを失った。さらにソ連崩壊で唯一の超大国となった米国の中東への影響力が強まり、欧米生活様式が流入し、伝統的価値観が崩れていく中で危機感を抱いた民衆は、アラブ民族主義に代わりイスラムに寄り所を求めるようになった。

こうした流れを受けて過激派の活動も活発化し、腐敗(フイ)政権としての現行アラブ政権に牙(カ)をむいた。90年代にはエジプトで「イスラム集団」が外国人観光客にテロを繰り返し、アルジェリアでは武装イスラム集団が、住民を巻き込んだ国軍との抗争を続け、約十万人が犠牲となっている。

この原理主義高揚の背後には、貧困や失業などの深刻な社会問題が横たわっている。弾圧だけでは、絶望した若者が武力闘争に走る構想は変わらないとの指摘もある。

過激派に対する一般のイスラム教徒の感情は？

「アラブの敵」イスラエルの後ろ盾(けん)である米国への反感といった民衆感情が、過激派テロの底流にあることは否定できない。しかし、イスラム教徒の大多数はテロの手法に大きな矛盾を感じ、社会の不安定化を強く懸念(けん)している。

1997年11月にエジプト・ルクソールで日本人など観光客ら62人を殺害した「イスラム集団」が99年3月、停戦宣言に追い込まれたのも、民衆の支持を完全に失ったからである。

だが、アフガン戦争(ロシアとの戦い～内戦)からの帰還兵も含め、こうした国内に居所を失った過激派の「残党」を吸収する形で「反米」スローガンのもとに、「国際テロ集団」を作り上げていったのが「ウサマ・ビンラディン」であった。

「ウサマ・ビンラディン」という人物？

1957年にサウジアラビアで生まれの当年44才で、身長190cm以上の痩せ型である。父親は同国最大の建設会社の総帥で、10人以上の妻がいる。息子の数は52人にのぼり、ウサマは17番目だったという。母親はパレスチナ人ともアラビア半島出身とも言われている。

ウサマはジェッダの高校を卒業後、名門アブドルアジズ国王大学に入学し、経営と経済学を学んだ。学生時代の彼は他の学生たちと同じく学業に励み、今日のような狂信的なものは一切なかったと言う。

1979年、ウサマ・ビンラディンの人生を決定づけるような出来事が起こった。ソ連のアフガニスタン侵攻である。アフガン戦争では同じイスラム国家であるという理由から、イスラム諸国から多くの若者が駆け付けて義勇兵として参加し、ムジャヒディーン(聖戦士)と呼ばれたが、ビンラディンもその一人であった。

彼は父親が巨大財閥という家庭環境を利用して豊富な資金を用意し、地形の険しいアフガン山中にブルドーザー数台持ち込み、病院や道路、トンネルなどを建設して頭角を現した。各国から来る若者の宿泊施設を建てたりして聖戦士の間で英雄視されるようになった。

ソ連が侵攻してきた丁度その年、イランでイスラム革命が起きてパーレビ王政が打倒され、イラン民衆の大熱狂がビンラディンの思想に影響したと思われる。

89年にソ連がアフガンから撤退すると、彼はいったんサウジアラビアに戻るが、彼の資金が国内の過激派に渡るのを嫌った当局は反体制派の先鋒とみなし、彼の旅券を没収した。

91年にスーダンにわたり道路建設、輸出産業、銀行設立などにより資金を調達し、徐々に国際テロリストへの道を歩んだ。それとともに、父親は彼を「許すべからざる人物」として一族から追放し、サウジアラビア政府も彼の国籍を剥奪(はくたつ)したから彼はアフガンに移った。

ビンラディンが率いるテロ組織「アル・カーイダ」(アルはアラビア語の定冠詞、カーイダは基地)は88年に設立された。当初の目的はアフガンに侵攻したソ連軍と戦うアラブ人義勇兵の訓練・指揮だったが、ソ連軍撤退後は米国やイスラム世界の腐敗政権の打倒に目標を転換した。アフガン国内に10ヶ所以上の訓練基地を持ち、アラブ各国から集まった人たちにテロ訓練を教育していた。

従来、ジハードのような原理主義過激派の活動目標は、自国の政権に打撃を与えることに限定されていた。しかしビンラディンが率いるアル・カーイダの特色は、そうした国境を超えた「世界イスラム革命」運動であるという点である。彼は新しい形の原理主義指導者である。

「タリバン」とは？ 「オマル」という人物？

対米同時多発テロの首謀者とされるウサマ・ビンラディンは、アフガニスタンを実効支配するイスラム原理主義勢力「タリバン」がかくまってきた。米国や国連はビンラディンの身柄引き渡しを求めたが、タリバンが拒否したため、米国は01年9月30日、テロ支援勢力としてタリバンを打倒する方針を決定した。

89年のソ連軍撤退以降、アフガニスタン（スタンは国の意）内戦は泥沼化した。そうした中でタリバンは94年、アフガン最大民族パシュトゥン人の神学生らを中心に設立された。

「タリブ」とはアフガンの最大部族・パシュトゥン人のパシュトゥー語で「イスラム神学生」を意味し、その複数形が「タリバン」である。このため、新勢力は「タリバン」と呼ばれることになった。その最高指導者オマル師はまだ30才代前半であった。タリバンはパキスタン軍部の支援を受けて勢力を拡張し、98年にアフガン全土の90%以上を制圧した。

01年3月には、世界的な佛教遺跡であるバーミヤンの巨大石仏2体を、「偶像崇拝を禁じるイスラムの教えに反する」として破壊した。唐時代の玄奘三蔵が訪れたガンダーラー遺跡の崩壊を、私もテレビの映像を眺めて落胆したことを覚えている。

今次の対米同時多発テロまでは、パキスタン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦の3ヶ国がタリバン政権を承認していたが、米同時多発テロ後、アラブ首長国連邦とサウジが断交した。

イスラム原理主義運動が共通して掲げる2大目標は、イスラム法と訳されるイスラム律法の全面適用と、イスラム世界の伝統的な政治システムである「カリフ」制度の復活であった。

「カリフ」とは、イスラム創始者でムスリム（イスラム教徒の意）が預言者と呼んでいる「ムハンマド」（マホメット）の後継者、あるいは代理人のことである。

カリフ制度は、この宗教・政治両面の最高指導者であるカリフがムスリム社会を統治する制度で、24年のオスマントルコ帝国が崩壊するまで実施されてきた。その再現復活であった。

タリバンは、96年、アフガン南部のカンダハルで大評議会を開催し、ソ連とのアフガン戦争で負傷した隻眼の最高指導者「ムハンマド・オマル」を、イスラム教徒の司令官の称号を与えた。即ちカリフの称号である。「オマル」を元首とするカリフ制政権であった。そのカリフ制が全土に普及するのは時間の問題であった。その最中に、タリバンが匿(かま)っていた国際過激派の原理主義者・ビンラディンのアメリカ中枢同時多発テロが発生した。

オマル師とビンラディンとの関係は、ビンラディンが1996年にスーダンを追われて以来、彼を「賓客」(ヒヤキ)として庇護(ヒゴ)し続けていた人物が、アフガンを支配する勢力・タリバンの最高指導者ムハンマド・オマル(59年生まれ)であった。

ビンラディンとは姻戚関係にあると言われるが、両者の盟友関係はむしろ、オマル師が北部同盟との内戦で、ビンラディンの率いるテロ組織「アル・カーイダ」のアラブ兵数千人の力を必要とするためだったとされている。しかしテロ作戦実行の際、ビンラディンは具体的な指示はせず、方向性を示すだけと言われている。

特記すべきは、タリバンがカブール占領後、直ちにイスラム世界の中で最も厳しいイスラム法を実施した。全ての女性は家庭外で働くことが禁止され、外出時は頭からブルカの着用を義務づけた。(右の写真のビンラディン、オマル)



『世界の宗教』

「宗教とは何か」

これまで『テロと戦争』『テロと宗教』について愚見を述べてきたが、それでは「宗教とは何か」という疑問が生じてくる。しかし宗教は「心のはたらき」の問題であり、私の如き者が軽々に論じる問題ではないと思っている。

世界の約90ヶ国を彷徨(めぐる)しながら歴訪してきた私は、それらの国々の極く一部の外面だけを生嚼(なまが)りするように観察してきた。そこで各国々の宗教の姿を垣間見(かまみ)して見ると、余りにも宗教が多く存在していることに吃驚(ビックリ)させられてしまった。

国々の歴史を繙(ひもと)く度に宗教に疑問を抱いてくると、宗教が戦争の原因の重要な要素となっていることに驚かされるのであった。戦争(戦闘)体験者の一人である私は敵弾下の戦場では気付かなかったことだが、人生末期の旅の影響により、世の中の宗教の一部に対し嘆(なげ)かざるを得ない心境になったのである。

宗教は歴史を通じて大きな社会の変動や危機、とくに戦争の原因となった時に騒がれている。今回の9、11テロ事件についても同様に宗教問題へと発展した。一体、「宗教とは何か」。或る辞書を見ると、「神仏など人間を超越した絶対的な存在を崇拜(すかひ)・信仰し、それによって人間の最高の幸福と安心が得られることを説く教え」と書いてある。その形態(けい)はアニミズムやトーテミズムなどの「原始宗教」、ユダヤ教・バラモン教・神道などの「民族宗教」、キリスト教・仏教・イスラム教などの「世界宗教」などの種々と説明している。

[アニミズム] は未開発民族のなかに残る原始宗教の一つで、動物・山・川など森羅万象のあらゆるものに、それぞれ靈魂があり、人格的な存在として取り扱う一種の世界観。原始的な思想の基本となる観念。

[トーテミズム] は未開発民族で、特定の動物などを自分たちの氏族の先祖や、または守護神として信仰する原始宗教。

上記の原始宗教を私はパプアニューギニア、ラオス、南アフリカ、ジンバブエ、ザンビア、カナダ、南米諸国、南洋諸島などで見ている。

現在の普通一般の日本人の間では、葬式や結婚式のときに世話になるのが宗教だと思っているかも知れない。このような日本人のあり方は世界的に見ると特別である。欧米でもイスラム諸国でもインドでも東南アジアでも、世界中のほとんどの国では、宗教は日常生活の中にすっかり溶け込んでいる。

では宗教は人間を幸せにするか。私は歴史を通観するたびに、この疑問に取りつかれてきた。宗教は人間の本性に反して戒律を押し付けているが、救い是一向にやってこないのではないだろうか。宗教を信じることのできる人々は幸いであると申し上げたい。

人の一生は間髪(かまつ)の間に決まると言う通り、戦いに敗れて信じるものを失った私は人生の落伍者だと甘受(かじ)している。心を集中することができる対象物が消滅して信仰心は消失してしまい、傘寿を超えた現在でも信じたいと思う特定の宗教は「否」である。

我々の大正一桁生まれの者は戦前派というか戦中派というか、戦争に明け暮れた時代に育って戦争に駆り出された運命の年代である。当時の日本国は天皇中心思想の「現人神」(アヒトガミ) (人の姿をしてこの世に現れた神。天皇のことをいう) 信仰が絶対であった。その信仰が日本国の中心的宗教として厳然と存在していた。戦後の人たちには「天皇教」とでも言って説明した方が理解できるかも知れない。

当時には勿論、日本民族固有の伝統的な伊勢神宮(祭神・天照大神)を頂点とする国家神道があり、日本に伝来してから1500年に近い仏教も盛んであった。

「現人神」(天皇教)、神道、仏教の中で教育された日本男子は、国民皆兵の法律によって軍務に服さなければならない義務があった。戦争となって命令が下れば、生と死が対決する生き地獄(ジゴク)の戦場に馳(ハ)せ参じ、阿鼻叫喚(アビョウカン)の極限状態の中に身をさらして、戦わなければならなかった。そして天皇のために命を犠牲にすることが最大の名誉であった。

私も中国やビルマ戦線に立つ運命に遭遇(ウケウ)し、多くの部下将兵を失った責任は重大であり、萬死(マンシ)に値すると責任を痛感している。その万事休(マンジキョウ)すという絶対絶命の時に於いても、私は神仏に祈りを捧げて加護を願ったことは無かった。それは尊い貴重な経験から頼れるものは宗教ではなく、我が身一つだけだと悟(ト)っていたからである。

当時の日本国民は老若男女を問わず報国心を重んじていた。特に軍人は最高の道徳が忠君愛国であり、天皇のために身命を捧げることが凡(スベ)であった。現人神である天皇に「すがる」という心は全く無く、全国民が犠牲的精神の一本であった。

では何故に命を捧げ捨てる心境になったのであろうか。それは小学校以来の教育の精華であり、軍隊の精神教育が生を超越して死に赴(オモ)かしめたのである。部下を持つ身ともなると、その重大な任務を遂行する責任に生きるため、率先して死を誓っていたのは当然であった。即ち我々が体験した軍隊は昔の武士道の流れを汲(ク)み、名誉を重んじる精神が旺盛(ワセ)いで、絶対的な使命感が要請されたのである。自爆テロの心中は察し得るような気がする。

幕末の黒船から新しく開国した明治政府は信教の自由を約束し、キリスト教などの布教は自由となった。しかし「天皇に対する忠誠心は絶対に確保したい」という考えから、政府は「神道」は宗教ではないと公式見解を発表した。

この見解の発表により、仏教徒にもキリスト教徒にも、凡ての宗教の信者に対し、天皇崇拜(スカイ)を強要できるようにしたのである。天皇は宗教の上に君臨(クワン)したのである。しかし、これは便法に過ぎなかったと私は思っている。

宗教上の「意義や言葉」は、その解釈の仕方により、あるいは時の権力者の意向によって、人の生き方が大きく左右されて変わってしまった。だから宗教を眺めたり考えたりする時には、この点を注目しなければならない。

これまでに記したことは「宗教とは何か」の設問に正面から応(コタ)えておらず、説明から大きく脱線してしまった。これは私には答えられない大問題の難問であるからだ。人間の幸福と安心を得られることを説く教えが宗教であっても、要訣は凡て自分自身が解決すべきことであり、戦争体験者として死を超越した心境の一端を述べた次第である。詳しいことは、吾が戦闘記や紀行文を再読することである。

続いて簡単に「世界宗教」「民族宗教」「原始宗教」について記してみたい。

「世界宗教」(三大宗教)

前5世紀に釈迦を開祖としてインドから生まれた仏教。1世紀にイエスを開祖としてユダヤ教から分かれたキリスト教、7世紀にムハンマド(日本では普通、英語読のマホメットと称す)を開祖として、アラビアの民族宗教からユダヤ教とキリスト教に刺激されて生まれイスラム教、これらが今日、「世界宗教」(三大宗教)と呼ばれている。いずれもその超国家的、超民族的な宗教共同体を基礎として伝道活動を行い、世界各地に多数の信徒を擁し、政治的にも社会的にも文化的にも多くの影響を与えている。それが共通した特徴とすることができる。

これらの世界宗教は、それまでの原始宗教や古代宗教とは異なって、それぞれが神話や呪術(ジュヅツ)の束縛(ソバク)から宗教・哲学を開放し、政治と宗教の分離を果たす一つのきっかけを与えた点でも共通している。特に人間の思想史上にこれらの世界宗教が与えた影響は大きく、国家などという地上の権威に縛(シバ)られない、新しい思想が出現したとすることができる。

① 仏教

仏陀(ブツダ)によって開かれた宗教である。仏陀は紀元前463年ころに出生し、80年の生涯ののち、前383年ころに入滅したと伝えられている。

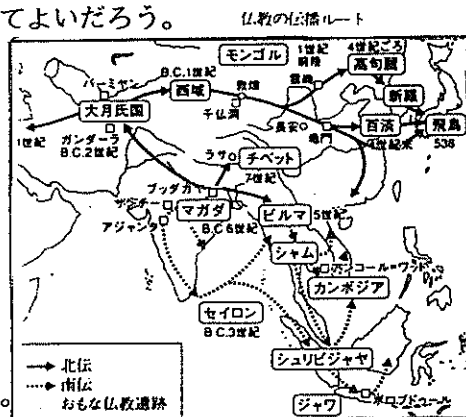
インドにおこり、ほぼアジア全域に広がったが、発展史的には原始仏教、部派仏教(小乗仏教)と大乘仏教に分別されているようである。また伝来の相違によって南伝(南方仏教)、北伝(北方仏教)などと区別されている。その上、伝わった地域の特異性や社会変動によって多種多様な信仰に展開している。

伝来の詳しい点については戦後18回に及ぶ中国旅行(北伝仏教)と、南伝仏教のタイ、ビルマ(現ミャンマー)、カンボジア、ラオス、スリランカ(旧セイロン)等の紀行文に記述してあるから、ここでは省略する。

【なぜ仏教には多くの宗派があるのか】等の問題を若干記しておく。

広く布教されている日本の仏教は中央アジアを通して中国に伝わり、韓国を経て伝来したと言われている。この過程で仏教はインドにあった要素をいくつか失い、中国風の要素を吸収しているから、日本の仏教は様々な要素の混合物と言ってよいだろう。

私はインド、ネパールで釈迦が修行したサルナートを始め各地を巡礼し、仏教に取り付かれてしまった。戦争末期当時はインド領土だったパキスタンのガンダーラ仏教遺跡も探索した。唐の玄奘三蔵(ゲンジョウサンゾウ)がインドから持ち帰って仏典を翻訳した西安の大雁塔を始め、更に西方の炳靈寺(ヘイレイジ)石窟からシルクロードの敦煌(トンクウ)・莫高窟(パコウクツ)、山西省の大同・雲崗石窟、河南省の洛陽・竜門石窟、四川省の大足石窟の五大石窟寺院を訪れ一段と仏教に心を寄せていた。



已むことを知らない私は仏教の表面だけでも齧(か)ろうと、山西省の仏教聖地五台山に登り、文殊菩薩(モンジュボツ)を始め東漢時代からの仏教の中心地を踏破した。続いて四川省の普賢菩薩(フケンボツ)の霊場・峨眉山(ガビザン)と安徽省(アンキョウ)九華山、浙江省(セツコウシヨウ)の観音霊場の普陀山(ワダザン)の中国四大仏教聖地も巡礼した。

中国仏教霊場の数は限りなく広がっている。浙江省の天台宗祖庭である天台山、曹洞宗祖庭の天童寺、山西省にある浄土宗祖庭の玄中寺、中国最古の古寺である河南省の洛陽・白馬寺等を訪れたが、余りにも数が多く省略する。(祖庭は場所の意味)

中国に伝わった仏教は、その後も途切(ト)れることなく経典が伝わり、隋・唐の時代には国家の支持もあって、儒教に匹敵する勢力に成長した。

【隋(581-619) 唐(618-907) はなぜ仏教を支持したのか】

古代の中国の統一王朝は儒教の地位が確定していたが、北方異民族の出身であった隋・唐は儒教に対抗するために仏教に帰依(キイ)したという。特に唐はシルクロード交易によって栄えたから、その政策は自然であった。

【仏教にはなぜ経典や宗派が多いのか】

中国に伝来した経典はサンスクリット語の原典で、次々とこれを漢訳した。しかし漢訳の仕方によって同じ経典でも何通りの翻訳(ホヤク)がある。翻訳者としては西域人の鳩摩羅什(クマラジヤ)が有名で、日本に伝わった重要な経典(法華教など)でも彼の翻訳である。彼の少し後に、西遊記で有名な玄奘三蔵も翻訳している。翻訳者が多い関係から、自らを中華中国というほどの中国の訳経は、インド仏教の成立とは別なものだという説もあるようだ。

不思議なことは、日本の仏教が経典を日本語に訳さないで、漢文のまま用いたことである。漢文だから日本人にとっては仏教経典はさっぱり理解できない。

玄奘三蔵(ケンジョウサンゾウ 602-664)は唐代の僧で三蔵法師の名で知られている。629年に長安(現在の西安)を出発し、西域から西トルキスタン、アフガニスタンを経てインドに入りナーランダ僧院で仏教を学んだ。帰国してから19年間にわたり、弟子たちとともに仏典の漢訳の大事業を行った。だから玄奘以前の訳を旧訳、以後を新約という。彼は「法相宗の祖」とされている。

いろいろに翻訳された仏教経典が持ち込まれたから、混乱したのは当然である。全てが釈迦ひとりの著述と信じていたから余りにも量が膨大で、内容にも違いがあり過ぎたようである。(禅宗はインドではなく、中国で生まれた中国特有の宗派である。但し達磨大師は南インドの王子として生まれた人物で、中国に渡った)

【日本の仏教伝来】

日本に仏教が伝来したのは朝鮮半島経由で、6世紀前半と言われている。そして受入れの可否について日本国内でも論争が始まった。物部(モノベ)氏などは「日本には昔から神がいるのだから、外来の仏は必要ない」と主張した。一方、外来の蘇我(ソガ)氏らは「いまや全地域的な時代だから仏教を信じないと時代遅れになる」と主張した。そして仏教導入派が勝ったのである。

最も重要な人物は聖徳(シヨク)太子(574-622)である。太子は小野妹子(オノイモコ)を隋に派遣して国交を開き、また学問を通じて深く仏教に帰依(キイ)し、法隆寺・四天王寺ほか多くの寺院を建立するなど、仏教振興に尽くした。

次いで重要な人物は聖武天皇（701-759）である。彼は光明皇后とともに仏教を厚く信仰し、日本全体を仏教化しようと考えた。唐の国家仏教政策を真似したのか、日本全国に国分寺を、首都にその総本山である東大寺を建立した。

その後、遣唐使船で派遣された学僧の最澄（サイョウ762-822天竺）や空海（クワイ774-835真諦）が開いた各派については一般に理解されていると思うから省略したい。

【「宗門人別帳」】（シュウモンニンベツチャウリ）

鎌倉新仏教として生まれた浄土真宗（一向一揆、イクウイツキ）と日蓮宗（法華一揆）は、戦国時代に大きな勢力となり、武家政権と武力衝突した。これは中世の武装した僧侶集団が地主や武士に対抗して寺院・寺領を支配したのと同類である（興福寺・東大寺・延暦寺など）。

西日本を中心にキリスト教（切支丹）が広まる等の宗教運動が、政治的な反乱に結びつくことを懸念（ケネ）した江戸幕府は、邪宗門（違法な宗派）を定めて活動禁止の処置をとった。残りの宗派は許可される代わりに各戸ごとに宗旨を寺社に登録させ、信者（住民）の誕生と死亡を管理させた。登録の変更は許可されなかった。これが「宗門人別帳」である。戸籍台帳の役目を果たしていた。

【檀家】（ダンカ）

こうして江戸時代には信仰の自由がなくなった。生まれた途端に宗派が決まるから、新しい信徒の獲得（布教）はなかった。その各寺社に割り当てられた信徒を「檀家」という。

宗教活動を一切禁じられた寺社は葬式しかすることがなくなった。葬式で生活が保証され、宗教活動を禁じられた仏教は次第に墮落（ダカ）していった。そのことが江戸幕府の宗教政策の狙（ねら）いであった。

江戸幕府は日本人全員に、許可された宗派の仏教徒であることを義務づけた（仏教のほかには神道も許されていた）。天皇家も例外ではなく、仏壇があって歴代天皇の位牌（イハイ）が祀られていた。勅願寺が各地にあったから、天皇家も仏教徒だったことは明らかである。しかし明治維新後は片付けられた。

【本地垂迹説】（ホツスヰジャクセツ）

江戸時代までの常識では、「本地垂迹説」（神仏習合思想）の影響もあり、神と仏はあまり区別されず、寺と神社が同居していた。（神仏習合はキリスト教徒とイスラム教徒も一緒に暮らせるということと同じで、決して未開発で野蛮なものの考え方でなく、原始的な宗教観でもなかった）

【神仏分離令】と【廃仏毀釈】

明治政府は尊皇思想を徹底させるために「神仏分離令」を出し、寺と神社のどちらかになるように指令した。そこで民衆の暴動である「廃仏毀釈」（ハイブツキヤク）が起こり、寺が襲撃されて仏像が破壊されたという。

しかし仏教と神道は宗教の名目で戦争を起こしたことはなく、廃仏毀釈以外の事件はなかったと思っている。日本人の心の中には神仏共存の豊かな宗教的地盤があった。一般の家庭に仏壇と神棚のない家はなかった。

明治から昭和の終戦までの時期にも仏教は衰退することもなく、日本人の心の中に溶け込み、毎日お勤（ツト）めをして拝んでいた。それほど日本人の心の中に定着していたからである。

終戦後は住宅環境の洋式化等の影響を受けて往時のような宗教心はなくなっていった。しかし数多くの国々を歴訪した私の体験から考えると、多文化習合の中で我が国の仏教は連綿として確実に続いている思う。

世界宗教の一つである仏教界を見るとき、「自己の宗教的な完成を優先し、他者救済を軽視する小乗仏教」の国々では、私が見てきた経験からすると仏教徒の信仰心は極めて厚く、早朝からの修行僧の托鉢(カハツ)の光景は戦時中以上の信仰が厚いと感じている。

一方の「他者救済を重視し、多くの人々を悟りに導く大乘仏教」の中の大国「中華人民共和国」は、毛沢東の文化大革命の暴挙によって寺院は悉(トホ)く破壊され、経典は焼き捨てられて僧侶は路頭に迷い、見るも無惨な姿になってしまった。

紀元前213年の秦の始皇帝が行った「焚書坑儒」(フンショウコウジュ)以来の思想弾圧である。その痛手は甚大で現在でも中国の仏教界は完全な復興は成し遂げておらない。「焚書坑儒」とは、医薬・卜筮(ウラナヒ)・農事関係以外の書物を焼き捨てさせ、批判的な言論をなす学者数百人を坑(アナ)に埋めて殺したと伝えられていること。

「釈迦は一冊の本も書いていない」と言うことである。全部、人たちが口伝で語ったことを耳で聞いて受けとめて、目で見たと別の人から聞いたと言われる。活字に残されたものも大事なものであるが、長年にわたって語り継がれてきた物語や伝承こそが大事と思われる。そういうものこそ、人間の行動様式やその地域の文化を左右する力を持っているからである。

仏教界には多くの宗派があるばかりか、仏教に由来する新興宗教も数多いようだ。これまで記述してきた私見も正鵠(セイコク、セイコク)を得ているか否かは自信はなく解らない点が多い。

下の写真はガンダーラ遺跡の
仏陀の石像



下の写真はインドから仏典を
持ち帰り翻訳した玄奘三蔵



② キリスト教

私は昭和49年(1974)にローマ・カトリックの総本山であるバチカンの「サン・ピエトロ寺院」、スペインの「トレド・大聖堂」、パリーの「ノートルダム寺院」、ロンドンの「ウエストミンスター寺院」、ドイツの「ケルン・大聖堂」など、主要なキリスト教会を訪れた。しかしこの時は、未だキリスト教に興味は湧いてこなかった。

戦時中の中国戦線やビルマ戦線の戦闘間ではキリスト教に強い反感を抱いていた。キリスト教会はどんな山間僻地にも進出して、貧民たちに物資を与えて手なづけながら、宗教の美名に隠れて日本軍の情報を友軍に通報していた。教会は宗教活動よりも軍事的情報活動が主目的で、私も指揮官として手痛い打撃を被ったことが忘れられない。

キリスト教に就いて書を開き始めたのは昭和60年(1985)、中東戦争後のテロの頻発するイスラエルを訪れた時からであった。その当時のイスラエル・パレスチナの情勢は完全にイスラエルの軍事占領下にあり、現在のパレスチナ暫定自治政府も存在せず、現在のアラファト議長の名前も知らない状況下であった。

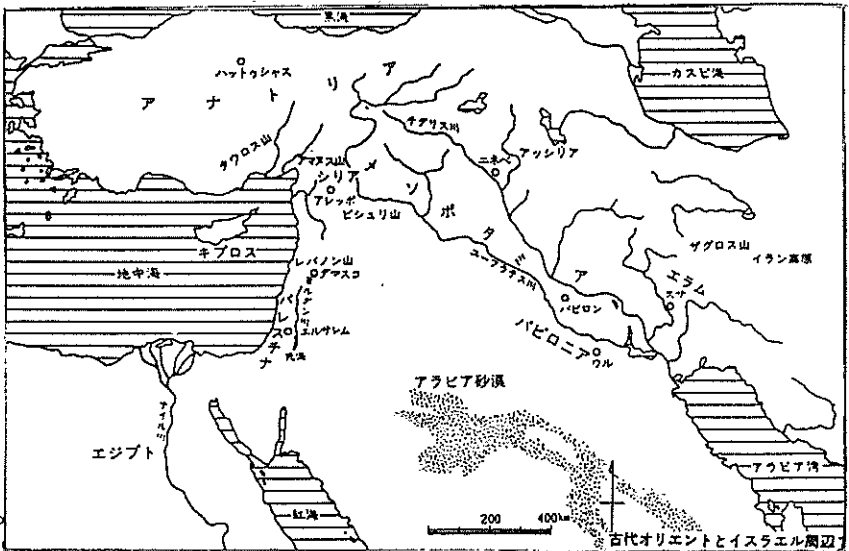
我々一行を案内したガイドは、首都エルサレムに駐在していたキリスト教・日本人宣教師であった。彼からユダヤ教、キリスト教について詳細な解りやすい説明を受け、それが原因となったのか、自然に引き付けられて興味を抱いてきたようである。特に首都のエルサレムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三大宗教の聖地でもあり、咫尺(咫尺、離離が近い)の間に聖地が存在することが紛争の原因となっていたから、直結したように引き付けられてしまった。

キリスト教はユダヤ教を母体として出現したのだから、ユダヤ教の歴史や思想を理解しなければ、キリスト教は解らない。又その発生は、中近東を覆ったギリシヤ文明(ヘレニズムと呼ばれた)の中で起きているのである。

初期キリスト教の活動の舞台となったパレスチナは、メソポタミア(チグリス川・ユーフラテス川の流域一帯、現在のイラクの地)から、アラビアの砂漠を迂回してナイル河口に至る三ヶ月型の穀倉地帯の西端に位置している。

古代からお互いに穀倉をねらうメソポタミアとエジプトの二大勢力が衝突した街道筋である。(右地図参照)

ユダヤのダビデ王(前1002~前962)を頂点とするイスラエル王国もこの二大勢力が弱まった約500年間だけ独立を保つことができた。



イエスの時代はイスラエル亡国後、すでに凡そ500年にわたって、バビロニア、ペルシア（現イラン）、ギリシア、ローマの歴代皇帝の支配を受けており、相次ぐ反乱も鎮圧され、形骸化(ケイカ)したユダヤ教の下で、重税に苦しむ民衆の間には、外国の勢力を駆逐する英雄の出現を待望する空気が充満していた。

キリスト教の出現はまさにこの時期であった。以上はキリスト教出現とその背景である。

「新約聖書の世界」

旧訳聖書がイスラエル民族の歴史と共に長い間かかって書かれ、編集されたのに比べて、新約聖書はおよそ紀元50年から100年間以内の短い期間で書かれた。

聖パウロや他の使徒たちの教会宛の手紙は諸教会で回覧され、筆写保存されるようになった。またイエスの直接の弟子が死亡する以前に彼等の記憶をもとに、イエスの教えと行動の物語が書き留められ、旧訳聖書と共に礼拝の中で読まれるようになった。

キリスト教会は、旧訳聖書と新約聖書を共に救いに必要な要道を載せたものとして、聖典としている。旧訳はメシア出現（後記する）の希望と約束で終わっており、新約は旧訳の歴史と思想を前提としており、後者なしでは理解できない。

旧訳において、イスラエルは民族として神への信仰と服従の道をひらいたが、それを完成できなかった。新約において最後の「残れる者」イエスから民族性を超えた新しいイスラエルが起こって、それを完成したのである。

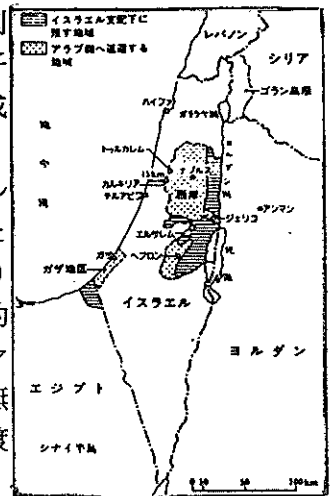
「メシア」

ヘブライ語で、油をそそがれて聖別された者の意味である。旧訳聖書でその出現を待望された救世主。キリストはこのギリシア語訳クリストスに由来している。キリスト教で救世主としてのイエスに用いる敬称。

「イエス」

紀元前四年以前にガラリア（下図のガラリア湖）地方のナザレに生まれる。紀元後28年ころヨハネから受洗し、まもなく独立してガラリアの村々を巡り歩き、神の国がこの世にすでに実現されつつあると説いた。差別されていた社会的弱者と交わり、制度化されたユダヤ教を厳しく批判した。30年ころエルサレムで十字架の刑に処せられた。死後、復活したイエスと出会ったと信じる弟子たちはイエスを救世主（キリスト）とみなし、キリスト教が成立した。

キリストの時代はアブラハム（旧訳聖書に登場するイスラエルの民の祖。イスラムではアラブの祖。神に対する絶対的信頼と服従により、「信仰の父」と呼ばれる）の時代より約2000年後でイスラエルは腐敗しきっていた。そうした時に「新契約（簡単な戒律）」が示されたのに、律法学者パリサイ（ユダヤ教の一派、福音書ではイエスの論敵として描かれている）の無理解からイエスを十字架にかけ、イスラエルをローマに売り渡してしまった。（右は現在のイスラエル・パレスチナ地図）



「キリスト教の教義」

キリスト教でいう神は、その概念をまじめに取扱っているかぎり、他のあらゆる信仰にとっての神と全く同じで、キリスト教の神という特別な神があるのではない。

人間は生と死にかかわる真剣な問いの中で、はじめて神について疑問が起こる。私は剣電弾雨の中の戦場でも神にすがったり、神に祈る気持ちはなく、頼れるものは自分だけだったと前記した通り、神仏の存在を意識しなかったことは事実である。

キリスト教では、人生のあらゆる局面で不思議な力を誰もが経験すると言う。この不思議な力、生命を与え、生命を奪うこの不思議な力、それを神と呼ぶらしい。

だからある人は、これを運命、宿命、不条理と呼び、「神も仏もあるものか」と叫び、これを怨み、反逆し、あるいは諦(あきら)める。しかしイエスは、この神秘的な力に対して、冷酷な運命ではなく、私を愛している「父なる神」と呼んだのである。

キリスト教の教義は詰(つま)まるところ、この世で正しい生活を送れば、最後の審判で天国に行ける。そうでなければ地獄に落ちるといふ結果論である。

(ところが日本などのアジアは仏教、儒教の論理の世界で、単純な結果論の世界ではない。動機や過程を重視して結果を問わないといった価値観を内包している。その点が違うようだ)

「イエス＝キリストが十字架上で死ぬと、なぜ人類が救われるのだろうか」。

一つの解釈は、イエスが罪がないのに人類の罪を背負って死んだから、人類は神から救われることになる。神の子イエスの犠牲によって、人類はいわばイエスの義兄弟となり、神の義理の息子(養子)として、神の国に入ることができるといふ。

神が人類を救済しようという意思(愛)を持っているのだから、その愛にこたえて、我々人類も神を愛し、互いに愛し合わねばならないと説く。「心を尽くし汝の神、主を愛せ」「汝の隣人を汝の如く愛せ」と書き、愛は罪の反対で、神に逆らうことが罪だと説いている。

愛が実現され、神と人びとが和解して(罪を許されて)生きる新しい世界が神の国だと説いている。そこでは人々は天使のように性別はなく暮らし、地上の富をいささかも必要とせず、永遠の生命が与えられると言う。

他の一つの解釈は、奴隷解放(トイカイト)の原理によるものである。人間は罪の奴隷で自分で自分を贖(あが)うことができない。奴隷には法的人格がない(売買契約の主体となることができない)からである。そこへイエスがやってきて、自分の血を支払って、人類をその主人(罪)から贖った。いまや人類はイエス(とその父である神)を主人とする、というのである。

いづれにせよ、イエスがキリストであり、神の子であり、罪のない十字架上で死んで復活した。これを信仰せよと言うのがパウロ(初期キリスト教の伝導者)の主張である。律法を守るのではなく、この事実を信仰することが救済の条件だとキリスト教は考えている。

「ユダヤ教とキリスト教の違い」

キリスト教にあってユダヤ教にない考え方、それが契約の更改である。ユダヤ教(そしてイスラム教)は、「神との契約を本質」とする宗教である。その契約(宗教法)は変化しない。神と結んだ契約を人間が勝手に変えられないからである(紀元前)

紀元後はイエス＝キリストへの信仰を契約する時期。キリストは神の子である(神と同等の

権利を持つ) からこそ、旧(7か)い契約(律法)を廃止し、新しい契約を結ぶことができた。

(イスラム教徒は神の子などは絶対に認めない)

人間は律法を与えられたので守ろうとした。しかし実際には全然守られない。そこで困っていた時にキリストが現れて、これから私を信じてくれれば救われると述べた。それから、これはよい、となったのである。

キリスト教にあってユダヤ教にないのが、個人救済の考え方である。ユダヤ教では原則として救済の単位はユダヤ民族であった。しかしキリスト教では一人ひとりが裁(か)きを受け、神の国に入れられたり入れられなかったりする。救済の単位が個人(の霊)であるという点で、近代的、個人主義的な宗教と言えるだろう。(イスラム教も個人救済の宗教である)

では、どういう人間が救われるのだろうか。キリスト教は律法を守れば救われるという考え方を徹底して退(しり)けている。救済は神が決めるもので、人間が口を出す余地がない。神を信じることは救済の一つの条件であり、信仰さえも人間の自由意志でなく、神が我々を信じさせて下さると考え、神の恩恵とみなすのである。だから無信仰は神に見放されたと言う意味になる。これは私のことになるようだ。

「宗 派」

「カトリック教会」

自らを唯一の普遍的教えとするキリスト教会。司祭を通じてでない誤解が生じるとして、長い間、聖書を一般信徒に読ませようとしなかった。聖書の氾濫(ハヅリ)する現代に於いては、同教会での公認には、その教義に則(ノリ)った注がたくさん付いている。

「プロテスタント教会」

16世紀の宗教改革の中心的思想。また、そこから成立した諸教会の信条の基礎となっている教え。カトリックの教理と伝承に反対し、聖書を重視し、信仰による万人祭司などを主張する。近代国家成立の気運と相まって全ヨーロッパ、北米に浸透・定着して今日に至る。

「英国教会」(チャーチ・オブ・イングランド)

英国は14世紀にいち早く宗教改革の火の手があがった。中心的指導者はオックスフォードの碩学(せつがく)ジョン・ウィクリフ(1320-1384)で、ローマ教会の支配に反対し、弟子たちの助力を得て英訳聖書を完成し、ロラードと呼ばれる伝導者たちによって流布した。

「東方正教会」(トウホウセイキョウカイ)

ギリシア正教、ハリストス正教会と呼ばれるもので、広義には、キリスト単性論を唱えるコプト教会(私はエジプト・カイロで見た)や、エチオピア教会を含む。狭義にはギリシア、ロシア、シリアなどの民族教会よりなる連合体であり、その信徒は一億とも二億ともいわれている。

キリスト教の三大教派の一つで、ビザンティン帝国(東ローマ帝国の別名もある)で成立し、1054年、西方教会と分離。神秘主義の傾向があり、礼拝様式やイコン(聖画像)の崇拜に特徴がある。

③ イスラム教

戦前の日本には殆どイスラム教徒がおらなかったのも特徴で、私は神戸で見たぐらいである。そのために種々と誤解があるようだ。イスラムはアラブの宗教というのも正確ではなく、片手に剣、片手にコーランだけがイスラム教ではない。砂漠の宗教だと言われるが、生まれたのは砂漠でも現在の教徒は砂漠地だけではない。イスラム教は戦闘的だと言うのはキリスト教徒の宣伝文句だが、それは反対ではないかと思っている。

私がイスラム教の世界に足跡したのは1975年の中央アジア・シルクロード、1979年のエジプト、1980年のパキスタン〜トルコ、1985年のモロッコ〜スペイン・アンダルシア、同年のイスラエル・パレスチナ、1990年のパキスタン、1994年のアラビア半島一周、1995年のイランである。中でもアラビア半島一周とイランは戒律が厳しく、イスラムの真髄(シズイ)に触れたと思っている。

「イスラム」とはアラビア語で「神に身をゆだねる」の意味である。又、イスラム教、イスラム教徒、イスラム教を国教とする国々、イスラム文化圏のことも意味している。

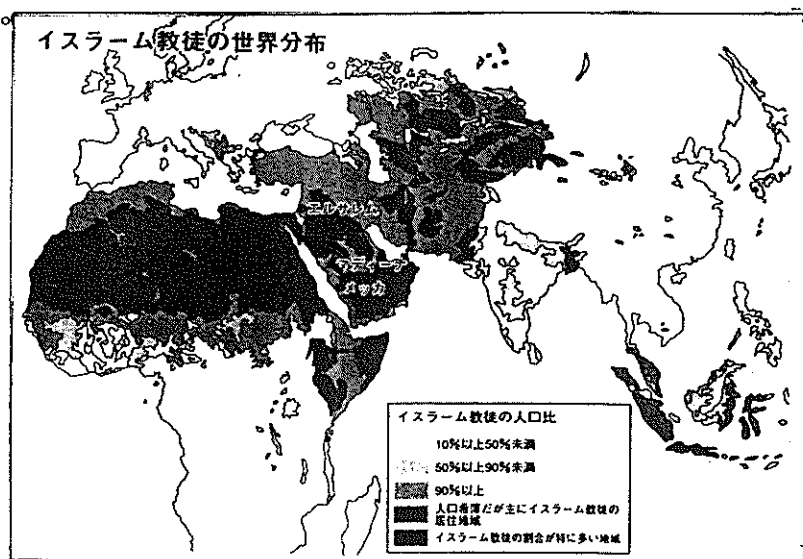
イスラム教については各紀行文に詳細に記述したが、概要だけは記しておく。

610年にアラビアでムハンマド(英語読みマホメット)が創唱した宗教。世界宗教としてアラビアを始め、中近東を中心に広がり、東はインド亜大陸、さらにインドネシアからマレー、フィリピンの一部を含み、西はアフリカの大西洋沿岸諸国、赤道以南のブラック・アフリカ地域、北は少数民族ではあるがバルカン半島、ロシア領、中国本土など多くの国でイスラム教が政治・経済・社会・文化の面で重要な役割を担っている。

しかもこれらの大部分の国々では、イスラム教徒が各々その総人口の80%以上を占めており、その他の国々でも、たとえ少数ではあっても、イスラム教徒は一つの独自の緊密な共同体を形成している場合が多い。

イスラム教が世界宗教と呼ばれるのは、このような信徒の世界的広がりだけによるものではない。根本的にはむしろ、イスラム教の信仰が人種・民族・国家・階級・身分といった全ての地上的な差異を超えて、万人に等しく開かれた普遍的な宗教だからである。

事実、19世紀以前でみる限り、イスラム教徒の人種的民族的多様性はキリス



ト教の比ではない。しかもイスラム教は、これら信徒の間に信仰を同じくする者としての強固な同胞意識を生み出してきたのである。イスラム教の世界的な広がり、それが持つこのような普遍的性格によるものであり、その結果であると言えよう。

確かにイスラム教は、普遍的な世界宗教として国家およびその諸制度を超越した宗教ではあるが、それは国家や通常の市民生活を否定したり、あるいはそれに背を向ける形でそうなのではない。むしろ、国家や世俗的諸制度に対してそれが従うべき具体的な規範（イスラム法）をもち、それによって市民生活の具体的なあり方さえも、その規範に合わせて正しいものにしてきたのである。イスラム教の普遍的というのは、その規範が国家・国民ではなくて、超越的な神の意思に由来するということである。

「アブラハム一神教の伝統」（24頁に記載）

イスラム教は元来、国家を超越するものではあっても、国家と密接な関係をもっている。そのためイスラム教の歴史は、教会史、教団史と一般政治史とが重なり合う形で展開してきた。

イスラム教はユダヤ教やキリスト教とともに族長「アブラハム」を共通の父祖として敬愛することから、アブラハム一神教の伝統に属する宗教である。イスラム教は他のアブラハムの宗教に比べて最も若い宗教である。

（アブラハムは旧約聖書に登場するイスラエルの民の祖であると共に、イスラム族の祖でもある。神に対する絶対的信頼と服従により「信仰の父」と呼ばれる。初名はアブラム）

「人類の歴史と神の導(みぢ)き」

イスラム教とユダヤ教・キリスト教の間には、多くの決定的な相違点のあることも事実である。これは歴史的に見れば、イスラム教はユダヤ教・キリスト教の影響を受け、アラブ人社会の中で生まれた結果であると言えるだろう。

しかしイエスの活動がある意味では、当時のユダヤ教の現状に対する批判であり、ユダヤ教的伝統そのものの全面的否定ではなかったように、イスラム教の運動もユダヤ教・キリスト教の伝統そのものの全面否定ではなく、あるべき本来の姿から、その現状に対する批判であったと見ることができる。

「コーラン」は天地創造以来の人間の歴史について、次のように簡潔(かんけつ)に述べている。

「人類はかつて一つの共同体であったが、その後、人々が互いに争いを始めたので、神は預言者たちを遣(つか)わして喜びの音信を伝えさせ、あるいは警告させ、人々の紛争を裁定するために真理の啓典を預言者と共に下し給(たま)うた。ところが、これを頂いた人々は、かえって互いの不正のために相争った。ただ神は、彼らが相争った真理への信仰深い者だけを特別の許しをもって導き給うた。神は欲し給う者を正しい道に導き給う」とコーランに記されている。

人類は最初、争いのない平和で正しい一つの共同体であった。ところが、やがて人々は相争い対立して多くの共同体に分裂してしまった。そこで神は人々の争いを裁決し、彼らを正しい道に連れ戻すために、その各々の共同体にそこから運び出した神の使徒(預言者)を遣(つか)わし、彼らに啓示して正しい行為規範(きはん)を伝えた。

しかし共同体の中には初めから警告を拒(ひか)み、使徒を迫害したり、殺害したりする者さえ

あった。このような共同体のものは神罰を受けて地上で滅ぼされてしまった。ノアの民、ロトの民、フードの民、シュアイブの民などが、それである。他のものは束(ツカ)の間の繁栄を謳歌(ウカ)したが、やがて地上から姿を消してしまった。

「ムハンマドの教えと啓典(命令のこと)の民」

このような人間の反抗と失敗の歴史にもかかわらず、神は人間に対する慈悲(ヒ)の心から次々と使徒を遣わして警告を与え、彼らに正しい道を歩ませようとした。特に「イスラエルの子ら」(ユダヤ教徒)には特別の恩恵として数多くの使徒を遣わし、神の啓示をくり返し伝えさせた。

中でもモーセには律法、ダウィドには詩篇、イエスには福音書を啓典として授(ヲ)けた。こうして彼らは「啓典の民」と呼ばれるが、今日それぞれユダヤ教徒、キリスト教徒として知られている人たちである。従ってイスラムとして見れば、ユダヤ教、キリスト教の諸啓典の間には、もともと本質的な相違はないはずである。

では、なぜ相違が生まれたのか。それは、彼らが神から特別な恩恵を受けながら互いに対立し、神から与えられた啓典を隠蔽(イバイ)ないし改竄(カイザン)したり、神からの恩恵を自分たちだけで独占したり(ユダヤの選民思想)、あるいは人間にすぎない使徒を神格化したり(キリスト)して、道を踏み誤ってしまったからだと言う。しかも彼らは、そのために遣わしたムハンマド(マホメット)を使徒として認めないばかりか、その活動を妨害しようとしていたというのである。

しかし、皆がそうだったわけではない。啓典の民の中には、夜もすがらひれ伏して神の御徴(シムツ)を読み、神と終末の日を信じ、競って善行に励んでいる真面目な人々もおり、またモーセの民の中にも、真理をもって人々を導き、また自らもそれによって正しく身を持っていた人もいると言われている。だからイスラムはユダヤ教、キリスト教を全面的に否定していない。

ところがムハンマドが神の使徒として遣わされたのは、「まだ啓典を知らない」「町々の母、メッカとその周辺の人々」に警告を与えるためであった。しかし彼の警告の内容は決してメッカとその周辺の人々にのみ向けられた特殊なものではない。

彼らがもたらした啓典は、それ以前の啓典を否定するものではなく、むしろそれを確証するものである以上、本質的にその内容は普遍的なものであると言える。

「使徒ムハンマドと儀礼のアラブ化」

ムハンマドを遣わされたのは、「あらゆる人々に対して喜びの音信と警告を与えるためであった」と述べられている。そこから当然ユダヤ教徒やキリスト教徒は「啓典の民」として、ムハンマドを使徒として受け入れるはずであった。

ムハンマドがこれら「啓典の民」と直接接するようになったのは、メッカでの迫害を逃れてメディナに移ってからであるが、それはまた彼らがムハンマドの使徒性を認めないことが明らかになる時でもあった。彼らには、自分たちの聖書の記述とくい違ふところの多いムハンマドの使徒性を、すなおに神の言葉として受け入れることはできなかった。

(このことはアラビヤ紀行の紀行文に詳細に記載してある)

しかしコーランの言葉によれば、それは「啓民の民」が邪悪(シャク)な心にとりつかれ、道を

踏み誤っていたからにはほかならない。そこでムハンマドの啓典が純正なものであること、またイスラムの教えはユダヤ教徒でもキリスト教徒でもない純粹(ジュズイ)な一神教徒であったアブラハムの伝統を、直接受け継ぐものであることが説かれた。

そしてカッバ神殿とこのアブラハムとの直接的関係が強調されてくる。それに応じて禮拜の方向がエルサレムからメッカへと変えられる、といった一連の「儀礼のアラブ化」、つまりイスラム的にみた純粹一神教化が遂行された。そしてイスラム教は他の諸々の宗教に優越するものであることが強調されたのである。

「彼(神)こそは、たとえ多神教徒が嫌(キ)っても、お導きと真実の宗教をもたせ、これがあらゆる宗教にまさることを宣言するために使徒を遣わし給うお方である」(コーラン九章)このようにしてイスラムの歴史はスタートしたのである。

ムハンマドはこの啓示を正しく伝え、それを正しく地上に根付かせるべく遣わされたのである。彼はそれを一応成功させ、その啓典の中で神が言い残したことが何一つないとなれば、もはや新たな啓示・使徒は必要ではない。そこでムハンマドは「最後の預言者」であることが証明された。こうして地上におけるイスラム教の歴史はスタートしたことになる。

ムハンマドは40才のとき、メッカ郊外のヒラー山上で、大天使ガブリエルから神の啓示を受け、以後、彼は20年にわたって啓示を受け継いだ。

妻は預言者の道を進むよう彼を励ました。彼は布教を始め、妻や友人などの信者を得た。しかしメッカの人々は彼を敵視し、迫害があいつぎ命さえ危険な状態になった。

『そこで天子に連れられて一夜のうちにエルサレム(イスラエルの首都の金のドーム)に飛び、そこから昇天してイエス、モーセ、アブラハムに会って帰ってくるという奇蹟を体験するのも、この頃である』

622年に彼は信者とともに「メディナ」に逃げたが、この年がイスラム暦の元年である。

『コーランについて』

「イスラム教の根本聖典コーラン」

根本聖典のコーランは、ムハンマドが最初の啓示を受けた610年頃から632年の死ぬまでの約22年間、彼が警告者として、また宗教的・政治的指導者として、メッカ・メディナで活躍する具体的な状況の中で、それとの関わりの中で下された啓示を人々が記憶し、それが後に三代目カリフ、ウスマーン(在位644~56)の時に、集録されたものである。分量にして新約聖書と旧約聖書の間位である。

コーランは元来「誦誦(ドリヨウ)されるもの」の意である。天に護持されている原本を、天使ガブリエルを通してムハンマドに直接読み聞かせたものである。コーランとは、このように朗々と声を出して誦(ヨ)まれるものであり、そこにコーランの魅力の一つがある。我々のような部外者でも引き付けられるものだ。

コーランは神が語ったそのままの言葉として、ムハンマドやその他の人間の言葉から厳然と区別され、人間の手による文学的作為は一切排除された。ここに他の聖典と異なるコーランの特異性がある。イスラム教徒が伝統的にコーランの翻訳(ホヤク)を拒否し、かたくなにアラビア語のコーランに固執(コジツ)する理由もそこにある。

コーランは神の言葉そのものであり、言葉による神の自己啓示とされれば、神に絶対的に服従し帰依(+E)することは、具体的にはコーランの言葉に従うことにほかならない。逆にコーランの言葉信じ、それに従うことは、神を信じ神に従うことにほかならない。コーランは、信じる者に無条件に服従を迫ってくるものである。

コーランこそ正邪・善悪に関する人間のあらゆる価値判断の究極的基準であり、人間の行動における最高のより所となるべきものだからである。

「歴史を超越した真理」

神の言葉としてのコーランと神とは不可分の関係にある。そこに「コーランの永遠性という正統教義の根拠がある。神の言葉は永遠に神と共にあり、歴史を超越して不変の真理だというのである。

コーランの内容についてみると、その中でくり返し強調されている最大の使信は「汝らの神は唯一なる神」という一神教の原理である。アッラーは全知全能であり、天地万物の創造者・支配者である。神が一つであるということは、神に類似するものは何もないということで、その本質・属性は被造物からの類推を一切拒否する超越神だ、ということである。

そしてイスラム国家では宗教と政治は一つ、と考えている。

『この点を吟味しないまま、他宗教と比較しても意味はあまりないようだ』

「イスラム法」

イスラム教徒が宗教的・現世的な生活をするには具体的に規制する「聖法」がある。これを「イスラム法」という。例えばイランでは選挙で大統領が選出されても、その上部にイスラム法学者が組織するイスラム法があり、最後の決定を行うのである。

西欧には人間が法律を作っても良いという考え方があった。しかしイスラム教になると、法は神が作ったもので永遠不変である。その法律を発見するのが法学者である。法学者がいなければ法律もないわけで、彼等の地位は最高である。これは1000年も前に成立している。

これはコーランに述べられている倫理的法的規範はきわめて包括的であるが、網羅(モラ)ではないという。問題はそれをどう解釈し補足するかである。そこでイスラム法学者の間で議論し、本質的には「人間の正しい生き方」を具体的に表現した道徳的義務というべきものである。

「イスラム教の諸派」

私が訪れたイスラム諸国の紀行文で詳細に記述したが、一応列記しておく。

① スンニー派

イスラム共同体の中で絶対多数派である。

② シーア派

スンニー派に次ぐ有力な一派・・・イランでは国教となっている。

③ ハーリジー派

幾つかの小分派がある。・・・オマーン、アフリカ北部のトリポリ、東部のザンジバルなど。

「民族宗教」

神が特定の部族や民族に恵みを与えることを信じる宗教が、いわゆる「民族宗教」である。我が国の神道をはじめ、ユダヤ教、ヒンドゥー、ジャイナ教、シク教、ゾロアスター教、儒教、道教など、いずれも宗教としての独自の歴史を持っている。

それらの宗教が歴史に登場して以来、仏教、キリスト教、イスラム教に代表される世界宗教に与えた影響は少なくない。

今日でもなお地球上での武力による紛争は止むことを知らないが、民族が民族の歴史を重んじる以上に、民族と宗教とは深くつながっているようである。

① 神道

神道は日本人にとって、ごく身近に存在している宗教である。しかし、あらためて「神道」とは何かと問われると、よほど神道に接近している人でも明確に答えにくい。専門家でも必ずしも十分な用意をもって答え難いと嘆(げ)いている。また、知っていることよりも、知らないことの方が多いうのだ。

子供のころ朝起きて手を洗い、口をすすぎ、顔を洗って神棚を拜んだり、太陽を拜んだり、何でも、まず神様にお供えしたりした習慣を思い出す。このように神道は生活の中に生きているものが多い。しかし「では、神道とは何か」と聞かれると、ハッキリしない。これが民族宗教あるいは自然宗教の生態の一つであり、扱いにくい点である。

我々年代の者が教育された神道は「惟神」(かみかみ)、「随神之道」(かみかみみち)と称し、神代から伝わってきた神の「みこころ」のままで、人為の加わっていない道だと言われていた。

「神道の歴史は祭」

神道の歴史をたどると、古代には神話が重要な役割を果たし、ついで祭祀(サヒツ)（神々や祖先などをまつること。祭典、祭儀、まつり）が中心となり、中世・近世からは教義が現れてくる。しかし神話が重要な時代の神道も、実は祭祀が中心をなしていた。従って神話も祭祀の一要素である。教義が現れてきた時代にも、祭祀を離れて神道は成り立たない。だから知らず知らずのうちに祭祀の支配力にひかれた。神道を知ろうとすると祭祀をきわめる必要がある。

ところが、祭祀というものは行動で、言葉は伴うが、結局は補助的なもので、断片的で意味がわかりにくいという困難な事情があった。

昔から神道家は神話を重視して解釈を立てようとした。それは古事記・日本書紀・古語拾遺(コゴヨウイ、記紀を補う資料として重要)等、神典、神書といわれるものの重要な部分が神話である関係上、ごく自然であり、当然である。しかし神国思想・国体思想が顕著(ケンチャウ)につかまされただけで、神道の教理の体系は見付からなかった。

(神国思想・国体思想とは、天皇を倫理的・精神的・政治的中心とする国の在り方。戦前の日本で盛んに用いられた語)

「祭の発想」

神道の考え方は神道的な発想で祭によく現れている。儀礼は近世においては一定の祭式に従っているようだが、その由来や構成は多様で、統一的な説明は不可能である。

祭は多種多様だが共通した考え方があり、約束があるようだ。それは神や祖霊を迎えて、これを大切にもてなし、なぐさめたり喜んだり、祈ったり感謝したりするという方法と発想である。これは誰でも了解できる人間の常識であると思う。

靈魂を信じる者にとっては、これはこの世と他界との間を往来するもので、祭は他界から靈魂を呼び迎えて、靈魂に奉仕する行為である。霊を迎えるに始まって、送るに終わる。これが祭である。

地鎮祭などを見るとよくわかる。まず、降神の儀があって祭が始まり、最後に、昇神の儀をもつて終わる。このことが祭の重要なところである。

死者のことは神道では昔から非常にわかりにくいこととされていた。それは人が死んだら、どこへ行くかと問うからである。その行き先は高天原(タカマハラ)へ行く、常世(トヨ)の国、黄泉(ヨミ)の国、幽世と、いろいろの説が出て曖昧(アマイ)になってしまい、今でも定説がない。

曖昧になった理由の一つには、仏教の伝来であろう。仏教の他界思想は非常に明瞭で、救済の教義が鮮(アザ)やかに教えられたからである。それに魅了(メリヨリ)されて仏教を受容することによって、固有思想の曖昧さをどうするかの問題を忘れたのだと思う。

しかし、それだけではなく、もともと他界で救われるという思想が神道にはなく、他界に行った靈魂の喜びは、祭を受けることだと思ったのではないか。

神道の世界では、何よりも大切なのが祭である。子々孫々に祭が続けて行けば、そこに祖霊の喜びがあり、子孫の喜びもあった。だから他界の消息を問うことは、それほど重要ではない。仏教やキリスト教は「往く」に救いを教え、神道は「来る」に救いを認識していると思う。

「祭の意味」

日常の生活や、生産活動、社会的業務が、そのまま神に仕える祭である。農夫が農耕に従事し五穀を生産することが即ち神に仕えることであり、祭そのものだという考え方は実に珍しいものだと思う。

労働は神聖なものであり、職務は神に仕える道である。神道は、そういう信仰なのである。従って生活の全体が神霊である。歴代の神道家は、マツリゴトを「政」、「政治」としてとらえてきたが、各人の生活、各人の職務業務がマツリゴトであった。

マツリゴトは「政」であり、「祭り事の意味」である。だから国家の「政」(マツリ)は「神」をまつことになったのであろう。

戦前の思想は祭政一致(サヒイッ)であった。すなわち祭祀と政治とが一元化していることで、宗教的行事の主宰者と政治の主権者が一致していることを言ったのであった。

神道の倫理は生活の全体が、神に対する祭の意味を持つという根本から理解すべきではないだろうか。

「歴史的な神道思想」

神道の基調(キコウ)をなしているものは祭だが、昔は神話が中心の役割を果たしていたようだ。

神話というものは祭祀に支えられており、また祭祀に昔の社会的意味を与えたものだと思える。そのような関係から上代の昔において、日本国家、政治、社会的体制の確立と深い関わり等を持っていた。

神道が次第に教義化される時代になると、神話の中から日本国家の歴史的成立、政治、社会体制の不変の基礎を教える教義を引き出すようになった。これが国家神道である。明治維新时期に国家権力の保護により、神社神道と皇室神道が結合して成立した神道である。

(天皇制イデオロギー・国家主義思想の理念的背景となり、終戦まで続いた)

日本は神国であるという国体論や神国の思想は神代から引き出され、世界は天祖の神によって創られ、天神・地神の時代を経て、皇祖の神の神統が万世一系(バンセイイクイ)の皇統を保ちつづけて、今日の日本国家を成立させたという思想である。

この思想の流れは、いわゆる神道家が出現する以前から濃い色をなしているが、神道の中では、吉野朝時代の北畠親房(キタハタチカヲヲ、1293~1354)の「神皇正統記」(シノウシヨウトキ、1339)が画期的な役割を果たした。

この『大日本は神国なり。天祖はじめて基を開き、日神長く統を伝え給う。我が国のみこの事あり。このゆえに神国というなり』という名文が、この思想の公式を示した。

神国論・国体論のもう一つの教義は道德論である。これは支那(現中国)の王道思想と習合したもので、聖人である王が道德をもって万人を教化し、人道を尽さしめることによって、天の感応を引き出し、天下泰平を実現していくという思想で、君民一致、天人合一を道德から教え導びこうとしている。

「神国論的国体論」

本居宣長(モトノリナガ)らの復古神道家は、このような教義が神儒(神道儒教)一致思想であり、純粋な神道と異なるものだとして批判している。古事記の中には道も教も解かれていないことを強調し、「神ながら」という古語から、生活や政治の思想を説こうとしたが、基本的には神国論というべきである。

明治時代になって教育勅語が出たが、その説くところは、神国的国体論や儒学的に近いものであった。しかし教育勅語は神道を脱却して、これを一般道德として説こうとしたものである。

「神道の定義と流れ」

神道という名称は、漠然と日本民族の古来の信仰習俗に由来する信仰を総括する意味で用いられる。広い用法では仏教・儒教・キリスト教など、外来の宗教の領域に入る難しいものを、漠然と総称している。だから多岐である。

主流の神道では神国論的国体を重視する傾向が強く、天照大神(アマテラスオホミ)はきわめて重要な地位を占めている。しかし他の部分では、それらの問題はほとんど意識されていない。

以上は定義らしからぬ神道の概念のとらえ方である。1000年以前には教義を持つものはいなかった。みな「祭り型」で、それにいろいろな神話が伴っている場合が多かった。しかし大陸からの仏教などが入ってくると、その影響を受けて変化を生じ教え型が生まれたようである。日本古来から最も重要な天照大神を知り、謎(ナ)を解く為に宮崎県高千穂町を訪問すべきである。

② 現人神教 (アラヒトガミキョウ)

『世界宗教』の「宗教とは何か」の項で、その18頁に若干ながら「現人神」のことを記述した。明治維新から第二次大戦終戦時まで、長く続いてきた絶対天皇中心思想を戦後の人々に理解し易いように、私は非難のあることを承知の上で、本文では「天皇教」と呼ぶことにした。

超越した精神主義の宗教的な解釈を簡単には説明は困難である。しかし我々は天皇教のもとに教育され、戦闘(戦争)に参加し、多大の犠牲者を出した年代の一人として、神教の中の一時代を「天皇教」として記述したい。死生を超越して敵弾下に身命を投じた当時を回顧すると、「命より大切なものはない」「世に永久なるものはない」「覆水は盆に返らず」「死生命あり」などの故事が脳裡(ワリ)を去来(キョライ)してくる。

『維新とは、全てのことが改められ、すっかり新しくなること。他国では「革命」と称した』

平成13年(2001)5月15日、当時、就任早々の森首相は神道政治連盟国会議員懇談会の結成30周年記念祝賀会で挨拶し、「日本の国は天皇中心の神の国であるということを国民に承知してもらい、その思いでわれわれ(同懇談会)が運動して30年たった」と述べ、天皇陛下の神格化に言及した。森首相は更にその上で「神仏を大事にするということが今の日本の精神論からいえば大事なのではないか」と強調した。この発言が大問題となって槍玉に挙げられ、非難轟轟(ヒナガカク)の国会の場で苦しい答弁をした。しかし有識者を納得させたとは到底考えられず、時宜(洋)を失した彼の知能的資質の低さに驚いたのである。小学校の2年生で終戦を迎えた彼が「神の国」と称した日本を、どれだけ理解していたのかは甚だ疑問である。敗戦の翌年一月一日、「天皇は人間宣言」をしたにも拘らず「天皇を中心にした神の国」と発言したことは、歴史の無知と愚鈍の謗(ツリ)は免れない。

「皇国(スラミタ)と天皇」

我々年代に生まれの者は、生まれ落ちた瞬間から、心身ともに絶対神の「天皇に帰一」する人間として作り出され、皇国民として「鑄物型」(イロカ)の人間として教育され、終戦まで続いた。回顧すると、我々は天皇には敬愛の念よりも畏怖の念が強く、どこまでも神であった。

今日のいう国民の育成ではなく、当時は神である天皇が統治する国(皇国)の民というのが、教育の基本であった。皇国史観によると、「天照大神(アマテラスオホミカミ)の神勅(シチヨク)」(神のお告げ)が定めた「神の子孫である万世一系の天皇のしるしめし給う(統治する)国」が、日本であったのである。

皇国の道とは明治以来の国民教育の基本であった「教育勅語」にも書かれていた。「天壤無窮(テンジョウムキョウ)の皇運(コウウン)を扶翼(フウキ)すべし」という勅命(チヨクメイ)に従う生き方であった。天壤無窮とは、天と地とともに永遠に続くという意味であり、扶翼とは、助け守る意味である。

天壤無窮の詔勅(シヨウチヨク)天皇の発する公式文書の総称)とは、日本書記の神話で、天孫降臨(テンソクコウリン)神が天界から地上に下ること)の際に、天照大神が天孫、火瓊瓊杵尊(ホニニギハヒコ)に言ったと伝えられる言葉である。即ち天皇家が日本を支配すべきことと、その繁栄の永続性を寿(コト)ぐ(祝う)内容の言葉である。

「現御神」(アキミガミ)とは「現つ御神」「現つ神」と同じで、「かけまくもかしこき・・・」と祝詞(ハト)の最初に出てくる言葉である。それは「天照大神の御子孫としての現御神であらせられる天皇」ということである。

私たちの小学校以来の教育では、天皇は「現人神」(アヒトガミ)と言われた。即ち人間の姿をした神の意である。天照大神の血筋をひいた天皇だから現人神であった。しかし超国家主義の者たちは、「人」という文字さえも畏(おそ)れ多いと、この「人」の字を忌避(とが)して「現御神」としてののである。

回顧すると私が小学生のころに奉安殿(ホウアンテン、天皇皇后の写真を納めた建物)が建立され、毎日の登校下校の時に最敬礼をした。そして天皇皇后の写真を「御真影」(ミマシヱ)と呼んでいたが、日本は神の国だと信じて疑う者はなかった。

祝祭日には必ず学校で御真影を拝む儀式が行われた。壇上に設けられた式場には、菊の紋章が輝く波型の二重カーテンが開閉するように作られ、神社の拝殿の雰囲気充滿していた。

式が始まると教頭先生が恭(こ)しく、勅語を入れた紫の袱紗(フクサ)で覆(お)われた箱を校長先生に渡し、白手袋をはめた校長がおごそかに箱を開けて勅語を奉読する光景は、実に荘厳であった。最敬礼を続ける全校児童生徒は静まり返って咳声一つなく、弥(や)が上にも天皇が神であると信じていた。これは疑う余地は全くなかった。

昭和に入ってからの小中学校の教育内容は、「忠勇なる兵士」の養成と軍人への憧(あこが)れが多く採用された。これは天皇に生命を捧げることが最高の名誉だとの教えであった。教育勅語に、「・・・一旦緩急(イツワンクンキウ)あれば義勇(ギユウ)公(コウ)に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし・・・」と諭(たま)されていた。(前頁参照)

傘寿を過ぎた今でも脳裡(ノウリ)に深く刻まれているのは軍国美談である。日露戦争で戦死した「木口公平」は死んでも口から喇叭(ラッパ)を手放さなかった美談は有名である。又、昭和7年(1932)の中国・上海戦線の戦闘で、三人の勇敢な工兵が点火した爆弾を抱えて敵の鉄条網の中に突っ込み、身を捨てて歩兵の突撃路を開いたという「肉弾三勇士」物語は、日本国中を風靡(ワビ)した。

戦前の明治憲法は国民皆兵(カヘイ)で、兵役は男子国民の尊い義務とされており、青年に達した男性は兵役に服しなければならなかった。一朝(イツウチ) 国に事ある時は一身一家を忘れて、大君(天皇)の御楯(ミタテ)として兵に召されることを男子の本懐としたのであった。

軍隊に入った軍人には、明治15年1月4日の「陸海軍人に賜った勅諭(チヨクユ)」が最高の根本思想であった。最初に「我国の軍隊は世々(ヨ)天皇の統率(トウソツ)し給(タマ)う所にぞある・・・」「朕(チ)は汝等(ナツラ)軍人の大元帥(ダイゲンサイ)なるぞ」と書かれていた。

軍人として守るべき五ヶ条(忠節・礼儀・武勇・信義・質素)の第一に、「軍人は忠節を尽くすを本文とすべし」とあり、「義は山嶽(ヤマガカ)よりも重く死は鴻毛(コウモウ、きわめて軽い羽毛)よりも軽しと覚悟せよ・・・」と諭(たま)していた。

この軍人勅諭は「武士の三忘」を基本にしたものと私は思っている。それは「命を受けては家を忘れ、戦場では親を忘れ、戦いに際しては我が身を忘れる」、この三つを忘れなければ責任を果たせない、ということである。

「今日よりはかえりみなくて大君（天皇）の、しこの御楯（ミタテ）と出（イ）で立つわれは」は、誠によく国民の本分、軍人としての立派な覚悟を表した歌である。又、「海行（ウ）かば水（ミ）づくかばね、山行（ウ）かば草むすかばね、大君の刃（ハ）にこそ死（シ）なめ、かえりみはせじ」は、誠におおしい（雄々しい）精神を伝え、忠勇の心がみなぎっている。このように万葉集の歌には、こうした国民的な感情に満ちあふれたものが多い。

日本人が先祖代々、天皇に忠義を尽くしてきたことの証（アカシ）の一つであり、命を捨てるのは臣民（シミン）の道である、と北畠親房（キタハタチカヲ）は「神皇正統記」（シノウシヨウキ）に書いている。このような精神教育が小学校から徹底して行われていた。

伊勢の皇大神宮は「天照大神」を皇室の祖神として祀った神社であり、国家神道の元締めでもあった。だから神の子孫である国民は、一生に一度は必ず皇大神宮に参拝しなければならない事になっていた。私自身も何回か参拝している。

私が軍人として初めて出征したのは昭和15年（1940）の秋で、戦場は支那（現中国）中原の地・河南省であった。古代から「中原に鹿を逐（オ）う」「中原を制すものは国を制す」とまで言われていた中原とは、支那文明の発祥の地である黄河中流域のことで、河南省がその中心であった。その河南省は当時の支那軍・国民党軍（蒋介石軍）の主力と日本軍（北支那方面軍）との争奪の地であり、激戦が展開していた最中に飛び込んだ。

記憶の糸を手繰（ツグ）っていくと、小隊長として参加した初陣で戦死者を出してしまった。その時の心痛懊悩（ウレウ）は今日でも忘却することはできない。天皇の兵士を失った責任は指揮官として重大であり、ご遺族に申しわけなく、痛恨胸を焼く思いは自分が死ぬよりも辛い心境であった。それ以来、硝煙に包まれた死と紙一重の世界で戦いながら、犠牲を重ねなければならなかった。その運命というのは神の領域であり、天皇の命令だと信じきって戦ったのである。

小隊長を終えてみ聯隊旗手を拝命し、中原会戦に河南・山西省一帯を軍旗を捧じて参加し、鬼哭啾々（キウクシュウ）として死地に赴（モト）く将兵の地獄絵巻を目（マ）の当りにした。「死は鴻毛（コウモウ）よりも軽しと心得よ」と諭した軍人勅諭、そのものの光景が網膜に残っている。

中隊長を拝命して間髪を入れず、黄河渡河作戦の河南作戦に馳せ参じ、引き続いて河南省・中牟县城の橋頭堡、背水の陣の死守を命ぜられた。当時の我が指揮下の将兵は、配属の砲兵・工兵・その他の部隊を含めて約400名で、対する敵は砲兵を擁した約2万であった。退くことのできない黄河を背にした全隊員は、従容（ジョウヨウ）として死につくことを決意し、犠牲を顧みず一丸となって極限状態に挑（イ）んだのであった。（細部は拙著「両忘」参照）

昭和19年晩秋、奉職していた陸軍士官学校を去り、全国軍の敗退が続く戦況下で起死回生の策を講じたビルマ（現ミャンマ）に出陣し、大隊長として想像に絶する修羅（シュラ）戦場で死を超越して奮戦した。ビルマは日本陸軍の三大激戦場の一つで苛酷さは言語に絶した。

上官の命令は神であった天皇の命令であり、戦争（戦闘）という運命的な出会いも神の領域であった。しかし私は戦場には神仏はないと幾度となく体験し、また信じていた。戦争をするような人間は神仏は相手にしないからである。軍では命令さえすれば、必ずその通りに実行されるものと錯覚する通弊があったばかりか、神である天皇の国は絶対不敗だと信じていた。その結果、指揮官は無責任となり、甚だしい人命軽視となったと反省している。

戦死者の家の表札には「遺族の家」「靖国英霊の家」と表示され、国民は最敬礼をもって心から感謝申し上げた。出征軍人の家には「誉(ホメ)の家」と掲げられ、その家族を町民は援助していた。このように戦地も銃後の国内も問わず、皇軍思想(天皇教)を信じて戦った。戦争の末期に学徒諸君が招集され、犠牲的精神のもとに特攻隊員となって敵艦に突っ込み、若い命を捨てた決死行も神格化した天皇のためであった。

魂の叫びというような戦例は枚挙に遑(イマ)がなく、沢山ありすぎて全軍的・全地域に及んでいる。しかし、その痛ましい戦争の歴史も風化に風化を重ね、今日では戦争(戦闘)の残酷悲惨を体験した人も数少なくなってしまった。「咽元(ノドト)過ぎれば熱さ忘れる」の諺の通りだ。

「戦争は諸悪の根源」「鷲(サシ)は鷲の肉を食わぬ」(戦争をしないという諺)と叫んで戦争期間のことは終わりとし、戦後に移っていきたい。

昭和21年1月1日(1946)、天皇の「神格否定」の詔書(いわゆる人間宣言)が公にされた。その時は未だ私は外地にあって帰還していない。天皇の人間宣言を知ったのは終戦の翌年で復員後のことである。その詔書の要点のみを記載する。

『朕と爾等(ナツラ)国民との間の紐帯(フタタイ、つながり)は、終始相互の信頼と敬愛とに依り結ばれ、単なる神話と伝説とに依りて生ぜるものに非ず。天皇を以て現御神とし、且日本国民を以て他の民族に優越せる民族にして、延(ヒク)て世界を支配すべき運命を有すとの架空なる観念に基くものに非ず』とのこの箇所は、まさに、天皇の神格否定であるとともに、日本国民を天孫民族として他民族に優越する者としての世界制覇観を否定するものであった。

天皇の神格否定とともに、全国11万の神社は宗教法人として再出発した。これらのことは日本占領軍司令官・マッカーサーの指令であった。回顧すると我が身は外地にあって血が騒いでいた時である。

歴史というのは、常に権力者や勝利者、為政者側の視点から見て書かれてきたと前記したが、天皇の人間宣言を初めて知った時の心境は、それを形容する言葉も知らず、驚天動地というか、驚いて天を仰いだのであった。

昭和天皇は現人神の座を降り、大和民族(ヤマトノカ)は神によって選ばれたという民族思想も消失し、腑抜(フツ)けの状態に陥ってしまった。只、指揮官の一人として、戦死された戦友のことを脛(マカ)に浮かべると、断腸の思いが込み上げて懺悔(ザンゲ)するばかりであった。その時に決心したことは、生命のある限り一身を「慰霊」に捧げる誓いであった。

戦争で何百万の軍が招集されたが、その危険度は職と階級、戦場の位置等によって大きな差があった。実際に敵弾下に身をさらして犠牲を出した部隊は少ないと思っている。特に激戦を経験した部隊となると僅少だと推定する。指揮官の責任感はそのような関係から生じてくる上、慰霊心は激戦経験の強弱と人間性に左右されていると考えている。単なる罪滅ぼしではない。

明治維新までの日本では、権力は将軍、権威は天皇にあった。そして権威は権力者にすり寄って皇統を維持してきた歴史がある。権力と権威が合体したのが明治維新であった。天皇制と軍制が確立した明治は価値観の大転換期であった。そこで「権力」を「軍部」と置き換えみると、多くの部下を何のために死なせたのか、悶々の情は尽きることを知らないのである。

「大日本帝国憲法」は明治22年2月11日に発布された。その第一章「天皇」の第一条に「大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す」。第二条に「皇位は皇室典範の定むる所に依り皇男子孫之を継承す」。第三条に「天皇は神聖にして侵すべからず」。第四条に「天皇は国の元首にして統治権を総攬(ソウラン)し此の憲法の条規に依り之を行ふ」と定められていた。

これは、明治維新を成功させた元勳(ゲンクン)たちが、当時の欧米の列強国が骨格としていた絶対主義的なキリスト教を模倣(モボウ)し、絶対宗教的な天皇制を採用したのであった。

「皇位」は遠い神話に溯(カガミ)ったものとされ、「万世一系」の神話を創出し、その神話を介して現人神という人格を存在させたのではないだろうか。神話的、絶対主義的な天皇観、さらに天皇は憲法を超越する存在であり、いわゆる「天皇大権主義」の天皇観であった。これが昭和の国体明徴思想となったと思われる。

前記した「軍人勅諭」にある日本の軍隊は、神武天皇以来、天皇のみが統率するものであると、歴史の事実を曲げてまで、天皇の軍隊統率権を絶対不動のものだと強調したのである。

軍人は天皇の命令に直ちに無条件に服従せよ。上官の命令は、天皇から直接に命令されたものと心得て、絶対無条件服従を説いている。この絶対服従の軍規は他国に類をみない厳格なもので、天皇の軍隊を支える根本であった。(政府も軍隊のことには口出しできなかった。これを統帥権の独立と言うのである)

天皇の統率する軍隊は日清戦争・日露戦争で勝利した結果、兵器装備等の日進月歩の世界状況も知らず、いたずらに人命軽視の大和魂だけを強調し、愛国心を強要したのであった。そのため昭和の戦争は、天皇絶対主義が支配する絶頂期であったと言える。我々は絶対宗教的な天皇教の犠牲者となったのである。

国民は天皇のために死ねば天皇が報いてくれる、と言う絶大な価値観を植えつけられて来た。靖国神社は天皇によって召集された人々が、天皇のために命を捧げ、天皇によって祀られた社で、軍人勅諭と靖国神社は、天皇の軍隊を支える車の両輪にあたるのである。

敗戦日本を占領したアメリカにとっては、いかにして再起できない骨抜きの日本文にするか、いかにして日本を資本主義陣営につなぎ留めるかが問題であったと思う。彼らの押し付け憲法は、日本の旧支配層とアメリカ占領軍の合意の所産であろうか。天皇制は温存され、その戦争責任は不問に付されたのである。

1946年11月3日発布された「日本国憲法」は、第一章の第一条に「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く」とある。第三条に「天皇の国事に関するすべての行為には、内閣の助言と承認を必要とし、内閣がその責任を負ふ」。第四条に「天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行い、国政に関する機能を有しない」と定められている。

帝国憲法下で育ってきた我々には、今まで聞いたこともない「象徴」という文句は奇妙としか思えない。曖昧模糊(アマイモコ)とした政治的な意味から、不思議な地位を残したのである。米国は民主主義を掲げて戦った以上、天皇主権の建前を変えざるを得ず、苦肉の策であった。第一次大戦では民主主義の進展と資本主義の矛盾の中で、ロシアでは社会主義革命が起って帝制が倒れた。ドイツも帝制が崩壊し社会主義革命を防ぐ憲法を戦勝国が押し付けて決着した。

そこで国民に主権が移った立場から現行憲法を読んでみたい。憲法の冒頭に書かれているのは、主権者である国民のことではなく、最初から「象徴」天皇のことが書かれている。これが第一の疑問点である。そして「象徴」とは抽象的であるばかりか、「日本国民の総意」、すなわち国民全員が納得して決めたというのであるから、戦前に教育を受け、戦場に駆り出されて多くの死をみてきた我々が、おかしな感じを抱くのは普通ではないだろうか。国政に関する権能を持たない天皇制とは何であろうか。何のためであろうか。

天皇が神であった時代から、素朴な民族の鎮魂(チコソ)崇敬(スウイ)の場であった「靖国神社」へ、なぜ天皇が参拝できないのか。なぜ参拝しないのか。犠牲となった戦友のことを思うと、愚痴(ク)の一つもこぼしたくなる。「名誉の戦死」とは一体、何であったのかと絶叫したい。憲法上に問題ありと言うが、天皇の慈悲の心はどうなっているのか、と問いたくなる心境だ。

私は夢の中で昭和天皇とお話したことは何回にも及んでいる。激戦に次ぐ激戦の中で犠牲となった部下のことが念頭から離れず、それが昭和天皇との夢の会話にまで発展したのであった。それほど慰霊に傾注し、昭和天皇の靖国神社参拝を懇願したのであった。

戦前は天皇の御尊顔を拝むことは殆どなかった。拝顔できたのは1月8日の「陸軍始め」と4月29日の「天長節」で、東京・代々木練兵場で観兵式に天皇が行幸(キョウキ)された。陸軍士官学校の卒業式にも行幸があったが、陛下の肉声を耳にすることはなかった。それほど神格の厳しい時代であり、全国民は神と尊敬していた時代であった。

戦後の天皇は国会開院式を始め各種の行事の開会式、展覧会、相撲見物までも足を運んでいる。残念!!「靖国神社」には参拝されず、過去に何のような責任を感じているのだろうか。

「神話の始まりはみな陰謀(イナリ)で始まる」という「諺」がある。それに興味を抱いた私は神話確かめるために、全国各地の神話の里を行脚してみたことがあった。

記紀神話の神であり皇室の祖神といわれる「天照大神」が、弟の「須佐男命」(スサノオミコ)の乱暴な行為を怒り、「天の岩屋」(アマノイワ)に入って戸を閉めたという神話の「岩戸」(イワ)は、何処にもあるような岩の割れ目に過ぎなかった。それが神(神話)の「御神体」である。騙(ダ)されたという感じであった。

高天原(タマガハラ)の「天の河原」(アマノカハラ)は、岩戸から約100mほど離れた所で、石の河原であった。これらは子供の頃から信じきって育ってきた私も、諺の通りだと感じたのである。伝説は貴重な歴史的文献だと言われているが、それは私を納得させなかった。ただ言えることは、歴史は政治の道具として利用されやすいのである。

国家の捨て石となって生命を投げ出して戦ってきた我々は、妄想性被害者と言っても過言ではないような感じだ。今や我が国の伝統は消え去り、残骸(ザンガイ)の形式だけの国体が残り、文字通りの「無思想時代」を迎えてしまった。老兵となった我々の血肉には国家を感じ、国を想う心の高いことを鮮明にしておきたい。

(右の写真は、宮崎県高千穂町にある天照大神がこもった「天の岩戸」と伝えられる洞窟。これが天戸岩戸神社のご神体である)



③ ユダヤ教

昭和60年(1985)、私は現在のパレスチナ自治区を軍事占領していたイスラエルを訪ねた。その時、ユダヤ教～旧訳聖書を通読し、「ユダヤ紀行」と題して旅行記を書いている。その内容はイスラエル、不屈の民、奇跡の建国、及び旅行記である。そしてユダヤ教とユダヤ民族の歴史は、切り離しては考えられないことである。

キリスト教(23頁)の項で記したようにユダヤ民族はセム族系である。信仰する神というのは、目に見えない神、万物を創造した神「ヤハウェ」(一名はエホバ)であり、この神は、口にすべからざる神名である。

「ヤハウェ」は、旧訳聖書に登場するイスラエル民族の祖「アブラハム」として現れている。詳細は上記した「ユダヤ紀行」に記載済みである。(イスラム教ではアラブ族の祖である)・

【アブラハムが神の啓示を受けてメソポタミアからパレスチナに入ったのは、今から約4000年前のことである。そしてアブラハムに出現した神は「人間」によく似ている。

「自己に感謝し、自己に奉仕する人間とは契約して守護するが、自己の意に反すれば滅ぼす」という神であった】

唯一の目に見えない神を信じるユダヤ教では、キリストは本来は一人の人間であり、神格化した偶像崇拜だと軽蔑し、イスラム教のムハンマドも預言者に過ぎないから神ではないとしている。そして多くのユダヤ教徒たちは、「ユダヤ主義とは宗教ではなく、ユダヤ教徒たちの生き方」だと言っている。

本来のユダヤの思想は来世についての関心がない。だから死後については殆ど教えはないのである。人間とは、地上で今、具体的な身体と結びついた人格であり、現実とは、地上での人と人との関わりだと考えられるからである。

「ユダヤ教徒迫害の歴史」

『最も優秀だと自信を持った民族が、血を吐くような最もひどい迫害の歴史をたどられた』本家本元のユダヤ教徒から、絶対観念を揺(ユ)さぶられたキリスト教徒は憎(ニク)しみが生じ、「聖人なる唯一の救い主キリストを殺したのはユダヤ人だ」という冤罪(エンヰイ)物語が憎悪(ソウ)を正当化した。ここから永く恐ろしいユダヤ教徒迫害の歴史が続くのである。

ローマに対する二度の反乱(紀元66～70と135)の後に、ユダヤ教徒が四散した。このことは紀行文に記述した。

メソポタミア(23頁地図参照、現イラク)に移住したユダヤ教徒は比較的自由に恵まれたが、ヨーロッパに移住したユダヤ教徒、ことにキリスト教の国教化した以後は、中世・近世を通じて迫害を受けた。

イスラム教が起こってからは事情が違って来た。イスラムは最初ユダヤ教徒を「啓典の民」として尊敬もし、友好的であろうとしたが、彼らが期待していたほどではなかったから迫害に転じた。だがすぐに寛容な政策を取るようになり、スペインまで遠征した後には多くのユダヤ教徒がスペインに移住し、アラビア文化を受け入れつつ自分たちの学問を深めていった。

中世ヨーロッパに「平和と秩序」をもたらした有名なカール大帝(ドイツ)は、ユダヤ教徒

を保護して移住を歓迎した。さらにイギリスにまで移住していった。彼らは語学に優れ、アラビア文化を通じて古代ギリシアの学問をヨーロッパに伝えた。こうしたユダヤ教徒の存在なしには、ヨーロッパのルネサンスは考えられないほどである。

11世紀から始まった聖地奪回のための「十字軍」熱は、その憎悪(ソウ)と狂暴(キョウキ)をヨーロッパのユダヤ教徒にも向け、迫害が始まって虐殺(キョクツ)と略奪(リョクツ)をくり返した。

ユダヤ教徒は商人として活躍させられてきたが、イタリアを中心に盛んになってきたキリスト教徒の商業界はユダヤ教徒を締め出した。そこでユダヤ教徒に残された唯一の仕事は金融業だけであった。ユダヤ教徒だけがこの金融業に従事するようになった。

ユダヤ教徒迫害の傾向は中世末期にますます激化し、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア等でユダヤ教徒の財産没収、大量投獄や虐殺、ついには国外追放がくり返され、生き残りのユダヤ教徒は東方へ逃れた。

スペインではユダヤ教徒はキリスト教に改宗させられた。しかし15世紀の中頃から異端撲滅(イタンボク)の宗教裁判が開かれて処刑された。一方、追放されたユダヤ教徒は流れ流れて東ヨーロッパや中近東に向かった。

ポーランドは14世紀以来、ユダヤ教徒に寛容であったが、18世紀のポーランド分轄後はロシアの支配下となり、ロシアのユダヤ教徒圧迫の政策が強くなった。

ロシアのアレクサンドル2世の暗殺を機にユダヤ人の大虐殺が始まった。これは1920年まで続き、何十万ものユダヤ教徒が殺され、百数十万が国外に追放された。

これらの多くはアメリカへ移民したが、同時に東ヨーロッパの各地から、安住の地をパレスチナに求める運動が起こった。これが「シオンへの愛」の運動の始まりである。「シオン」とはエルサレムの丘の名で(私も登った)、ユダヤ教徒の故郷のシンボルであり、ここから後のシオニズム(ユダヤ人の国家建設運動)が起こってきたのである。

第一次世界大戦はユダヤ教徒にまた新しい問題を投げかけた。ロシアでは1917年の革命後の内戦状態の中で、ユダヤ教徒は両方からの攻撃を受け、特に白衛軍による虐殺と略奪がすさまじかった。

近東では大戦後の民族主義の気運の中で、トルコもギリシアも民族国家を形成しようとして、ユダヤ排撃(ハイキ)運動が強まった。かってスペインからの追放以来、近東諸国に移住して平穩に生活してきたスペイン系ユダヤ教徒も苦難を迎えることになった。

ユダヤ教徒・ユダヤ系の人々の間では、自分たちの精神的故郷のパレスチナへ戻りたいという憧れが常に存在していた。上記したような事情の下でその機運が強まったのである。

「イスラエル国家の成立」

第一次世界大戦後の1920年には、パレスチナはイギリスの委任統治下に置かれることになり、1929年には「パレスチナ機関」の設立が国際連盟理事会によって認められた。これが全世界のユダヤ教徒・ユダヤ系の人々を代表するものとなった。

このようにしてユダヤ移民の数は急速に増えたいった。1925年にはエルサレムにヘブライ大学も創設され、あらゆる領域でヘブライ語の定着が進んだ。「ヘブライ」とはイスラエル民族、またその言語のことで、古代ヘブライ語は旧訳聖書の言語である。

他方、ロシア革命後のソヴィエトでは、ユダヤ教徒はブルジョワとして排撃(ハイト)され、新しい体制の中での場がなくなって貧困化した。その上、新政府の反宗教政策によってユダヤ教徒は迫害され、シオニズムはブルジョワ運動とされてシベリアへ送られた。

ところがソヴィエト政府は公務員や外交官に多くのユダヤ系の者を使っていたので、国外では共産主義の出現はユダヤのせいだと言われることになった。カール・マルクスがユダヤ系であったことが、この中傷(チウツウ)をさらに真実味のものに思わせた。

こうしてシオニズムもポリシェヴィズム(ロシア社会民主労働党左派)も国際ユダヤの陰謀であり、背後で巨大な国際資本を握(ニギ)ったユダヤ教徒が、操(アツ)っているというデマが飛んでいた。

このような空気の中で反ユダヤ主義が高まり、イギリス・フランスでも迫害が行われ、特に中・東欧ではきわめて深刻な事態になっていった。

特にドイツでは反セム主義はきわめて露骨(ロツ)なものになり、あらゆる領域からユダヤ的なものが排斥(ハイト)された。「ヒットラー」は政権をとった後、遂に第二次世界大戦終結までに、600万人にのぼる虐殺を行ったのである。

(「セム」とは旧訳聖書中の人物で、イスラエル民族の祖である)

パレスチナでは、急速に増大するユダヤ教徒と彼らの精力的な発展を前にして、アラブ側が反発し、次第に暴動の規模は大きくなった。

その後、1939年にアラブとユダヤの二独立国の設立という案がイギリス王室委員会から提出されたが、アラブ側の反対で廃案となり、ユダヤ側にとっては希望が薄れてきた。

そのうちにユダヤ自衛軍は次第に強化され、過激派はそれを抑えようとするイギリス軍と衝突するようになった。イギリスは逆にパレスチナ、ユダヤの完全武装解除を要求したり、ユダヤ難民をドイツに送り返したりしたから、ユダヤ側の感情を硬化させた。

第二次世界大戦後の1947年に、今度は国連総会によって再度アラブとユダヤの分離案が承認されたが、アラブ側はこれを承認せず、再び武力に訴えて攻撃してきた。

イギリスはアラブに武器を与えたりしたが、ユダヤ側からの反応は予想外に強く、遂に1948年5月にイギリスは撤退し、英国の委任統治は終わった。

同年5月14日にユダヤ機関の行政部議長が独立を宣言し、遂にイスラエル国が誕生した。

9、11テロ事件の原因は、イスラエルの建国とパレスチナの建国の問題である。上記したような経過の歴史があり、紛争の第一責任者はイギリスである。第二次世界大戦後にイギリスを引き継いだアメリカの無責任が更に輪をかけたように大きくしてしまった。

「参考事項」

ユダヤ人とは具体的にどのようなのか？。

- ①ユダヤ教を信じている人。②ユダヤの戒律を守っている人。③母親がユダヤ人でなければならない。

「有名な米国のユダヤ人」

- ①ロックフェラー、②ルーズベルト大統領、③日本に開国を迫ったペリーはユダヤ系米人。
④ロスチャイルド、⑤キッシンジャー-国務長官、⑥東京裁判キーナン首席検事。

④ 儒 教

昭和63年(1988)、秦の始皇帝以来の歴代皇帝が天に誓ったという霊峰「泰山」に、私は登った。この儀式を「封禪の儀」(フシノギ)という。泰山の山麓にある「曲阜」(キョフ)という所が孔子の生まれた「魯城」(ロウ)である。現在、孔子の子孫が居住している所を「孔府」と称し、孔子一族の墓地は「孔林」、孔子の墓は「孔廟」(コウビョウ)と言う。儒教の祖である縁(エリ)の地を訪れ、深く感銘したことが思い出される。

「儒教」は宗教なのかと古代から議論されている。我々年代の者は幼少時から孔子の人格・思想である儒教精神で教育されてきた。その懐かしい教えは今日でも身から離れない。

儒教には他の宗教でいう神はない。出家者や在家者もない。そして伝道もない。儒教の思想が伝播(デガ)することはあったが、仏教やキリスト教のように外国に行き伝道するという行為はなかった。それで宗教でないと呼ぶのかも知れない。

しかし中国では、儒教が宗教のような社会的役割を果たしてきた。そして「教」という字を使うからには、**儒**も宗教として掲げることにした。又、日本の江戸時代には官学となったし、祖先崇拝を根本思想としているから宗教としたいのである。

「儒」の字は「人」と「需」からなり、音符の「需」は、雨乞(アマゴ)いをする「巫女」(ミコ)の意味や、しなやかなの意味である。したがって「儒」は穩(オヤ)やかな人、学者の意味を表している。孔子を祖とした学問が「儒」で、学派の教えが儒教だと思っている。だから「儒」は孔子や門人に直接由来するものではないようだ。

「儒」は中国・戦国期頃から用い出した語のようである。春秋・戦国次代(前770~前220)の中国社会は分裂を続け、混乱をくり返した時期で、諸侯は覇権を競(カ)い富国強兵の体制を強化していた。

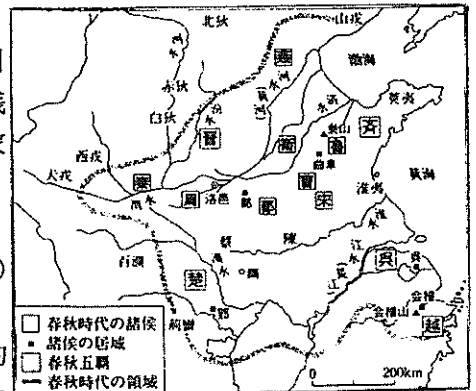
若くして孔子は魯(ロ、甌の嶮嶺)の役人になったが、彼の政治的思想は魯国に受け入れられず、祖国を去って十数年ほど諸国を遍歴(ヘンレキ)して抱負を説いて廻った。しかし入れられなかったのである。

孔子は68才のとき再び魯国に戻り、以後は政治への志を捨て、古典の研究と弟子の教育に情熱を傾けた。弟子たちへの教えを中心にした言行を、没後に弟子たちがまとめたのが「論語」である。 【右下は孔子・春秋時代の中国地図】

混乱期の春秋時代の末に出現した孔子の教えの眼目は、体制の権力による支配関係ではなく、道徳の実践(ジヤク)を通じて理想的な人格を作り、その理想を国家全体に及ぼそうとするものであった。

すなわち(修身・齐家・治国・平天下)である。

孔子を創設者とする儒教は、孟子・荀子(モウシ・ジュン)などにより教学的な展開を見た。そして前漢(前202~後8)の中期から清朝の崩壊(1616~1912)に至るまで約2000年間、中国の政治・社会体制の支柱となった。



但し中国を最初に統一した秦の始皇帝は儒教を採用せず、法家の思想を重視した。彼の焚書坑儒(フツョウキョウ)は有名である。当時の法律は支配者(皇帝)の命令であった。

儒教の根本経典とされるのが「大学」「中庸(チュウヨウ)」「論語」「孟子」の四書と、「易経(イキョウ)」「書経」「詩経」「春秋」「礼記(レイキ)」の五経である。(詳細な説明は省略)

「朱子学」(シュシガク)

朱子(1130~1270)は宋代の儒学者で姓は朱、名は熹、福建省の生まれである。私は平成3年(1991)に福建省・武夷山(フイザン)の麓にある「朱熹宮」(シュキウ)を訪れている。

朱子は孔子・孟子の学問の再建者で天文学や自然科学に造詣(ソウゲイ)が深く、加えて仏教や道教(老子・荘子)の思想などの教養も深く、特に「禅」に詳しかった。

「日本における儒教」

古事記と日本書紀(記紀)によると応神天皇の時代に、百濟(クハラ)の王仁(ワニ)が「論語」十巻と「千字文」一巻を携えて来朝したという。これが儒教の日本への到来である。

儒教は仏教と違い、到来時には日本の民族宗教との摩擦(マツ)はなかったばかりか、日本の古代社会の発展・成長に大きく貢献した。聖徳太子の十七条の憲法から大化改新(タカカヒシノ)、律令国家体制等、儒教の役割は大きかった。

鎌倉時代になると我が国からの留学僧や中国からの渡来僧によって、「禅」とともに「朱子学」が入ってきた。この思想や意識は「武士道」と呼ばれるように発展していった。

戦国武將を精神的に導いたのは仏教の僧侶たちであった。禅宗をはじめ鎌倉以降、僧侶たちは進んで武家集団と交わりを保ち、武士の心を理解し、指導する役割を引き受けるようになった。彼らは武士の心を捉えている儒教を阻(サ)むことなく、むしろ自分の心の問題として引き受け、仏教の教えと調和させるように努めた。

仏教における悟りの道と儒教における聖人の道とは同じ方向を向いているわけではないが、儒仏一致の理念を打ち立て、やがて儒教に一段と近づき僧籍を離脱する者も出現した。江戸時代の初期儒学の代表者となる藤原惺窩(セウカ)はその一人である。

徳川時代になると朱子学は、その体制教学の地位を占め、諸国の大名は藩校を設立し、朱子学は全国に知られるようになった。そして中江藤樹の「陽明学」、山鹿素行の「聖学」、伊藤仁斎の「古義学」、荻生徂徠(オギウラキ)の「古文辞学」など、各派が登場した。

18世紀の中頃になると、儒教は民間にまで浸透(シツトリ)して寺小屋などが教育の主体となり、一般住民の教養の向上に役立った。儒学は江戸時代の日本の精神の柱であったのである。

明治になると、国教としての神道、天皇崇拜と儒教倫理とが結合され、教育勅語にある忠孝を中心とする徳目(トクメ)が、全国の教育機関や家庭において教えられた。そして実践が強調されたのであった。

第二次世界大戦後、占領軍司令部(GHQ)により、儒教は封建制度を強化した思想・信条の典型として厳しく指弾(シツパン)され、その影響力は著しく低下した。人格の養成の点については我々の時代と雲泥の感がする。

プライドの高い武士の後裔は学歴社会の階段に乗り換えた。東大法学部という有能な実学の世界に踊り出たのが旧武士の流れであり、日本の近代化を動かした大きな原因となった。

⑤ 道 教

道教は中国古来からの宗教で、儒教・仏教と並ぶ三教の一つである。不老長寿をめざす神仙術と原始的な民間宗教が結合し、老荘思想と仏教を取り入れて形成されたものである。中国の民間習俗に強い影響力をもった民族宗教である。

道教には非合理的な点や呪術宗教的（ジュツリ）な色彩があった。そのために中華人民共和国成立後は、道教の宗教としての意識を認めず、その信仰は消滅した。しかし最近では復興したようだ。

道教の教えの内容は、時代によってかなりの違いがある。言わば日本の神道に似ていると言っても差し支えないだろう。

道教の高位の神の下には多くの神々たちがいる。山や川、風や雨も神にされるほか、黄帝（コウイ）・堯（キョウ）・舜（ジュン）などのに伝説上の天子や、秦の始皇帝、漢の高祖などの実在の皇帝から、孔子や弟子の顔回（ガンカイ）までも神の一人とされている。

また北斗七星を始めとする各種の星、土地、三国時代の有名な武将・関羽（カンウ）を始めとした、実在の人物も神とされ尊敬を受けている。

極端に誇張して言えば、すべてのものを神としている。これは道教が靈魂の影響を多分に受けているからである。中国古代・民間の雑多な信仰を基礎にしていることを物語っている。だから道教は多神教であり、地獄のことも説いている。

戦時中、中国戦線に参加した人たちは、各地で「廟」（ビョウ）を見ていると思う。この廟というのが最小の道教寺院の名称であり、大きい寺院は院・観と呼んでいる。その廟で呪（ノロ）い、お札、お払い、祈祷（キノウ）の儀式、儀礼など行われたのを見たことがある。

又、各家々の玄関の柱にはりつけた「お札」は、除災招福、延命長寿、治病、魔除、護身など、あらゆる目的にかなうものが揃（ソロ）っていたようだ。

道教の主目的が不老長寿であるから、医術面の養生部門も重要視されたのは当然である。そのために数え切れない漢方薬から按摩（アツマ）・マナッサージなどが生まれたのである。

要約すると道教とは、古代の民間信仰を基礎とし、神仙思想を中心として、道家（老子）、易、陰陽、五行（ゴウ、木・火・土・金・水）、緯書（予言）、医学、占星、卜筮（ウラナヒ）や巫（ウラ）（うらない）の信仰を加え、仏教の組織や体験にならって纏（マ）められたものである。不老長生を主な目的とする呪術宗教的な傾向によって、「現世利益的」な自然宗教である。

私は独り旅で北京市内の「道教の総本山の白雲観」を訪れたことがある。そこには「道教協会」が設けられていて、道教の知識を得ることができた。仏教には寺院があり僧尼（ソウニ）がいるのと同様に、道教にも道観（ドウカン）または宮観（キョウカン）がある（大きい方から観、院、廟）。そこには僧にあたる「道士」、尼にあたる「女冠」または「女道」がいる。

「道教の日本への影響」

奈良・平安時代から江戸時代までの一部の日本人に、神仙思想や道教が伝わっていた。日本の「修験道」（シュケンドリ）は道教の日本版と言えるだろう。

「貝原益軒」（カイハラエケン）の養生訓は有名である。その要訣は道教医学そのものである。七福神の一人である「寿老人」（ジュウジン）は長寿を授ける道教の神とされ、今でもかなり広い地域に祀られている。関帝を祀る「関帝廟」も道教信仰の一つで、今でも中華街でよく見られる。

⑥ ヒンズー教 (ヒンドウー教ともいう)

インド亜大陸に古来から行われた宗教は、決して単純なものではなく、土着・外来のものも含めて、きわめて多岐にわたっている。またその文化も種々のルートを経て諸地域に伝わった。したがって「ヒンズー教」を最も広い意味に理解すると、それはインド本来の原住民の持っている素朴な宗教を始め、インダス文明の担(=)い手たちが持っていた宗教、西北インドから侵入してきたインド・アーリア人(梵語で貴いの意)がもたらした宗教、またそれらとかがわりつつ展開した諸宗教、更にイスラム教、キリスト教、近年再興されたという新仏教に至るまで、その全ての宗教を核とする文化の総体を指している。

換言するとヒンズー教は、歴史的には有史以来の時代から現代まで、地域的には文化的な意味におけるインド、いわゆるインド文化圏全般にわたって行われてきた宗教の複合体であろう。即ちインドの「土着の信仰・習俗」と「バラモン教」とが融合した「民族宗教」である。

「バラモン教」(婆羅門教)とは、古代インドにおけるバラモン階級を中心に形成され発展した民族宗教であり、バラモン至上主義である。

「バラモン」とはインドの「バルナ」(四種類の姓)の最上位の身分である。司祭者、祭祀と教育を独占する特権階級で、「カースト」制度の最高位を占めている。

ヒンズー教では「ビシュヌ派」と「シバ派」が有力な宗派である。そしてヒンズー教は狭義の宗教ではなく、社会制度・文化の全般にわたる概念であるといえる。その原初の形態は紀元前1300年頃に発し、前3世紀頃に一応の骨格が成立した。しかし狭義には、7~10世紀頃にバラモン教という形で発達したものをいう。インド人の大部分はヒンズー教徒である。

「カースト」(ポルトガル語の「血統」に由来する)

カースト制度はインド特有の世襲的身分・階級制度である。インド固有の種性、社会階級制度で、共通の名称で統合された家族的、種族的、職業的集団を形成し、同一の信仰・職業を持ち、結婚・食事・社会的地位など、他の集団と厳格に別れている。

この制度は紀元前2000年紀にインドに侵入してきたアーリア人が定住する間に確立したもので、四種姓(バルナ)があり、現在も厳然として存在しているようだ。

上位から、①「バラモン」(司祭者)、②「クシャトリア」(王侯・武士)、③「バイシャ」(庶民)、④「シュードラ」(隷属民)の四つの社会的身分である。

現在でも2500種以上の「カースト」や「副カースト」に分かれていて、各カーストには結婚・職業・食事など、日常生活に厳重な規則がある。また四種姓に含まれない最下層に「不可触民」(パリア)がある。そして結婚は同階層でないと許されないのである。

1950年に憲法がカースト制度の非人間性を否定したが、今なお強く残存している。

私は昭和53年(1978)にインド・ネパール、昭和61年(1986)にバリー島、昭和62年(1987)にカンボジアを訪れ、ヒンズー教に接してきたが、私には最も解りにくい宗教であった。現世で善行すると一つ上の階層に生まれ変わることが出来ると言われるが、甚だ不可解である。インドの偉人・聖人であるガンジーもネールも、カースト制度を改正できなかったのである。(ヒンズー教で導師・教師を「グル」と称すが、オウムは真似したのか) 仏教の開祖である仏陀(釈迦牟尼)もヒンズー教の出身である。

⑦ ジャイナ教

昭和53年(1978)、私は現在でもジャイナ教が存続しているという、インドの宗教都市「ベナレス」を訪れている。ジャイナ教は仏教とほぼ同時代に始まり、今も生き続ける重要な宗教の一つで、人間は何らかの行為に基づいて輪廻(リネ)をくり返すと言う。(耆那教)

インド・アーリア人はインド西北から東進してガンジス河中流に達した。この地は上流から運んでくる肥沃な土壌のために農耕生活を営むのに適していた。彼らは次第にその地域に定住し、農耕生活を行った。豊かな農産物から経済活動が盛んとなり、流域には多くの商業都市が成立した。その都市の中には、かつてマウリヤ王朝の首都であったパータリプトラ(現パटना)や、宗教都市として有名なベナレスなどがあり、現在まで存続しているものもある。

『マウリヤ王朝は、インドで最初の統一帝国を築いたマガダ国の一王朝(前317~前180頃)。後のアショーカ王時代に全インドを統一して仏教を広めた。死後、仏教は衰退した』

紀元前5世紀頃になると、この地域に一連の思想家が現れた。その一人が仏教の開祖である。仏教創設者の仏陀(前463~前383)と同時代に、しかも彼等の活動範囲とほぼ同じ地域に活躍し、さらに思想の上でも彼のものとはかなり近い関係にある一人の修行者があった。それがジャイナ教の開祖である「ヴァルダマーナ」(前444~前372)である。

「ヴァルダマーナ」は俗名であり、後に、真理を悟って煩惱(ホリ)に打ち勝ったという意味で、「ジナ」(勝利者)と呼ばれた。「ジャイナ教」という呼称も、ジナという言葉に起因する。また同時に、彼は「マハーウィーラ」(偉大な英雄)とも呼ばれた。

「ヴァルダマーナ」の思想が如何なるものであったかを正確に知ることは困難である。しかし、靈魂や行為(業)にかかわるジャイナ教の基本的な思想は、彼の中に確立されていたと推定される。それは厳しい戒律生活と苦行と実践による輪廻(リネ)からの解脱を説くもので、仏教と同じく非バラモン系統の宗教である。

インド一般に「地獄」の観念が大きく展開した。仏教のみならずヒンズー教でも同様である。地獄は常に「下」の部にある。インドでは地獄のことを一般に「ナラカ」という。この意味が「奈落」(ナカ)または「那落」である。(Naraka=ナラカ)

中国語で「耆那教」と書くが、「耆」(シ)は年寄り、「那」(ナ)は美しい、安らかなこと。

仏教の姉妹宗教であるジャイナ教は、世界宗教にはならなかったが、現在でもインドでは活動している信者は約200万人という。一方、仏教はインドでは滅亡し、インドの外に出て伝播し、世界宗教の一つとなった。

(右は私が訪れた時のヒンズー教の聖地ベナレス、ガンジス河での齋戒沐浴風景。昔はジャイナ教の聖地でもあった)



⑧ シク教 (シーク教)

インドにはきわめて多くの宗教が混在している。その状況は宗教の坩堝(クワ)と言っても過言ではないだろう。その中にはインド固有の宗教もあれば、外来の宗教もある。

外来の宗教の中でも、後世のインド文化に大きな影響を与えたイスラム教徒は、11世紀頃から西北インドに侵入し、特に北インドを中心に重要な役割を果たした。(現在のパキスタン)

【私が第二次大戦時、ビルマ(現ミャンマ)で英印軍と戦った時代のインドは、現パキスタンを含んでいた。(パキスタンは1947にバングラディッシュと共にインドから分離独立)】

このイスラム教を一方に、他方に伝統的なインドの宗教をひかえ、イスラム教の影響を受けながら改革をしようとする動きがあった。即ち、イスラム教徒とヒンズー教との折衷(セツシュ)をめざすものである。その一つが「シク教」である。

「シク教」の開祖は「ナーナク」(1469-1538)である。しかしナーナクの宗教には、彼の以前の宗教家「カビール」の影響が大である。カビール(1440-1518)が生きていた頃の北インド(現パキスタン)には、様々な宗教活動が行われていて単純なものではなかった。その特徴の一つは雑念を払って精神を集中し、イスラム教の神「アッラー」と一体となるという神秘的なものであった。こうした宗教家は北インドを中心に活躍していた。そしてインドの世襲的な身分制度のカースト制度(47頁)に対しては批判的で、偶像崇拜も否定的であった。

ナーナクは、ヒンズー教徒が行うような神の偶像を崇拜する行為は、何の役にも立たないと考えた。聖地に巡礼してそこで沐浴(セツ)することが、苦しみと生存から完全に脱却を実現するとヒンズー教は認めているが、ナーナクはこれを無意味だとしている。

ナーナクは、神に対して全身全霊をもって信愛を抱き、神の名を常に心にとどめて続けて決して忘れない場合、人は神に達することが出来ると考えた。そして現実の世界では自分の職業を真面目に遂行しつつ、善を積むことが重要視された。

「ナーナク」の死後、シク教の伝統は歴代その中心として指導者となった「グル」たちによって継承された。第五代のグルである「アルジャン」は、ムガル王朝(インドのイスラム帝国)との紛争で死亡した。それ以来、シク教徒とイスラム教の仲は不和となった。

第10代のグルである「ゴーヴィドン」は、彼以前のグルたちの語に自分の語を加えて、一つの聖典を編纂した。それがシク教の聖典となった。その内容は「グル」への絶対信頼を強調し、ヒンズー教的な多神教的色彩と、イスラム教的な一神教的なものが混じったものであった。しかしシク教の教主であるグルの伝統は、第10代で絶えてしまった。

シク教の教団は一時期は大いに勢力を増し、パンジャブ地方を中心として一つの独立国的(ラホールが中心)に地域を占有していたが、イギリスの支配によってインドに含められた。パンジャブ地方はパキスタン北東部からインド西北部で、古代インダス文明の発祥地。

現在のシク教徒は男性は毛髪を剃らず、ターバン(頭に巻く布)を頭に巻き、職業にきわめて勤勉な人々として有名である。現在では、シク教徒は世界の国々に移住して様々な領域で活躍している。アメリカのカリフォルニアや、カナダのブリティッシュコロンビアをはじめ、イギリス、東南アジア諸国、中東諸国にも彼等は活躍し、それはほぼ世界中に及ぶと言っても過言ではないだろう。

⑨ ゾロアスター教 (拝火教)

平成7年(1995)にイラン(旧ペルシア)を一周し、ゾロアスター教の本山を見学した。昭和54年(1979)と昭和63年(1988)にパキスタンのカラチでも見学している。その時の紀行文にも記述したが、ここでは稍(やや)詳細に記載しておきたい。

概要を述べるとゾロアスター教は、紀元前6世紀頃のペルシア(現イラン)の預言者である「ゾロアスター」が始めた宗教である。それはペルシアの民族宗教を二元論で体系化したもので、「光の神・善神」と「暗黒の神・悪神」の確執(カヅ)から一切を説明し、ついに悪神は敗れて暗黒の中に追放されると説いている。善神の象徴である火を崇拝するから「拝火教」とも呼ばれた。7世紀のアラブによる征服後、イスラム教に改宗する者が多くなり衰退した。

ゾロアスターは幼少の頃は祭司の仕事に親しんできたが、20才になった時、両親の意思に逆らって旅に出たという。30才にして啓示を受けた。それは春の季節祭を祝う会の時であった。夜明け方、川の中から水を汲んで土手に引き返そうとした時、幻を見た。光そのものともいふべき衣装を着た光り輝く存在が、土手の上に立っているのを見た。この存在に導かれて、ゾロアスターは「アフラ・マズダー」と、それに仕える神々のもとにたどり着いた。その瞬間、彼の魂は開かれた。「アフラ・マズダー」は彼を厳肅のうちに招き寄せて神に仕えさせた。

「アフラ・マズダー」(アフラは神、マズダーは知恵の意)はゾロアスター教の主神である。善と光明の神であり、創造者であり、万物の主とされている。暗黒と悪の首長・アーリマンと戦い、ついに勝利を得て新しい世界をもたらすとされている。

「アフラ・マズダー」からの教えを、ゾロアスターは広めようとした。しかし、そのころのイラン(ペルシア)には、ミトラ教その他の反ゾロアスター的な宗教が存在していたから、伝道は困難を伴った。

ゾロアスターが42才の時、反ゾロアスター的存在であり続けていたカウイ王朝のウィシュタースパ王が、ゾロアスターに帰依(けい)した。この王の保護の下でゾロアスター教は広まった。

「ゾロアスターの教え」

最も重要なことの一つはアフラ・マズダーを最高神に位置づけたことである。彼の神は「全を知り給う」全能の神で、あらゆる「善き創造」を行い、常に「完全なもの」であり、全てを「光明で満たす存在」である。又、彼の神の下に「不死にして聖なる存在」(アムシャ・スプンタ)を従えている。それは下記の通りである。

①「精霊」、②「善思」、③「献身・敬虔(ケイクソ)、④「宇宙を正しく秩序づける正義」(アシャ)、⑤「理想的領土・王国」、⑥「完全」、⑦「不死」のごとく、抽象的な内容が付けられた神々である。

「不死にして聖なる存在」は、人間、家畜、大地、天空、水、植物のように、アフラ・マズダーの物質的な善き創造と結びつけている。④「宇宙を正しく秩序づける正義」(アシャ)はゾロアスターによって火と結びつけられている。火は「アシャによって力づけられ、力強い存在であり続けた。

ゾロアスターはアフラ・マズダーを「火をもって審判の到来を想定していたが、その終末に

際して、「火の灼熱(シクツ)による審判」が行われ、火によって「善と悪が裁かれる」として
いる。そして火は「アフラ・マズダーの子」と称されているのである。

善悪の選択(セツク)の結果は、死後四日目の朝に厳正に計量され、善が多い者は天国に、悪が
多い者は地獄へ行かされる。天国は無限の光明に満ち、そこに入った者は不死である。地獄は
無限の暗黒で悪食だけ与えられ、悲嘆(ヒク)の叫び声が支配する場所である。

人が死ぬと肉体と魂が分離する。魂は三日の間、死者の頭の近くに坐り続け、四日目の朝に
「裁きの橋」に向かう。ここで善悪が計量され、善が悪をしのいだ人の魂だけが、橋を渡って
天国に入れるという。そうでない人の魂はこの橋を渡ることができないのである。

ゾロアスター教は、ササン朝ペルシア時代(226-642)には国教となった。この頃の神学的文
献は パフラヴィー(中世ペルシア語)で書かれている。しかし前記したようにイスラム教徒
のイラン侵入(636)後、ゾロアスター教は衰退を余儀なくされた。しかし宗教は一朝一夕に消
滅しない。ゾロアスター教の信仰は現代でも続いている。

ゾロアスター教以外の宗教に生きようとしなかった人々は、陸路、海路によって西北インド
沿岸地域に移動して現在でも7~8万人が集中している。イランでは私が訪れたテヘラン、ヤ
ズド、ケルマンの街を中心に約2万人以上の信者が生存している。

5世紀中頃から8世紀中頃にかけて中国に移動したゾロアスター教は「祆教(ケンキョウ)と呼
ばれた。祆教は特に唐代には長安(現西安)に祆廟(ケンビョウ)を建て、信仰したほどであった。

「聖なる火」(拝火教)と「鳥葬の塔」

ゾロアスター教の教えは、物体や行為を媒介して伝えられてきた。それらの中で最も重要な
のは、「聖なる火」と「鳥葬の塔」である。

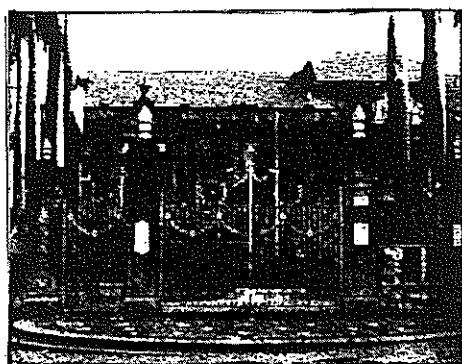
ゾロアスター教徒は「拝火教徒」として知られている。前記した「アフラ・マズダーの子」
と称されている火を通して、最高神アフラ・マズダーに祈りを捧げているのである。その火に
も三種類の火が存在し、その間には等級がある。そ
れは省略したい。(右はイラン・ヤズドの聖火殿)

私はイランのヤズドという街で一泊し、聖なる火
を祀る「聖火殿」に参拝した。殿内の聖火壇の中央
にある聖火炉の火は燃え続け、絶やすことはない。

聖なる火は祭司によって、日の出、真昼、午後の
中頃、日の入り、真夜中の刻限に香木が加えられる。
ここで聖なる火への祈りが唱えられ、供物(ケイ)を
もって近いづく人に対して、火は生命、知恵、子孫、
活力、勇気等を恵み、善き報い、善き名声、魂に永く平静を与えるとされている。

「鳥葬の塔」は聖なる火とともにゾロアスター教の中心である。俗に「沈黙の塔」として知
られている。ゾロアスター教徒は死体を塔まで運び、裸にしてさらし、鳥に食べさせるのである。

ゾロアスター教では人が死ぬと、醜悪(シュウキ)な悪魔が死体に侵入すると考えており、その
ために死体を鳥に食べさせ、悪魔の侵入・飛散を予防するというのである。



『失われた宗教』 『世界の秘密宗教』 の一部

『失われた宗教』

古代の諸民族はすべてが宗教的であった。その信仰は神話や伝説によって表現された。当時の支配階級と宗教との強い結びつきは、時には国王が神や神の子孫とみなされた。宗教の発展段階の初期には、個性豊かな神々が活躍する神話があり、その宗教儀式は非常に興味深い。

「古代エジプトの宗教」

エジプト人は、自分の周囲のすべての存在、植物にも動物にも石にも、太陽、月、嵐などの自然現象にも神性を認めた。その結果、数百数千の神々が存在することになった。その多くの神々が創出した宗教の世界は、「不死」の信仰とピラミッドを生み出し、人間は死後も様々な形で永遠に生き続けるものと考えたのであった。

古代エジプトの王たちは生まれた時から死後の生活を準備した。私は昭和54年(1979)にエジプトを15日間にわたり見学したが、墓地であるピラミッドや、山をくり抜いた洞窟には、玄室(棺)のほかに、現世で必要であったような豪華な必需品も沢山格納されていた。

「バビロニア・アッシリアの宗教」(23頁地図参照)

古代メソポタミア文明は、前四千年紀後半にチグリス・ユーフラテス両河地域に定住したシュメル人にはじまる。彼等の都市国家は、各都市神を頂点とする万神殿をもち、経済活動までもが神殿を中心に営まれていたと言われている。その以後はセム族に引き継がれていった。

メソポタミアの覇者としてセム族が確固たる地歩を築くのは、前二千年紀である。南はバビロニア王国、北はアッシリア王国がそれぞれれの政治・経済・文化の中心であった。

両国は古代王国社会の例に洩(ε)れず、王を主役とする国家行事から宗教が重要な役割を果たしていた。法律は神から付与され、条約は神によって批准され、戦争は神々の戦いであった。人生の幸・不幸は神々の意思によるものと信じ、呪術的であり多神教であった。

セム族の崇拝した神の数は1500とも言われ、その神々はシュメル人から受け継いでいる。

「マニ教」(マーニー教)

マニ教は、3世紀のペルシア人(現イラン)の説いた教えのことで、バビロニアに発し、アジア・ヨーロッパ・アフリカ大陸の各地に、比較的速やかに伝播(デバ)したが、消え去るのも早かった。

東方(中国)では14世紀までに、西方ヨーロッパでは13世紀(アルメニアは19世紀)までに滅び去った宗教で、いわば化石となった宗教である。

私が初めて「マニ教」の名称を知ったのは、昭和60年の「中国のシルクロードの旅」であった。シルクロードのブームとなった20世紀の探検で、トゥルファン、敦煌(トウカ)から出土した漢訳経から、マニ教がキリスト教、ユダヤ教、ゾロアスター教等の諸宗教の思想も包括している、世界宗教の一つであったことが判明した。

紆余曲折(ウキョウケツ)はあったが、ササン(ペルシア・イラン)王朝の庇護下の大伝道で、西はエジプトから東はクシャーナ(中央アジア)までも基盤とした。私は中国・福建省・泉州でマニ(摩尼)寺草庵の記事を読んだ記憶がある。(マニ=生命で満たされる器=魂の意)

『世界の秘密宗教』

宗教の歴史をたどっていくと、現代世界の感覚で眺めて見る時、不可解な教義や教団が存在している。古今東西の歴史には、きわめて特殊な秘密性の宗教が数多く栄枯盛衰を繰り返していることが分かる。

秘密宗教と呼ばれているものは、現存するものだけに限ってみても、数十種にのぼると考えられるが、歴史上、すでに消滅したものを含めると飛躍的な数字になるだろう。地理的には全世界にまたがり、宗教的にはキリスト教、イスラム教、ヒンズー教、祖先崇拜、精霊崇拜、呪術信仰などとの関連をもっている。ここでは2件のみ取り上げてみたい。

「隠(か)れ・キリシタン」

キリシタン解禁後8年目の1865年3月、長崎の大浦天主堂における信徒が発見されて、潜伏していた日本の多くのキリシタンたちは、本来の姿に戻ったのであった。しかし、その後も潜伏した時の状態のままで、信仰や習俗を伝えている人々が今日もなお、五島、平戸などの長崎県内などに生き続けている。

1543年に3人のポルトガル人が種子島に来航して日本はヨーロッパと結ばれ、6年後に聖フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸してから、日本はキリスト教文化に接した。

隠れキリスタンの思想の根幹はキリスト教の教えである。しかし、幕府の異例ともいえるべき厳しい弾圧の下に、250年にわたって隠れながら信仰を保ってきた。そのためには特殊な環境や条件が必要であったと思う。また信仰内容にも変容しなければならなかっただろう。

私は歩兵大隊長として第二次世界大戦(ビルマ)で戦った部隊は長崎県大村聯隊編成であった。その関係から戦後、島原・五島・平戸・天草等に各2回づつ訪れ、殉教地、教会跡やキリシタン道具などを見学した。それ以来、隠れキリシタンに興味を抱いた。

キリシタン信仰を秘密にしなければならないことは、信仰の形態や内容の変更を余儀なくさせたのである。そして隠れキリシタンたちは地下に潜(か)ってマリアに祈り続け、キリスト教徒でありながら、同時に寺の檀家や神社の氏子になっている者が多いのも特徴であった。

「フリーメーソン」

フリーメーソンを世界の秘密宗教の一つとして見ることには、異論があると思う。しかしこの組織が秘密を伴(ト)なった国際的な組織であることは、周知の事実で間違いない。

フリーメーソン組織は正式には1717年、「石工のロッジ(支部)」の代表が集まって、「英国総ロッジ」を結成した時に始った。彼等が教会の庇護権(ヒゴク)をもち、種々の義務を免除されていたことが、【フリーメーソン】(義務を免除された石工)の名称の由来である。

メーソンたちは敬虔(ケイケン)なキリスト教徒で、その後、全世界に発展して行った。1789年のフランス革命で掲げた「自由・平等・博愛」は、メーソンが標榜(ヒョウボウ)した博愛主義の借用である。米国では独立戦争(1776)当時、世界の約600万のメーソン会員の内で約400万が米国に住んでいたと言われている。日本の場合は、イギリス系フリーメーソンの正式代表は、長崎のグラバー邸で知られるトマス・ブレイク・グラバーであった。

現在のフリーメーソンは自由・平等・博愛の実現を目指す世界規模の団体で、啓蒙主義精神を基調とし、多くの政財界の名士を会員を含むとされている。しかし、その全容は明らかにされていない秘密結社であり、その宗教的、倫理的な理念は未だ明らかではない。

『世界漫遊紀行』

2001年9月11日にアメリカ同時多発テロ事件が突発した。それに刺激されたような感じで、2002年の年賀状に「春秋に義戦なし」と「添え書き」を書いた。それは戦争体験者の一人として平和を懇願(コガシ)する心の発露(ハツロ)であり、争いは世界最大の罪悪だと言明したかったからである。

地球上の人間の願いに反し、同時多発自爆テロ事件はアフガニスタンに飛び火して、小規模ながら世界戦争の様相を呈してきた。その経過を眺めながら私は非才を顧みず、病身を押して今年の春三月からこの拙書を書き始めた。

これまでに『テロと戦争』、『テロと宗教』、『世界の宗教』という項目を書き終わった。これから、私が「歳月は人を待たず」、「人生は快あるのみ」と、世界を股にかけて漫遊した国々の中から、9、11テロ事件に関係する国について若干、書き足してみたい。

何れのことに関しても専門家ではなく門外漢の域を出ない私見は、正鵠(セイコウ)を得ていないのは勿論だが、自分が直接に見聞したことを書き綴った紀行文や新聞記事を基礎にして、時間的に前後することも無視しながら書いていく。

この『世界漫遊紀行』を書き始めた02年4月4日当時の世界の情勢は、アフガニスタンでは組織的な戦闘は消え去り、復興に向かって暫定政府機構が漸く動き出していた。その影響力は首都のカブールに限定されていて、多民族国家で未開発の国の末端までは国連機構は行き届かず、治安はもとより援助物資も手に入らない状態であった。

それに加えて、軍隊は戦時体制から平時体制に移行して兵士は不要となり、余剰(ヨリヨリ)となった兵士は失業者となって路頭に迷った。一方、戦争で難民となった膨大(約ダイ)な人たちが帰国するなど、新たな不安が醸(か)し出された。

さらに全国各地の地方軍閥は生きがために群雄割拠して軍政を策し、何のために戦争をしたのか甚だ疑問である。先にロシアが侵入してきた戦争も、今回のアメリカの加入した戦争も、彼等は自国の利益のためばかりの戦争であった。アフガンの人々の抱いていた希望とは掛け離れ、結果は支離滅裂(シラメツ)となった悲惨家族と、国土の荒廃だけが残っただけである。

今回のアメリカの9、11事件発生の原因は、イスラエルとパレスチナの問題に起因していることは、万民の認めるところである。アフガニスタンの戦闘が下火(シビ)になるのと比例するように、パレスチナのイスラム過激派は自爆テロ戦法でイスラエルに挑戦し、そのテロはエスカレートするばかりであった。

本日(02、04、04)現在の状況は、パレスチナのテロ組織壊滅のために戦車数百両と、数十機の戦闘ヘリコプターを出動させたイスラエルは、パレスチナの八都市のうち六都市を包囲蹂躪(シュウリツ)し、パレスチナのアラファルト議長公邸までも包囲して軟禁(ナギシ)している。

このような世界の情勢に於いてブッシュ米大統領はイスラエル側に立ち、パレスチナ自治政府側に対しては冷酷である。紛争の原因が明瞭でありながら、中東紛争問題に関して解決策を講じていない点は、世界の良識は納得できない。その結果、同胞意識の強い周辺諸国のアラブ人は、我が身に起きたように事態を嘆き、怒りが渦を巻いて燃え上がるのであった。

「イスラエル」

昭和60年(1985)に私がイスラエルを訪れた時は、世界は未だイスラエルと国交は結ばれていなかった。第一次から第四次にわたる中東戦争が終了して日は未だ浅く、現在のようなパレスチナ暫定自治政府も存在せず、イスラエルの完全な軍事占領下であった。

世界から憎悪(ウチ)されていたイスラエルへの旅は世界中が禁止していた。イスラエルの出入国のスタンプがパスポートにあると、世界各国は出入国を拒否していた。そのような状況下で我が国で初めてイスラエル旅行を募集する旅行社が現れた。それは日本の出国はローマ行きであった。それからローマで四時間ばかり待機してイスラエルのテルアビブに向かった。

イスラエルの入(出)国の時はパスポートにスタンプは押さず、代わりの紙片に押して代用し、使用後は捨てるという手段を講じた不法な手段であった。勿論それはイスラエルが観光収入を獲得するための秘策である。

当時のイスラエル紀行文を繙(ヒト)くと、その「まえがき」に、【ユダヤ人の歴史は変遷の歴史であり、モーゼの出エジプト以来、迫害と危難の連続であったが、その都度、民族の団結の底力を発揮してきた。彼等に「神に選ばれた民族の誇り」をもたせ、苦悩の災害の中に生きてきた支えは、宗教(旧訳聖書)であり、ユダヤ教(ヘブライ教)を抜きにして語れない】と書かれている。

次いで【パレスチナの土地にアラブ人とユダヤ人が住み着いてから何千年の歳月が流れ、肩を寄せあって仲良く暮らしていたことも事実である。特にオスマントルコの支配下ではその通りであった】と書き、第二次世界大戦の戦勝国の「戦後処理」の不手際から、今日のような悲劇が生まれたと、私の紀行文は記している。

旧訳聖書の人々が生きた時代は日本はまだ縄文文化の時代であった。前三千年紀初め、北のメソポタミアから南のエジプトにかけての広い地域、すなわちオリエント世界に王朝が成立し、都市が栄え、青銅器や文字の使用がすでに行われていた(23頁地図参照)。その時の日本列島では人々は堅穴式の住居に住み、石器を使って狩猟漁労採集の生活を営んでいた。

前17世紀のパレスチナでは馬や戦車が導入され、アルファベット文字の使用が始まっており、前13世紀には製鉄法がオリエント全域に広がっていた。

以降の古代史は紀行文に書いた通りで省略する。

『イスラエルの誕生と経過』

旧訳聖書によると、神がユダヤ人に与えた「約束の地」が、現在のイスラエルとパレスチナ自治区の地域である。しかし、それはパレスチナ人にとっては認められないことであり、結果は、何十万人ものパレスチナ人が故郷の町や村を追われて難民となってしまった。そして最初はパレスチナの人々とユダヤ人との対立であったが、その後はイスラエルとアラブの対立としてとらえられてきた。

その最大の原因は第一次世界大戦時におけるイギリスの二枚舌であった。オスマントルコ帝国は第一次世界大戦が始まるとドイツ・オーストリア側について参戦し、イギリス・フランス・

ロシアを中心とした列強と激しい死闘を繰り広げた。

第一次世界大戦中、イギリスはパレスチナを含む東アラブ地方の民族と、内容が矛盾する三つの条約を結んだ。その中でイギリスはイラク南部、及びヨルダン、さらにパレスチナ南部地域を自分の統治地域としたのである。

又、エルサレムを含むパレスチナ北部は国際管理地域としたが、同条約は秘密条約とされて内容は公表されなかった。

イギリスはアラブ地域に親英的な王国を建設すると宣言した。それは東アラブ地方とアラビア半島に、独立王国を建設することを約束したのである。しかし領土には幾つかの留保条件を付け、はっきりとした境界線を示さなかった。

それに加えてパレスチナにおけるユダヤ人の入植は、アラブ住民の政治的、経済的自由と相反しない限り許されると説明されていた。(上図参照)

第一次世界大戦後の講和会議で、それぞれが矛盾する約束手形を発行していたイギリスは、ほとんどの地域が英軍の占領下であったため、強い発言力を持っていた。即ち敗戦国の権利を如何に配分するかの問題に過ぎなかった。

1922年7月、国際連盟理事会は、パレスチナに関する委任統治規約を採択し、イギリスの委任統治が承認されたのであった。

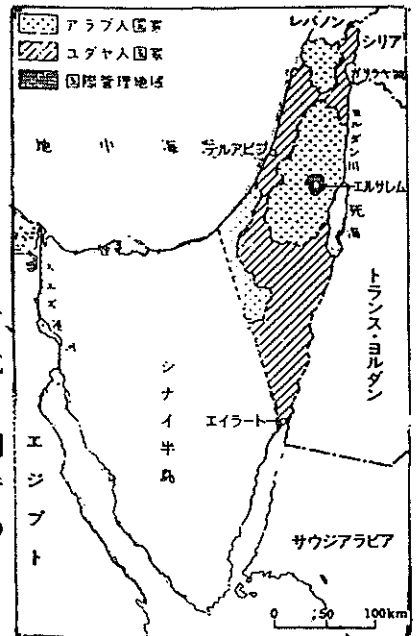
欧米の世論は、ユダヤ人の国をパレスチナに建設しようというシオニズム運動に、同情的であった。しかし、パレスチナ・アラブ人は、アラブ人の国としてのパレスチナの即時独立を要求すると共に、ユダヤ人移民の増加に強く反対した。この結果、各地で衝突がくり返された。

第二次世界大戦後の1947年2月、無責任極まる英国は、パレスチナ問題の解決を国連の手に委ねると宣言した。パレスチナにおける二つの約束の対決、英国政府へのテロの増大、欧米諸国の対英批判に直面したイギリスは、遂にパレスチナの経営を放棄してしまったのである。1947年11月、国連のパレスチナ委員会の多数案、すなわち、パレスチナをアラブとユダヤの二つの国に分割し、エルサレムとその周辺を国際管理下に置くというパレスチナ分割決議案を、賛成33反対13、棄権10で採択した。米ソは賛成でアラブ諸国は反対であった。

ユダヤ人にとっては分割決議は大きな勝利であった。他方アラブ側は強く反発し、アラブ連盟はユダヤ国家の樹立を武力で阻止すると宣言し、アラブ解放軍が結成された。

英国の委任統治が終了した1948年5月1日、国連分割決議を根拠にして、イスラエル国家の独立が宣言されたのであった。以上から観察すると、英米は当初からイスラエルの独立に尽力し、今日の紛争の火種は米英に在りである。

(右は1947年の国連のパレスチナ分割決議で採択された決めた各国領土の分割表)



新しい国家の誕生は、新しい戦争の始まりであった。この戦争をイスラエルは「独立戦争」と呼び、パレスチナは「パレスチナ戦争」と呼んだ「第一次中東戦争」であった。

1956年10月、イスラエルがパレスチナ側の「ガザ地区」とシナイ半島（エジプト領）へ進撃し、英仏軍がエジプトを攻撃した「スエズ動乱」は、即ち「第二次中東戦争」である。

1967年6月に始まった「第三次中東戦争」は、アラブ側が仕掛けた攻撃も頓挫（トゾ）し、イスラエルの圧倒的な勝利となり、占領地を拡大して今日に問題を残している。

「第三次中東戦争」後、イスラエルは「エルサレム」を「統一された首都」と宣言し、ヨルダン領土であったエルサレムを併合した。これが今日まで尾を曳（ヒ）いている。

1973年10月、エジプト、シリアの両軍のイスラエル攻撃は緒戦（チセツ）に成功した。しかし米国からの龐大（ヨクダイ）な武器援助を受けたイスラエルは、次第に反撃に転じた。そして開戦から17日目に、国連安保理事会は停戦を決議して戦闘を中止せしめた。これが「第四次中東戦争」である。

イスラエルの建国に当たっては、国連の決議（パレスチナ分割統治案）はアメリカの主導で行われ、その後、毎年30億ドル以上の資金援助と大量の武器を供給した。勿論、第一次～第四次中東戦争のイスラエルの勝利も米国が勝利を導いたのであった。

◎パレスチナ問題を解決すべき責任者の第一はイギリスである。次いでアメリカだ。今日の世界平和のためには両国が解決の責任を負わなければ、一体誰が負うのかと主張したいのである。他に責任を転嫁（テカ）して自らを正義と叫んでいる米英こそ、私は非難の対象であると思っている。このことがアフガン問題にまで及んでいることに注目すべきである。

【ユダヤ民族とアメリカ】

【アメリカでは、ユダヤ・キリスト教会が国策に関して大きな影響力を持っている。著名な学者や評論家、政治献金する企業経営者にも、そうした宗教的信条を持っている人が少なくない。だから、共和党や民主党の区別なく、政界の多数派は親イスラエ尔的な立場を表明することが多い。そのために日本が今回のテロ事件に対する姿勢として、単に「アメリカを指示する」というのでは、アメリカの「親イスラエル政策」への追随と受け取られかねないと考える】

ユダヤ人は紀元後70年に国を失って以来、1948年のイスラエル再建までの1900年間、ユダヤ民族は迫害と追放の業火（ヨカ、黙滅（黙滅））の中を生き延びてきた。その苦難の中に、神と旧訳聖書を信仰したユダヤ民族の特徴とは何であろうか。（41頁～ユダヤ教参照）

要約すると、①旧訳聖書へのゆるぎない信仰。②民族が再び虐待されない世界（ユダヤ世界建設）。③ユダヤ民族こそ世界を統治すべく神に選ばれた民族だと確信。

ヨーロッパなどからアメリカに上陸してきたユダヤ人たちにとって、長い歴史の中でアメリカは、初めて味わうことのできた地上天国の体験であった。ヨーロッパでは特にカトリックを通じて常に迫害を体験させられてきたが、アメリカは殆どがプロテスタント派中心の国であったことである。プロテスタント派の人々は、ユダヤ民族に対して非常に心がオープンであった。

したがってアメリカに於いてはユダヤ人に対する迫害は殆ど起きていない。ユダヤ人にとっては、ようやく安堵の息をつくことのできる国を見つけたと言えるのであった。

そしてヨーロッパの中世時代から財務関係などに携(たず)わってきたユダヤ人の才能と知恵、それがやがて資本主義の発展と共に、大いに用いられることになったのである。

彼等は長い迫害の中で、「何といても自分を守るのは金だ」と言うことを知ったのであった。資本主義の発展の原動力は、金をいかに運用して行くか、それを如何に巧みに増殖させていくか、という知恵であった。

今世紀初頭前後にアメリカに流入したユダヤ人たちは、今や世界最大の大国アメリカの政治・経済・軍事を完全に支配下においている。だから日本の新総理大臣は江戸時代の参勤(さんきん)交代のように、ワシントン詣(ゆき)でをくり返しているのである。

又、この地球上に約60億の人間が住んでいるが、そのうち2000万人にも満たないユダヤ人の「ノーベル賞受賞者」は0、35%という数字が出ていると言う。如何に世界の知的エリートの中に占めるユダヤ人の割合が大きいかが解る。そしてユダヤ人受章者のほとんどが在イスラエルではなく、離散ユダヤ人、つまり世界に散っているユダヤ人たちである。

世界の頭脳の主導的な位置を占めているユダヤ人は、世界支配の構図を達成しつつあるようだ。世界最大の政治力、軍事力を持ったアメリカを完全に支配し、世界のエネルギーを支配し、世界の食糧を支配し、世界の情報を支配し、世界の金融を支配している。

世界各地の国家に同民族が分散して住んでいて連略を取り合い、情報を交換し、助け合い、商売に結びつくときには、もう国境というものが取り払われる結果になる。ユダヤ人は東洋における華僑(かぎょ)の状態の比ではなく、桁外(けいがい)れの強大な力となっている。

アメリカを頂点として全世界に張り巡らされたユダヤ民族の陰の組織は、強烈な力と完全な団結で世界中にその戦略を発動し、目に見えない世界ユダヤ国家を作っていることを痛感する。

「イスラエル」という国は、アメリカから膨大(約10)な資金援助を受け、さらに海外のユダヤ人から多額の献金を受けることで、強力な軍事力を維持している国家である。アラブとの対立を通じて、常に世界の動向を意識することに運命づけられている国である。

日本は単一民族国家のために多民族国家の顔がよく理解できない。アメリカの超巨大財閥・ロックフェラー家は世界最大の財閥であり、世界国内総生産の約一割を占めていると言うユダヤ人である。だからアメリカ大統領はイスラエルで決まるとまで言われている。この発想は全く日本人の頭の中にはないのである。

共和党も民主党も、ほとんどの政治家はユダヤ資本と癒着(いちゃく)し、選挙資金を仰いでいるのだから、ユダヤ人の操(アツ)り人形の恰好(かっこう)で、アメリカはユダヤ人の植民地という事態である。

旧訳聖書の中に「目には目を、歯には歯を」という教えがある。やられただけ、やり返すことが、絶対者である神に対する「善」である、とユダヤ人は思っているように見える。

日本人は儒教の思想から他人の失敗や非礼に対しては、心をおおらかにして出来るだけ許す、あるいは水に流すというのが当然である。しかし中世時代、キリスト教から迫害を受けたユダヤ人は、儒教思想などはないのである。

だから中東において絶対と絶対の衝突が、激しくくり返されているのではないだろうか。「われわれの世界支配が完成した時には、我らの一神教のほかに、どんな宗教も許されない」というのである。

回顧すると、戦後、日本を占領し支配したGHQ（占領軍司令部）の高級幹部たちのほとんどが、ユダヤ系アメリカ人によって占められていた。日本国憲法の実質的草案者のケーディスはユダヤ人であり、東京裁判の首席検事のキーナンもユダヤ人である。日独伊軍事同盟は国際ユダヤ勢力を敵に回して戦争をしたということで、間接的な虐殺者と烙印(ライン)を押したようである。

彼等の歴史を読むと、民族は経済力によって生き残って行くのではない。最も重要で必要なものは強力な精神力であると教えていた。

「パレスチナ」

「パレスチナ人」の名称は聖書に登場するペリラシテ人(β)の国を表す「フィリスティア」という語に由来している。ローマおよびビザンティン帝国の支配のもとで行政区画として「パレスチナ」が設定された。またアラブ支配下でもこれを受け継いで軍区が置かれたことがある。しかし歴史を通じてパレスチナは漠然と南部シリアを指す地方名に過ぎなかった。

パレスチナの地理的区画が明確に定められることになったのは、第一次世界大戦後のイギリス、フランスによる歴史的シリア分割に伴い、イギリスによるパレスチナ委任統治が成立したことによる。

イギリス政府は1921年3月、チャーチルの司会のもとにカイロ会議を開き、ヨルダン川を境としてパレスチナを二分し、東を「トランス・ヨルダン」、西を「パレスチナ」とすることを決定した。パレスチナの委任統治が発効したのは22年7月で、国際連盟は同年9月に承認した。（56頁の地図を参照のこと）

パレスチナの範囲はそれ自体、20世紀の政治的な争点となった。しかし、イギリスによるパレスチナ委任統治(1922~48)がこうして設定したパレスチナの地域的枠組みを前提として、パレスチナ人という存在や、さらにやがてパレスチナ民族主義が成立してきたのであった。

「パレスチナ分割決議」は、1947年の国連総会におけるパレスチナ問題に関する決議のことである。第二次世界大戦後、パレスチナにおけるアラブ、ユダヤの衝突の激化と、委任統治にともなう財政負担のため、イギリス政府は委任統治の放棄および国連への付託を決意した。この分割決議案は賛成33(米/英)、反対13(ソ/中)、棄権10(露/仏)で採択された。分割案によると、パレスチナ全人口の三分の一にすぎないユダヤ人が、土地の57%を与えられることになった。アラブ側は実力でこの決議の実施を阻(ハ)もうとし、第一次中東戦争が発生した。（57頁に第一の責任者はイギリスだと記したことは明確である）

「パレスチナ問題」は中東を支配、管理して、利用しようとした列強（第二次世界大戦まではイギリス、フランス、ことにイギリス。大戦後から1967年までは米、ソ。67年以後は主として米国）の政策が、からみ合って作り出された国際的・社会的紛争である。

悲しいかな、絶えずアラブ対ユダヤ人、さらにアラブ諸国対イスラエル、という対抗関係の枠組みによる割り切りが押しつけられたのであった。

「反ユダヤ主義」

反ユダヤ感情はパレスチナ人だけでなく、イスラム教全般に強い。その歴史は預言者ムハンマド(ﷺ)に溯(たど)る。生地メッカ(サウジアラビア)で迫害を受けた預言者は西暦622年、メッカ北方の町メディナに移住した。

メディナのアラブ人は預言者が説く新宗教に改宗した。しかしメディナの有力勢力だったユダヤ人は、ムハンマドを預言者と認めなかった。

預言者はユダヤ人と対立した。ユダヤ人が営む高利貸しは、イスラム教世界でもキリスト教世界でも激しく憎(にく)まれた。そして預言者はメディナ移住の二年後、ユダヤ人のメディナ追放に踏み切った。

後に中東の広範な地域を支配下に置いたイスラム帝国は、ユダヤ教徒に寛大さを示した。一方、キリスト教徒のユダヤ教徒の迫害は厳しかった。両教徒間には「イエスを十字架にかけて殺害したのは誰か」、という深刻な問題があった。イベリア半島(ヨーロッパの南端)のキリスト教徒は1492年、イスラム教徒を破って再征服すると、ユダヤ教徒10万人以上を追放した。その際、追放されたユダヤ人の多くを受け入れたのは、イスラム教のオスマントルコ帝国であった。(右図はエルサレム旧市街地の位置図)

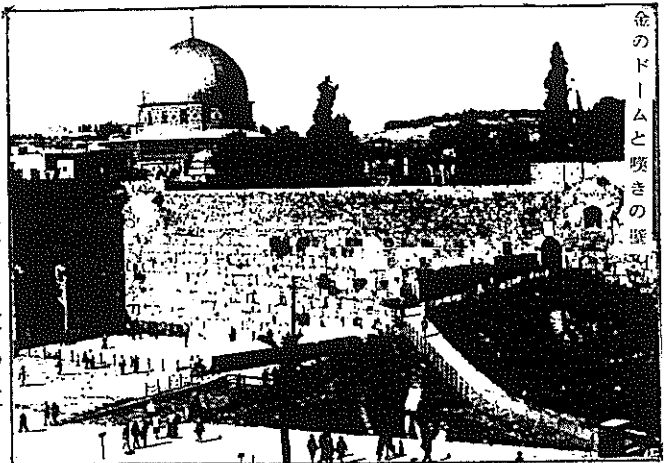
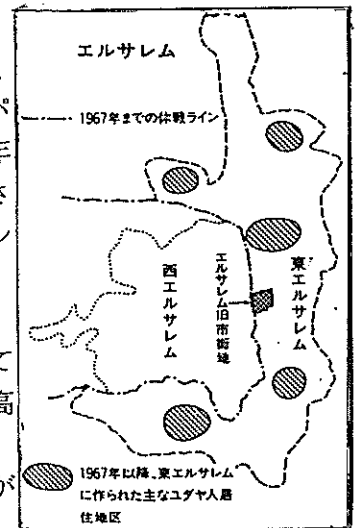
しかし20世紀に入ると、イスラム世界の反ユダヤ主義は強くなった。それはシオニズム運動の展開であった。この運動とはパレスチナにユダヤ人国家の建設を図ったことである。1948年ユダヤ民族の悲願が達成され、イスラエルが独立を宣言した。さらにイスラエルは1967年6月、第三次中東戦争で東エルサレムの旧市街地を占領し、併合を宣言した。(右図参照)

「エルサレム」はアラビア語で「至聖所」という意味であり、メッカ、メディナに次ぐイスラム教の第三の聖地である。そして真の聖域は東エルサレムの旧市街東部の一角、アラビア語で「高貴な聖域」と呼ぶ小さな丘である。

この丘の上に巨大な岩があり、それを囲んで「岩のドーム」が建っている。(屋根が金色のため金のドームと呼ぶ。下の写真)

イスラム教では預言者ムハンマドがある夜、メッカからエルサレムに奇跡の旅を行い、この岩の上から天に昇り、唯一神のアッラーに直面したとされている。

神殿の丘をイスラム教徒軍が十字軍から奪還したのは1187年である。以来、780年もの間、イスラム教徒の手にあったこの丘が、1967年の第三次中東戦争でユダヤ教徒の手に落ちたのだ。イスラム教徒の落胆と怒り



は激しかった。

1969年8月末、この丘でイスラム世界を激怒させる事件が再び起きた。岩のドームの脇に建つもう一つのモスク(イラム・ハラム)が放火に遭(7)った。その犯人は精神異常のオーストラリア人キリスト教原理主義者であった。しかしイスラム世界では、ユダヤ人が事件の背後にいるという陰謀説が有力であった。このようにして反ユダヤ主義が煽(7)られることになった。

「イスラム」とは、すべてを神に委ねることを意味するアラビア語で、アッラーのみを神として崇(7)め、ムハンマドを神の使徒と認める信仰・思想・行為のすべてを指している。

そしてイスラム教は、ユダヤ教やキリスト教と同じ神を信じているが、その先行宗教が神の命令を歪曲(7)りしてしまっただけの誤りを正す宗教だと、自己規定しているのである。

だから互いに仲が悪いのは当然のことかも知れない。イスラム教徒はユダヤ教とキリスト教を不完全な宗教として批判することから、争いが始まった。この批判を正しいと認めたユダヤ教徒やキリスト教徒は、イスラム教徒に改宗してしまったのである。

ユダヤ教こそ完全な宗教であり、キリスト教やイスラム教は邪教だと考える人々だけが、ユダヤ教徒として生き残ったことになる。だから邪教と仲良くせよと言うのが無理のようだ。

エルサレムは預言者ムハンマドが昇天した聖地だが、イスラム教徒はこの地を独占せず、ユダヤ教やキリスト教徒にも巡礼と居住の便宜を図ってきた。しかし状況が一変したのはユダヤ教徒のイスラエルの建国からであった。

紛争の原因を作った英米に、中東問題を解決する責任があると言わなければならない。

この項を書いている02、04、08現在では、イスラム教徒の対イスラエル自爆テロを志願する若者集団の裾野(スリ)は、性別を超えて広がり、女子大生自爆テロも珍しくない現状だ。それに加えて、イスラエル軍はキリストの生誕地「ベツレヘム」(イサヤハラム)までも戦車を繰り出した。キリスト教徒の集団までが反戦デモを敢行し、闘争は三巴(ミッド)の状況である。

イスラエルとパレスチナの情勢は日一日と悪化している。私は9、11アメリカ中枢同時自爆テロ事件と、アフガニスタン戦争、それに毎日続いているパレスチナの自爆テロ攻撃を重ね合わせながら、酸鼻(サビ)を極めた我が戦場体験を想起して、兵戈(ヘイカ)無用を訴えている。

「エルサレム」

「エルサレム」とはヘブライ(イスラエル)語で「平和の都」の意味である。しかし現実には反対の状況が連続しており戦いの場となっている。1967年の第三次中東戦争まで、東エルサレムとエルサレム旧市街地はヨルダン領だったが、戦勝したイスラエルは旧市街地も東エルサレムも占領して首都としている。(前頁の地図と次頁の地図を参照)

エルサレムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三大聖地のため、古代から紛争の絶えない土地であった。

次頁の地図が示す通り、エルサレム城壁の東側にあるオリーブ山には、20以上のキリスト教会が建っている。イエスが弟子たちを説教し、また自分が逮捕された記念すべき丘である。代表的な教会としては、イエスが昇天した時に残したと言う足跡のある「昇天教会」や、「苦悩の教会」などがある。

エルサレム城壁の西門である「ヤッホ門」を出て南へ行ったところが「シオン山」である。シオン山はダビデ王(イスラエル第10代の王)時代から呼称していたイスラエル民族の心の支えとなっていた丘である。シオニズム運動の発祥の由来も、その名の通りである。(右上の地図参照)

ユダヤ教徒にとっての聖地の第一は、「嘆(ガ)きの壁」である。旧市街地の南側の城壁の糞門(フンノ、穢れ難い門)を入ると、直ぐ北側にあるのが「嘆きの壁」である。(60頁の写真の城壁の壁)

ユダヤ人たちは幾代にもわたって神殿と共に、イスラエルの破壊の歴史をくり返してきた跡であった。

イスラエル第二代のダビデ王(前1010年〜前961年)が最初に神殿を造り、第三代のソロモン王(前961年〜前923年)が大改築をした第二神殿をローマが破壊してしまった。その残骸の一部が嘆きの壁である。

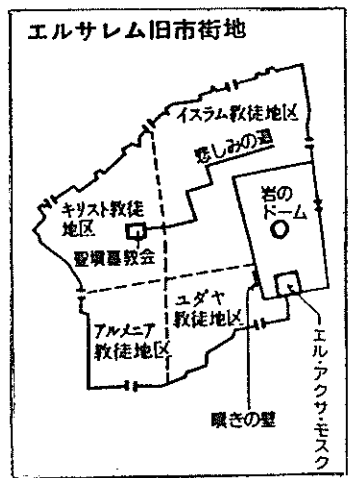
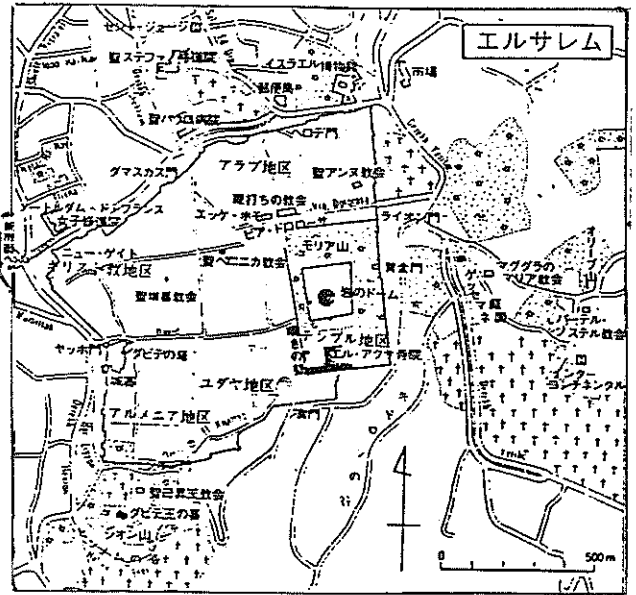
イスラム教徒にとっての聖地は「岩のドーム」(右図参照)で旧市街地内の最高峰の「モリヤ山頂」に建っている。イスラム教の預言者ムハンマドが昇天した場所と言われている。正式名称はオマル・モスクである。ムハンマド十字軍が征服していた当時はここを教会として使用していたが、1187年にイスラムが征服すると、再びイスラム・モスクとなった。

キリスト教徒にとっての聖地は、旧市街北部の「悲しみの道」や「聖墳墓教会」(右の両図参照)である。イエスが十字架を背負って歩かされたと言う細い道が「悲しみの道」で、その道の最後が「聖墳墓教会」となっている。ローマ軍の兵士がイエスの着物を脱がせ、十字架にかけて息を引き取らせた地に建っている。

この一帯がローマ人が刑場としていた「ゴルゴタの丘」である。

上記したユダヤ、キリスト、イスラムの各聖地は、昭和60年3月(1985)に私は自分の足で歩いた。オリブ山の樹齢800年のオリブの木の下に立ち、エルサレムの古城を眺めた感想は古代中国を思わせていた。「嘆きの壁」から城壁を登って「岩のドーム」に入り、ムハンマドが昇天したという岩を見た。続いてイエスが十字架を背負って歩いた「悲しみの道」も歩き、殺された「聖墳墓教会」も見学した。そして「シオン山」にも登った。

当時のエルサレムは紛争は絶えなかった。一体、宗教は何のために存在するのか、と疑問を抱いた最初が、このエルサレムであった。宗教があるから戦争が起こると考え始めたのである。



「イスラエル各地」(現在のパレスチナ自治区を含む)(下図参照)

「テルアビブ」

イスラエル第2の都市、空の玄関、地中海に面している。日本人にとっては忘れられない空港である。昭和47年(1972)5月、日本赤軍の岡本公三、奥平剛士、安田安之らがテルアビブ空港で自動小銃を乱射し、手榴弾を投げ、何の罪もない人々を無差別に襲撃し、約100名の死傷者を出した。空港の時計は、その時間を記念して針は今もなお、その時刻を示して止まっていた。彼等日本赤軍はパレスチナ開放戦線に組しアラブの大義に生きようとしたのである。

9、11同時多発テロ事件のイスラム原理主義者のテロ攻撃の源流は、このテルアビブ空港乱射事件と言われている。

「地中海沿岸部」

シャロン街道と呼ばれる地中海沿岸には、カイザリヤ、ハイファ、アッコなどの都市があり、イスラエルでは珍しく緑の多い地方で、土地は肥沃である。海岸の各都市には古い歴史の跡を留め、アラブ征服時代から十字軍の占領時代と変遷した遺跡の宝庫であった。

02・04・08の現況は、レバノンを拠点とするイスラム教シーア派民兵組織の「ヒズボラ」が、パレスチナ自治軍を支援するように、イスラエル軍と戦闘を始めている。

「ナザレ」(イスラエル、ガリラヤ湖北側)

新約聖書では、大天使・ガブリエルが処女の「マリア」に、「イエスの受胎」を告げたという地で、「受胎告知教会」が建っていた。我々の門外漢には信じられない話である。キリストが長年に渡って居住していた土地でもある。

「ガリラヤ湖」(イスラエル)

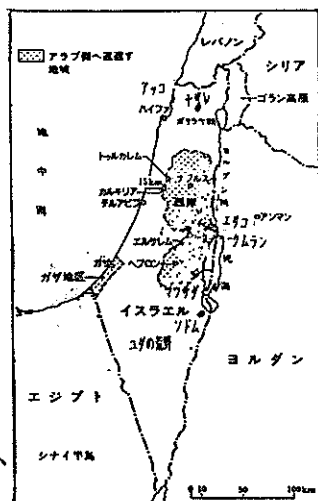
ヨルダン川の上流の湖でイスラエルの重要な水源池である。湖上は遊覧船が廻り、湖畔にはイエスが伝導したという主要な舞台の「山上の垂訓教会」や、「パンと魚の増加の教会」などがある。湖で採れた「スズメダイ」の味は忘れられない美味しさであった。

「ヨルダン川西岸」

新聞紙上によく報道される川の名で、ヨルダンとの国境線となっている。川幅は約20mほどの小さな河川である。川を中心にして両岸は大渓谷をつくり、地球の割れ目とも称されており、その亀裂(ヒツ)はアフリカ大陸南部まで続いている。

私が訪れた時はイスラエルが占領していたが、現在はパレスチナ暫定自治区となっている。しかしイスラエルの入植地となっている所もあり、紛争の絶え間がない。

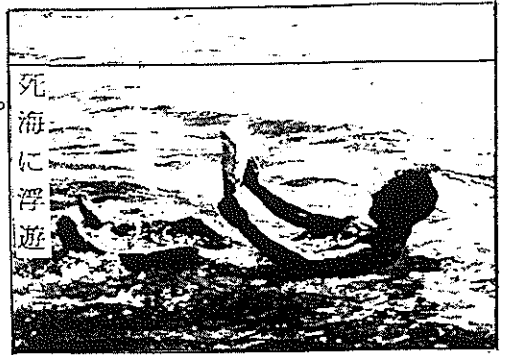
世界最古(約一万年)の町・「エリコ」や、2000年前に初期のキリスト教徒が居住していた「クムラン」がある。その近くの洞窟では貴重な手書きの文書(経典)が見つかった。また約1000人のユダヤ人がローマ攻撃軍に抵抗して玉砕したという「マツサダ要塞」などがあり、私も要塞の山を登って思い出は深いものがある。この地方の歴史の研究に重要な場所が各所に見受けられた。



「死海」

死海南端の西側の町が「ソドム」である。当時のイスラエルの旅行は、現在のような激しい宗教戦争の状態ではなかったから、のんびりした気分で「ソドム」で一泊し、死海の水面に浮かんで楽しんだ。これは小学生以来の夢が実現したように思う。

死海はヨルダン川が流入して湖となっている、ヨルダンとイスラエルとの国境にある塩湖である。湖面は海面下392㍎で世界で最も低く、排出する河川が存在しない上に、高温のために水分が上昇し、従って塩分の濃度が約30%と濃いのである。一般の海水は約2~3%。(右は湖面で新聞を読む私)



濃い塩分のために鳥も魚も住むことが出来ない死の海の周辺一帯は、塩分で白くなった死の山野である。湖水の比重が高いために人体は浮くが、湖水が目に入ると非常に激痛を感じた。

「ユダの荒野」

イスラエルの国土の半分以上は農耕ができない不毛の砂漠である。特にエルサレムから南がネゲブ砂漠で、シナイ半島の砂漠に続いている。私が訪れたときは、イスラエル政府は砂漠開発事業として水道管を敷設し、砂漠の緑化に努めていた。世界のユダヤ財団をバックにしている資金力は膨大であり、現在では想像も出来ないような発展を遂げていることだろう。水源は前記したように、イスラエル北方の「ガリラヤ湖」である。(前頁地図参照)

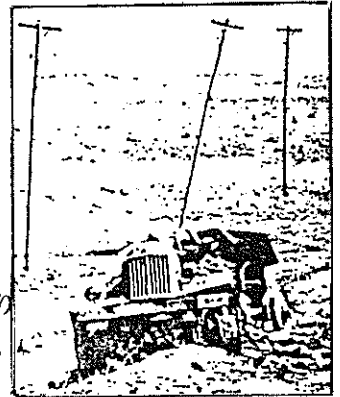
「テロ事件に遭遇(ウケガ)」

死海で子供のように戯(ウケ)れてから、ユダの荒野を通過してエルサレムに帰る途中、街道を運行中のバスが襲撃されるというテロ事件に遭遇した。今となっては貴重な体験であった。

街道が閉鎖となったため、安全な別の街道を通過することになった。已むなく迂回(ウケ)して北上して走行すると、道路の肩にイスラエルの装甲車が破壊された残骸や、アラブ軍の自動車の無残な残骸が放置されていた。

この第一次~第四次中東戦争の凄(ウケ)まじい戦禍を目(マ)の当りにして、果てしない宗教戦争の将来を慮(ウケ)ったのであった。

(右上の写真は記念品として残したイスラエルの装甲車の残骸)



「エルサレム」

エルサレムの新市街に入ると数多くの警察官が取り囲んでいる光景が目(マ)に写ってきた。又、物騒(ウケ)なテロ事件かと心配していると、事件ではなかった。イスラエルではバス停や映画館、病院の待合室、普通の家の玄関先など、ありとあらゆる所で所有者の不明な袋や箱などが見つかり、すぐに爆発物処理班が出動するのであった。自己防衛思想が徹底していた。

しかし身を犠牲にした自爆テロは対策がない。イスラエルの三宗教は、自分の信じる宗教は絶対的に無誤謬(ムヒョウ)であると確信し、聖典の批判などは考えられないことのようなのである。異民族支配の恐怖を知らない日本の社会は宗教的な神秘性を知らず、有難い国かも知れない。

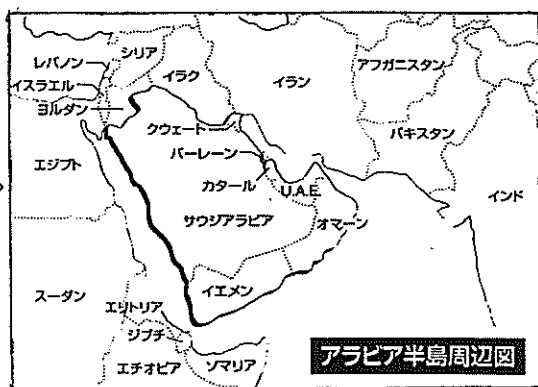
「アラビヤ半島」 (平成6年2月、1994年)

三年前のことであったが、日本国中がテレビゲームを見ていたような「湾岸戦争」を想起しながら、アラビヤ半島に向かって15日間の旅をした。湾岸戦争後、アラビヤ半島諸国が観光客の入国を承認したのは2ヶ月前のことであり、我々の一行12名が初回の入国者であった。

「アラビヤ」とは「砂漠の国」という意味であり、「アラブ」とは「砂漠の人」のことである。渺渺(ビョビョウ)とした砂漠が広がるアラビヤ半島はアラブ人の故郷である。絢爛(ケンラン)たるメソポタミア文化や、後日にサラセン文化が花を咲かせたが、現在はシルクロードに替わってオイルロードとなっていた。

我々が子供のころに耳にしていた、「砂漠に日が落ちて夜となるころ・・・」の歌詞を懐かしく思い出しながら旅を続けた。気候風土も異なり背負ってきた歴史も違い、人の気質も特徴のあるアラビヤは目新しいものばかりであった。

第二次世界大戦後は世界の隅々まで、石油なしでは暮らしていけなくなってしまった。しかし、アラブの諸々の悲劇の原因は、欧米列強による石油の取り合い合戦に始まったと言ってもよいだろう。列強が石油を求めて進出してくる



まで、石油は「使い道のない黒い水」だったのだと思いながら、先ず「クウェート」に入り、「バーレーン」「カタール」「オマーン」「アラブ首長国連邦」の5ヶ国を回った。

詳しい記事は、「湾岸戦争の傷跡を残すアラビヤ半島5ヶ国の旅」の紀行文に記載済みだから、紀行文にないことのみを記述する。(サウジアラビアは観光客の入国は禁止中)

「クウェート」

パキスタンのカラチに一泊し、アラビヤ半島の最初の訪問国はクウェートであった。空港に降り立って先ず驚いたことは、でかでかと国王の写真が掲げられていたことであった。国旗の掲揚は勿論である。国旗の掲揚は新興国家の特徴で、国家の団結を国民に呼びかけ、多民族国家は何処も同じであった。

イスラム社会の政治教義とするのは、「神の主権」、即ち主権は人民ではなく、神だけにあるという理念である。そのために偶像禁止であった筈だが、アラビヤ半島の国々は全てが国王の写真を空港に掲げていた。不思議に思えてならなかったのである。

アラビヤ砂漠の遊牧民としてイギリス等の保護国であった半島諸国は、第二次世界対戦後、石油の産出によって俄(ニワ)か成金国になった。その首長(シュウチョウ)が国王となった首長国では、表面上は立憲君主制となっているが、実際は独裁制の匂いが芬芬(フンブン)としていた。

イスラム世界における政治指導者(国家元首)は、アラビヤ半島の世襲のような国々か、パキスタンのようにクーデタによって政権を奪取した軍人かであり、議会で選出された指導者は少数派のようである。

「クウェート」とは「小窓」「のぞき穴」という意味で、アラビア半島の小窓のような小さな国である。戦後の1961年にイギリスの保護国を解消して独立し、小国ながら石油成金でGNPは世界最高水準に達した第一級の福祉国家である。しかし国というよりも私有地の国家の感じが強い。細部は紀行文を参照。(位置図は前頁参照)

空港に降りて次に驚いたことは、ホテルの大歓迎団が我々を出迎えていたことである。随分と多くの国を訪れた私も初めての体験であった。又、ホテルに到着すると、機内食を済ませたことは承知していながら、フルコースのイタリア料理で振る舞う大歓待であった。

「客人は神が遣はした人である、よく知らずの人でも歓待せよ」というのがコーランの精神である。遊牧民が一躍して豊かさを享受したからではなかった。

この微笑(ホエ)ましい習慣は、恐らく苛酷(カク)な風土や状況に生きてきた人たちの昔ながらの知恵であろう。喉(ノド)が渴(カ)き空腹を抱えた遊牧民がテントを訪れてきても、彼等はめったに期待を裏切らなかつた。ホテルは砂漠の民の偉大な習慣を忘れず、今も生きていた。

「コーラン」は不磨の大典

「コーラン」はアラビア語で書かれたイスラム教の根本聖典で、ムハンマド(英語読みではマホメット)を通じて伝えられた「神の言葉」である。しかし、コーランも他の宗教と同様に、読む人しだいで解釈の幅が多いように思われる。

(日本でいえば、聖徳太子の時代に現在のサウジアラビアで起こった宗教がイスラム教である)

コーランは神が折々に様々なテーマについて語ったものを一切、手を加えず記録したもので、一貫した筋書きや明確な条文のようにはなっていない。即ち、「神がアラビア語で語った言葉を一字一句、誤りなく記録したもの」とされている。

全体が114章から構成されている中で、最も大事なものが第一章の「開扉の章」である。ここにコーランの真髄(シズイ)が集約されており、お祈りする時などに必ず朗誦(ロウショウ)される。僅か7節だが、コーラン全体の思想が凝縮(キョウシュク)されておのり、次に記載しておく。

「慈悲ふかく慈悲あまねきアッラーの御名において……」

①讃(タカ)えあれ、アッラー、万世の神。②慈悲ふかく慈悲あふれる御神。③審(サ)きの日の主宰者。④汝こそ我らはあがめまつる、汝こそ救いを求める。⑤願わくば我らを導いて正しき道を辿(タ)らし給う。⑥汝の怒りを蒙(カモ)人々や、踏みまよう人々の道ではなく、⑦汝の嘉(ヨシ)し給う人々の道を歩ましめ給う。

コーランの最大の題目は神であり、何よりも強調していることは、神はアッラーしか存在しないという一神教の原理である。

コーランは大きく三つに分けることができる。第一は「信条」である。つまり唯一の神であるアッラーを信じる術を説いている。第二は「礼儀」である。人々は神に対して何を実践すべきか。第三は「倫理」である。人と人との間で何を実践するのかという規範(カソウ)である。上の三点が満遍(マンペン)なく全体に説かれている。

「信条」とは何を信じるのかというと一般にそれを「六信」と言っている。「神」「天使」「啓典」「預言者」「末世」「予定」の六つである。(詳細は割愛する)

コーランには、神は何であるか、つまり神は天地を創造し、人間を創造し、その後人間の歴史が始まり、それに対して人間は何をやり、神はどうしてきたのか、とすることが書いてある。

これは旧訳聖書に書いてあることとほぼ同じで、神の前で人間は正しい行いをしなさい、この世の終わりに来たときに死者もみんな蘇(ヨミ)り、一人ひとりが裁(サ)きを受け、信仰して良いことをした人は天国に、悪いことをした人は地獄に行くという考え方は、キリスト教とよく似ている。

イスラム教がキリスト教と違う点は、イスラム教の場合はイエスを預言者としては認めているが、あくまでも預言者であり、人間であって神の子としては認めない点である。

前記した「六信」は基本的な信仰を示すものであるのに対し、基本的な実践を示すものとしては「五行」がある。「五行」の行為はイスラム国家へ行けばよく見受けられる。

「五行」とは「信仰告白」(神は唯一にしてムハンマドは神の預言者であると告白すること)「礼拝」、「喜捨」(貧しい人に分け与える。神が与えてくれた富をみんなで分かち合おうということ)、「断食」、「巡礼」の五つである。「断食」(ラマダン)は、心が寄り合って神を思う心が増してくるというのである。

以上、コーランに就いて若干書いてみたが、戦前の我々日本人が子供のころから培(ツカ)われ、軍人になって死を決して戦った「現人神」(アヒトガミ)教育と、よく似ている気がする。

「湾岸戦争とイスラム原理勢力」

1990年8月2日、イラク軍は隣国のクウェートに侵攻した。この湾岸戦争が発生するとアメリカのブッシュ(現大統領の父)政権は、クウェートの隣国・サウジアラビアの了解を得て、サウジ東部に大規模な米軍を展開させた。同時に反イラクの連合軍「多国籍軍」を構成し、クウェートからイラク軍を駆逐(クハ)した。一方、アラブ諸国は同胞のイスラム教国を侵略したイラクのフセイン政権を非難した。

フセイン政権は世俗主義を掲げるバアス党(アラブ社会主義)政権で、アラブ・イスラムの同情の対象にはならない。しかし当時のイスラム諸国の原理主義運動は多国籍軍に反発した。

多国籍軍の中核である米軍はキリスト、ユダヤ両教徒を兵士とする異教徒軍であった。アラブ原理主義運動はとりわけ、多国籍軍に参加したエジプトを始めアラブ諸国に激しく反発した。

イスラエルと単独講和を結び、米軍に協力してサウジアラビアに軍を派遣したムバラク・エジプト大統領を、サウジのファハド国王とともに「アラブの裏切り者」と非難したイランのフセインは、自分こそ異教徒の侵略から守る英雄だと、大衆に訴えたかったのであろうか。

アラブ原理主義勢力にとっては、初めから味方はイスラム教徒のイラク国民であり、敵は異教徒のキリスト教中心の多国籍軍で、原理主義勢力は多国籍軍を「新十字軍」とも呼んでいた。多国籍軍のイラク空爆を原理主義勢力は強く非難した。それはフセイン政権に同情したのではなかった。空爆に泣き叫ぶイラク国民が同胞のアラブ人であり、イスラム教徒だからであった。イラク軍のイスラム教徒の兵士数万人が砂漠の中で空爆を浴び、死んでいったのを見て、多国籍軍に参加したアラブ諸国に対する原理主義運動の怒りは沸点に達した。(右の写真は、クウェート海岸の岸壁に係留された豪華米客船の焼けた残骸とともに、捕獲されて展示されていたイラク軍の戦車群約200輦の一部)



「イスラム教徒の生活慣習」

コーランにはさまざまなことが書かれている。殺人・傷害・姦通・窃盗・強盗・飲酒・賭博・利子などの禁止、食べてはいけない食物の規定（豚肉禁止）、女性の身だしなみ、両親や孤児への思いやり、偶像崇拜禁止などである。中でも特異なのは法規定で、相続や結婚・離婚の方式が定められているだけでなく、「姦通者」には百回の鞭打ち刑とか、「窃盗」には両手の切断刑とかいった類の刑罰まで定められている。

中国では西疆(ウイグル)ウイグル自治区が回教(中国のイスラム教のこと)であり、戒律の厳しさに驚いた(1985年に訪れた)。私が中国戦線で戦った古戦場の開封(宋の都)でも、イスラム教徒のための豚肉禁止の食堂があった。これを中国では「清真食堂」と言う。

女性の服装になると、イスラム法の解釈により地域差は非常に大きい。アラビア半島は戒律が厳しく、原理主義国家では女性に対し、全身を覆(材)う黒いベールを着用させ、自動車の運転までも禁止である。クウェートに入国してびっくりしたのは女性の「ブルカ姿」であった。今まで訪れたイスラム諸国の中では最も極端で、両目だけしか出していないのであった。

ブルカとは、目のところだけを開(7)けて、頭からすっぽりと全身をおおうマントのことで、イスラム教徒の婦人が外出の時に着用するもの



(右上写真はクウェートのブルカ姿の婦人が魚市場で買い物をしている時を隠れて撮影) コーランには「胸と陰部を隠せ」という指示があるものの、あとは「外部に出ている部分は仕方がないが、その外の美しいところは人に見せぬよう」としか、書かれていない。

アラビア半島諸国や後日に訪れたイラン、今回の戦争で見たアフガニスタンなどは、上記した「美しいところろ」を全身と考えるため、女性は全身を黒い布などで覆うことになった。しかしエジプトやトルコなどでは、日本の女性の姿と変わらない服装であった。

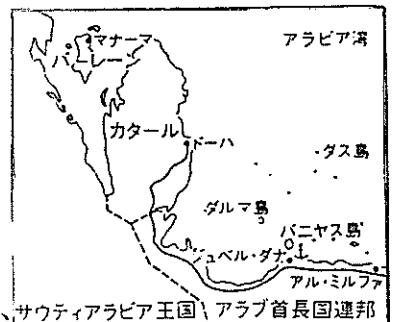
「バーレン」(25頁の地図と下図参照)

バーレンは33の島からなる島嶼国家で、日本の対馬よりも小さい国である。1968年、イギリスの湾岸からの撤退公表後、1971年に独立した。人口は約50万である。

「バーレン」とは「水のある海」という意味である。この貴重な水がメソポタミア文明(現イラン付近)とインダス文明(現パキスタン・インド)とを結ぶ海洋の道となり、海のシルクロードの要地となっていた。(詳細は紀行文参照)

文明開化の道に踏み込んでから未だ日は浅いにかかわらず、湾岸諸国は驚くほどの発展を遂げ、前時代と現代が同居しているような感じであった。

印象に残るのは東京湾のアクアラインのように、バーレンとサウジアラビアを結ぶ渡橋(道路)が建設されていたことだ。人工の島を造って国境を形成して景観は抜群であった。



「ラマダン」(断食の月)

イスラム暦は前記した通り、預言者ムハンマド(アラビア語読み)がメッカからメディナに移住した年、西暦622年をイスラム元年とする太陰暦である。1日は日没から始まり、1ヶ月は新月から次の新月までの29日12時間44分2、78秒である。

したがって1年は354日となり、太陽暦に比較して11日間短く、約33年のサイクルで太陽暦に符合する。そのためラマダンは夏の時もあれば冬の時もある。

前記したようにコーランの掟(科)にある「五行」の一つにラマダンがあり、イスラム教徒にとっては遵守すべき大事な行事である。この断食制度はイスラムのみならずユダヤ教にも存在し、私はイスラエルで体験している。

ラマダンはイスラム暦の9月の1ヶ月間と定められている。この期間中は信者は日の出から日没までの間、一切の飲食や喫煙のみならず、日中の性行為も許されない。しかし子供、病人、身体虚弱者、妊婦、乳児のある母親、戦場の兵士は例外である。

ラマダンは国家的、社会的な行事のため、王も庶民も貧富の別はなく、イスラム教徒は凡て義務として守らなければならない。禁制を犯せば外国人であっても投獄され、刑罰の処分を受けるのである。

ラマダンは宗教感情を高める効果があり、他の宗教でも修行苦行の一つとして広く行われている。しかし一般の信者までも義務として課しているのはイスラム教の特色である。

何れにしてもラマダン期間中は公に社会全体がこれに参加するため、社会的な統一行動の中のイスラムの連帯性が強化され、アラブの伝統的な個人意識に対し、ラマダンは紐帯(チウタイ)の役割を果たしていると言える。

実際の生活では夜と昼とが入れ代わったようになる。日中の市内の飲食店は閉店し、一般の店舗や事務所は開店が遅くなり、正午過ぎには閉店する。そのために市内の人出は少なく、ひっそりとして生色を失い、人の活動も目に見えて鈍化する。

日没とともに終了の合図(砲声など)が伝わると市街は活気を取り戻し、再び賑やかになって商店は午後11時過ぎまで開店している。庶民は夕食後は知人や親戚を訪れるなど、夜の社会は花が咲いたようになり、各家庭では普段よりも多い御馳走を作ると言われている。

イスラムでは祭りとして二つの大祭がある。それは「断食明けの祭」と「巡礼月の10月に始まる犠牲祭」である。前者は3日間、後者は4日間つづけられる。特に断食明けの祭は長い断食苦行の後だけに派手な祝いが行われ、アラブの正月だと言われている。私はこのアラビア半島の旅とパキスタンの旅との2回も経験したが、外国人には不便極まりない思いであった。

ラマダンが終わりに近づくと、各家庭では祭の御馳走の用意のために幾匹もの太った羊を買い込み、女性たちは祭の晴れ着の新調に取りかかる。一方、主人は妻子や使用人に対するプレゼントの準備に忙しく、クリスマスに似た雰囲気らしい。

ラマダン明けの朝方に合図(3発の砲声など)の音が響くと、先ずモスクで礼拝してから祝が始まり、家長は参賀のために王宮に向かう。王は大広間で一般庶民の参賀を一人一人から丁寧に受け、その後、親類縁者や友人知人を訪問し合って挨拶を交わすのである。

以上はイスラムとラマダンの概要を簡単に書いたが、これ以降は訪問した全国各地で気づいたイスラムの特徴を記述していく。

「カタール」 (25頁、68頁地図参照)

サウジアラビアからアラビア湾に突出した半島で、長さ約160km、最大幅は約85kmの平坦な砂漠の国で、人口は約50万人の国である。

アラブの女性は人前で素顔をさらすことは許されないから、湾岸諸国の旅客機のスチュワーデスは全員外国人であったことに気が付いた。そしてラマダン期間中の機内食もイスラム教徒は食べられないため、日没後に食べられるように携行食になっていて、彼等は貰った携帯食の弁当を抱えて飛行機から降りていった。私にとっては初めて見る光景である。

イスラムでは禁酒であるから空港での検査は嚴重を極め、携帯用のポットの中のジュースまでも飲んで調べ、アルコールの持ち込みを水際で防止していた。

これまで訪れたアラビア半島諸国で気付いた点は、石油成金のために作った近代的な美しい空港や王宮、ホテル、街並、豪華モスクのほか、全員の男性が同じ民族衣装を着用し、突然に始まる礼拝の姿の厳粛さであった。それ以外は延々と広がる砂漠の殺風景だけである。

無限に拡がり続く無味乾燥で酷(く)い感じの砂漠の中に寂然(ジャケン)として立って見ると、彼らの心の中に「神が絶対だ」という宗教が自然に誕生してくる。その実感が肌に伝わってきたような感じを受けてきた。そして人は凡て平等で特権階級は認められないことも、砂漠の教えだと感じていた。しかし矛盾がないわけではない。一介の遊牧の長に過ぎなかった一族たちの豪華な生活と王宮や住居は、神の前で平等ではなかった。宗教は全く解らないことばかりだ。

アラブの男性はなぜ「髭」(ヒゲ)や「鬚」(ヒゲ)、(鬚) (ヒゲ)を生やしているのだろうか。それは多分、ムハンマドの影響ではないだろうか。彼は布教のために戦争ばかりしていたから、恐らく面貌(メンポ)で敵を畏怖(イ)させる狙(ネ)いがあったのかも知れない。そう言えば、日本軍の兵士たちも戦闘間は髭は伸ばし放題だった事が思い出される。無精髭の類いか？

「オマーン」 (25頁と下図参照)

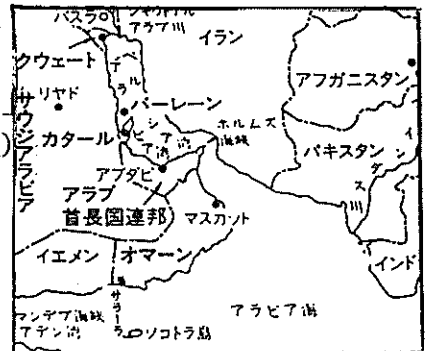
アラビア半島南東部にある絶対君主制の政治体制の国家で1741年に独立、人口は約230万で面積は日本の約四分之三である。この国での訪問は南部の中心「サララ」と首都の「マスカット」であった。(詳細は紀行文を参照)

「サララ」で特記することは、ユダヤのソロモン王と恋をした「シバの女王」の物語であり、その「シバ王国」は今のイエメンとオマーンのサララ一帯のことである。

アラビア半島の南側一帯を前10世紀から1000年間も支配したシバ王国は、西は紅海、南はアラビア海に面し、海のシルクロードとして栄えた。特にシバ王国を繁栄させた香料の「乳香」であった。

(右は乳香の木)

乳香の樹木から採れる「乳香」は乳白色に輝く香料で、金以上の価値のある最高の高級品として古代の経済を動かした。シバ王国はその交易を独占して莫大な利益を獲得したのであった。ソロモン王とシバの女王の恋物語は旧訳聖書の一節に書いてある。



サララから航空機で首都の「マスカット」を訪れると、地形は一変して険しいハジャル山地がオマーン湾の海岸線に沿って走っていた。市街にはかつてペルシャ（現イラン）の支配時代のものが遺り、活気のある街であった。

絢爛豪華な(ケランゴカ)な王宮が第一印象である。撮影も禁止され、官庁に勤める職員は民俗衣装の制服が義務づけられていた。国王の独裁政治はアラビアの通例で権力が国王に集中し、王宮警備の物々しさは世界第一ではないだろうか。(右は王宮正面ゲートの王冠と佩刀のマーク)

王宮を囲む鉄柵にまで王冠とジャンビーア（佩刀）を形どったマークを飾り付け、諸外国には見られない嚴重さであった。

「ジャンビーア」(半月刀) (右の写真はジャンビーア)

イエメンの男たちは裾(ズ)の広いワンピース服にベルトを締め、体の正面にジャンビーアをさして街を歩いている。男たちがジャンビーアを身に付けているのは、それが一人前の戦士であり、血筋正しい部族民であることの象徴だからである。部族間の抗争の時などに勇気をもって戦えない者は、ジャンビーアをさす資格がなかった。

だから女、子供、低い階層の人々はジャンビーアをさすことは認められない。即ちジャンビーアをさしていることは一人前の権利と勇気を持つ部族民男性の誇りであった。

「数珠」(ジュズ)

仏教徒と同じように何の国でもイスラム教徒の男性は、必ずといってよいほど手にしているのは「数珠」であった。33個または99個の玉をつないだ数珠は、神を讃(ツカ)える99の美名(まことの守護者の意味)にちなんだもので、小声を唱えたりして玉を操(アツ)るのである。

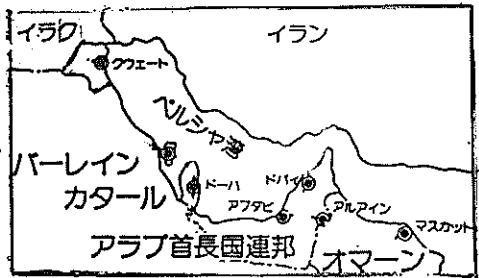
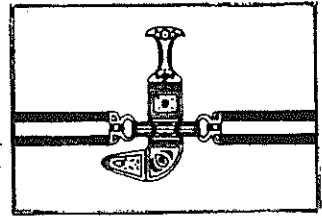
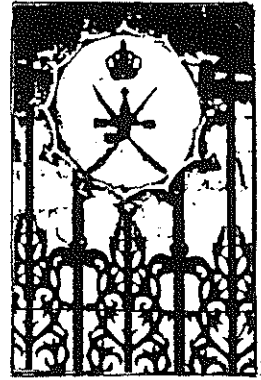
「アラブ首長国連邦」(U.A.E)

1971年、7つの首長の国が集まって一つの国を形成して独立した国である。当初は周囲から、纏(マ)まりのない国になるのではないかと言う声も聞かれた。単独では到底(トクイ)独立できない首長国が、アブダビやドバイとともに連邦に加盟したのは正解であった。

発展に次ぐ発展を遂げたこの連邦国家は、アラビア第一の近代化した国である。各首長国の首都は世界の有数な大都市にも劣らない近代都市を形成し、一方には美しい海岸線と豊かな風紋(ワケン)の波が広がる砂漠が展開していた。大都会と田舎が隣接していて、その対象は理想的であった。

「モスクの起源」は、メディーナにあった預言者ムハンマドの住居にあったと言われている。それは中庭と、その2面に建てられた干乾レンガ造りの建物からなっていた。だから大きな集団を収容できる中庭や、ホールを持つことが、モスクに要求される第一条件であるという。

モスクはイスラム教徒の礼拝の場で、神を祀る所ではない。だからモスクの内部には祭壇のようなものは全くない。唯、必ず聖地メッカの方向を示すアーチ状の凹みだけがある。



「イスラムの天国観と殉教精神」

イスラムでは「聖戦」(ジハード)と「殉教」とは、結びつけて語られている。それが特に目立ってきたのは1967年の第三次中東戦争に於いて、アラブ諸国が大敗してからだと考えられる。

もともとイスラム教は、ユダヤ教、キリスト教の誤りを正す宗教だと自負しており、神はイスラム教徒にこそ栄光をもたらすものと信じられてきた。それが破れたのは、自分たちがイスラム法を捨てたから、神の天罰が下ったのだと考えたのであった。

「ジハード」(聖戦)とは、もともとは「努力」の意味である。又、「異教徒との戦い」と言う意味にも用いられるようになった。

「聖戦」とは、凡ての成人男子ムスリム(イスラム教徒)の義務である。武装した異教徒がイスラムの支配地域に入ってきた場合、凡ての成人の男子は、生命や財産、言論などを捧げて抵抗しなければならない掟(村)になっている。

この理論によって、長らくイスラムが支配していたパレスチナの地に建国したイスラエルは、疑う余地のない侵略者である。したがって、これに対する武装闘争を支持しないムスリムは、存在しないというのである。

アフガニスタンに侵攻した旧ソ連軍や、湾岸戦争後もサウジアラビアに駐留を続ける米軍に対し、イスラム勢力が行ってきたテロ攻撃などは、ジハードと言えるだろう。米軍はサウジ政府の依頼で駐留していると言っているが、武装した異教徒であるためジハードの対象になる。

戦場はイスラムの土地、つまり歴史的なイスラムの世界に限られており、対象も武装した異教徒に限定されている。無差別テロは許されていない。

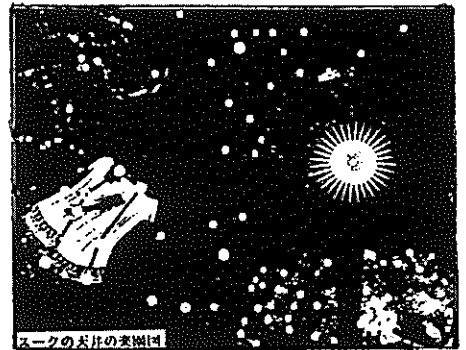
神(アッラー)はジハード(聖戦)を命じた時、人間は見知らぬ世界のために命を縮めることが難しいことを知っていた。

そこで神は、ムスリムに天国行きを約束することによって、この道(聖戦)を望ましいものにした。天国では、殉教者は最も美味しい食べ物や、最も甘美な果物、そして肉の中でも最も柔らかい部分を取ることができる。天国は楼閣、流れる川、草木の繁った野原からできている世界である。又、殉教者は神の右手に座り、72人のフル(処女妻)が付き添って歓待の限りを尽くすという。そして「この生活への最短の道が聖戦である」としているのである。

イスラム教の伝承によると、信者は死後、楽園に入るとすぐに処女妻らに迎えられるが、それは地上の女のように両親から生まれた者ではなく、この目的のために特別に新しく創った女である。これがイスラムの「官能的な天国観」である。(砂漠で生活する者の夢であろうか?)

右の写真はアラビア半島各地のスーク(市場)の天井に描かれている天国の楽園図である。アラブの人たちが憧れている「楽園」の図柄は、月を中心にした南十字星、北斗七星、亀座、乙女座など、数え切れない星座である。イスラムにとっては体の熱い血が躍動するのではないだろうか。(右は天国の楽園図)

人間が死んだ後は、最後の審判の日まで仮の眠りに就いているに過ぎず、この世の生き方こそが、最後の審判に備えることが出来るのだ、と説いている。



「ビンラディン氏の行動」(一部は15頁の記事と重複)

9、11貿易センタービル同時多発テロ事件の首謀者は、サウジアラビア出身のビンラディンだとアメリカは称しているが、事件以来の調査では彼が首謀者である証拠は示されていない。

彼は1957年頃、イエメンの土木建築業者の大富豪モハメド・ビンラディンの57人の子供の17番目として生まれた。母はサウジアラビア人である。

彼が22才になった1979年の暮れ、突如としてソ連軍がアフガニスタンに侵攻した。イスラム原理主義者にとっては、この侵略は到底容認できるものではなく、世界の各地から義勇兵がアフガンに集結した。彼はもちろん私財を投じて聖戦に参加した。

89年4月、パキスタン軍統合情報部が、サウジ情報局にサウジ王室からの志願兵参加を呼びかけた時、パキスタン行きを志願する王族はいなかった。この時、王族に代わって名乗りを上げたのが、ジッダ(サウジのメディナの外港)の大学院に在籍していたビンラディンであった。彼がパキスタン行きを決めたのは、大学時代からの恩師が世界ムスリム(イスラム教徒)連盟のペシャワール事務局に勤めていたからであった。彼の決意には王族も父親も賛成した。

イスラム社会を巡る情勢は変化した。ソ連がアフガンから撤退した翌90年夏、イラクがクウェートに侵攻した。彼は直ぐサウジ王室にクウェート防衛軍の編成を働きかけ、アフガンからの帰還兵たちを集めようとした。

しかしサウジのファハド国王はビンラディンにではなく、異教徒のアメリカに助けを求め、54万人の米軍が到着した。これに強烈なショックを受けた彼はサウジ王室を公然と批判し、イスラム法学者たちに米軍の撤退を命じる教令を出すよう求めた。

イラクがクウェートから撤退後も、約2万人の米軍がサウジに駐留していることに對し、内務大臣の王子を「イスラムの裏切り者」とののしった。その後も王室批判はエスカレートしたため、94年にサウジ王室は彼の国籍を抹消した。前例のないことであった。

スーダンに向かった彼は、その後ケニアとタンザニアのアメリカ大使館爆破事件を起こし、パキスタン入りをしてタリバン(オマル主導・イスラム神学校)政権に参加した。彼は彼のテロ組織であるアルカイダを率いてアフガン内戦に参加した。

9、11同時多発テロ事件と、その後の展開・経過は省略する。

アフガン戦争に就いては、サウジアラビアは表面的にはアメリカに追随しているが、王室の中には依然としてビンラディンの支持者がいるという。指導者たちは彼が逮捕され、「サウジの恥部が暴露される」ことを最も恐れている。又、サウジの大衆にとっては、腐敗にまみれた王室を糾弾(キウガ)する彼の行動は、勇者の姿に映るらしい。

「彼がテロに訴える理由は次のようである」

- ①パレスチナ人が長い期間にわたり耐えてきた、不幸と不正義に終止符を打つこと。
- ②西側による経済制裁によって苦しみ、死につつあるイラク民衆と子供たちの救済。
- ③イスラムにとっての聖地(サウジや湾岸諸国のあるアラビア半島)から、そこに駐屯する非イスラム教徒の軍隊を追放すること。
- ④イスラム教徒にとっては数々の屈辱(クヅョク)を受けながら、それに対して行動を起こそうとさえしない、墮落し腐敗したイスラム諸国の現指導者たちの破滅。

彼は直接間接の責任者は米国であり、この聖戦で殉死する者は天国行きが約束されると言明。

「イラン」 (ペルシア、波斯)

平成7年(1995)3月、私は12日間のイラン一周の旅をした。それはイスラム指導者ホメイニ師による1979年のパーレヴィ国王の国外追放と、「イラン・イスラム共和国」の革命政権の実態を見るためであった。勿論、ペルシア(1935まで呼称)は世界で初めて大帝國を建設した国柄であり、憧れのペルセポリス等の古跡の見学も目的の一つであった。

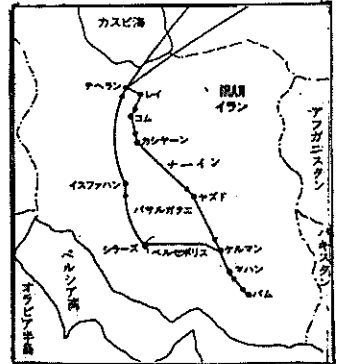
詳細は「イラン(ペルシア)紀行」と題した紀行文に記載済みである。

7世紀の預言者・ムハンマド(英語読みはマホメット)は全権限を一身に集め、立法、司法、行政の世俗の権威と宗教的権威を兼備していた。教祖的なものと教団運営の一体である。

ホメニイ革命の真髓は「祭政一致の神の国」の再現であった。イスラム法学者による政治であり、イスラム僧による国家統治、即ち「神権国家」であった。これが「イスラム原理主義」である。イスラム教団は同時に国家なのである。簡単に表現すれば「主権在神」である。

イランを旅しながら感じた第一は「ホメニイ帝国」であった。旧ソ連時代のレーニン、戦後の中共の毛沢東、北朝鮮の金帝国以上の存在がホメニイであった。しかし、「愛国主義や宗教を利用して、人民の感情を操作する政治家に問題がある。宗教が武器を持つのは間違いで、暴力で問題を解決するのは人間本来の姿ではない」とダライ・ラマ14世は述べている。世界の宗教家や政治家はよくよく考えなければならない問題である。

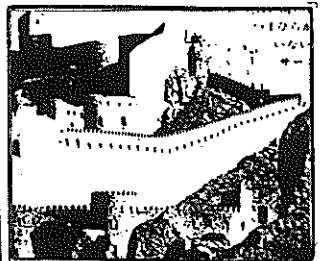
イランは昨年来の対テロ戦争で、間接的ながら対米協力姿勢を示してきた。東京のアフガニスタン復興支援会議でも、一年間、1億2千万ドルの支援を表明している。しかし米ブッシュ大統領は現在のイラン最高指導者ハメネイ師や保守派を意識したのか、イラク、北朝鮮と共に「悪の枢軸」と呼んでいる。選挙を経て選ばれたハタミ大統領や改革派まで、反米の立場に追い込んだことは愚の骨頂(コッポウ)である。(右上はイラン地図)



ヤズドは50頁に書いたようにゾロアスター教の聖地として発展した。拝火教とも言われるゾロアスター教には聖火殿があるほかに、信者の遺体を葬る鳥葬の場が荒野の山の上に設けられていた。これが「鳥葬の塔」であり「沈黙の塔」と言われている。塔は男女別に二つ並んでいて、50年前までは鳥葬が行われていた。ゾロアスター教徒は火、水、土を神聖なものとしており、これらを汚す火葬や土葬を嫌った。そのためにハゲタカなどの鳥に食いつくさせて、遺体を自然に還す方法をとったのであった。ヤズドは聖地ばかりでなくペルシア絨毯(ジュウタン)の産業で栄えたが、18世紀にアフガン族の侵入のため衰微した。

アフガンとパキスタンの国境に近い「バム遺跡」は紀元前から東西貿易で栄えてきた。しかし街は幾度も支配者が変わった。1722年のアフガン軍の包囲により、街は完全に放棄されてしまった。

その後、1810年に再び侵略され、廃墟の一途をたどり続け、現在も死の街の姿であった。(下左はヤズドの沈黙の塔。下右はバム遺跡の写真)



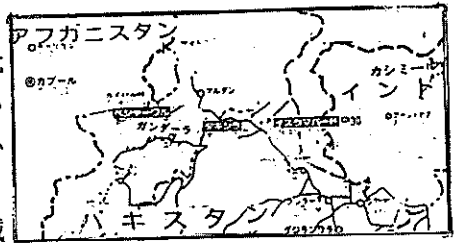
「パキスタン」

第二次世界大戦で我々がビルマ（現ミャンマ）作戦に従軍した時は、パキスタンはイギリス領のインドに含まれていた。だから現在のパキスタン人とも干戈(かか、いさ)を交えており、相互に或る親しみを持っているようだ。戦後の1947年にインドから独立したイスラム教の新しい国がパキスタンある。

私はパキスタン第一の大都市であるカラチ（旧首都）には都合6回も訪れた。新首都のイスラマバードやラホール、それにガンダーラ仏教遺跡、インドとの紛争の絶え間のないカシミール地方には、平成2年（1990）に初めて足跡を残した。特にガンダーラのタキシラ仏教遺跡まで足を運び、アフガニスタン国境の「カイバル峠」を眺望した印象は忘れられない。

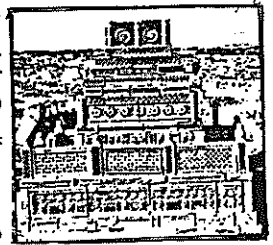
今次の9、11同時多発テロ事件発生から、私はアフガニスタンの支援国家であり、革命で政権を獲得した軍事政権であるパキスタン政府の行動に注目していた。最終的にパキスタン政府は米国への支援に動いた。自国の瀕死(ヒツシ)の状態にある経済の回復への援助が第一であったと推察する。背に腹は替えられないパキスタン国内の情勢は複雑であり、そんなに単純なものではないと思っていた。（右はガンダーラ地方地図）

米国協調路線を選んだムシャラフ大統領への不満や批判は、一般民衆の間だけではなく、軍の内部でも根強い反対があった。国内は分裂して内戦になるのではないかと心配したが、連合軍によるアフガニスタンの戦闘は、オマルのタリバンやビンラディンのアルカイダーを壊滅させ、外面状は一応の成功を収めた。残された自国の経済復興とアフガン支援という大問題や、部族間の闘争など、多くの「見えない敵」を相手にする長期間の戦いに突入するだろう。



「各宗教の墓地」

或るとき、カラチで同室した人が墓地の研究者であったため、タクシを飛ばしたカラチ郊外のイスラム教の墓地を初めて見学した。高い地位の人や財閥の墓は中国の多彩な廟に似たもので、一般庶民の中流の人の墓は土地産出の石で積み上げ、普通の人のは小さな石にアラビア文字で刻まれていた。（右は中流の人の墓石で日本の仏教徒の墓に似ている）アラビア半島で見たイスラムの古い墓は土を盛った土饅頭(ドマジュリ)であった。イスラエル・エルサレム城外東側ではユダヤの墓地を車窓から眺められた。背の低い細長の四角い白石であった。戦争当時の中国は樹木が少なく、火葬するのに薪がないために殆ど土葬であった。戦後は土葬が禁止されて火葬になったと聞いている。キリスト教の墓地は省略する。



「ガンダーラ仏教遺跡とタキシラの仏像」

「ガンダーラ」はパキスタン北東部でベシワール付近地域の古名である。前4世紀後半、アレキサンダーの東征によってギリシア文化の影響を受けた。さらに仏教の伝来により両者が融合し、西方風の仏教芸術が2～3世紀を中心に栄えた。この文化は彫刻を主体とし、仏像を初めて造り、インド・中央アジア・中国の仏教芸術に大きな影響を及ぼした。（中国語は乾陀羅）

「タキシラ」はガンダーラ地方の古代都市である。紀元前5世紀から紀元後5世紀に及ぶ異なった都市遺跡や、仏寺・仏像などが発掘されて有名である。私はタキシラ博物館や遺跡の見学によって新しい仏教の知識を得たのであった。

我が国に伝わった仏像の姿はガンダーラからのものではないようである。右の上・中の写真で見る通り発掘された仏像の中には、西欧的な高い鼻の面相をし、あるいは螺髪(らっつ)の頭髪などの仏像が多く見かけられた。



仏陀の像が初めて造られたタキシラ以前では、仏陀は「法輪」、「蓮の華」などのシンボルだけで表されていた。釈迦が入滅してから約500年後に、タキシラの地で仏教が再興されたことも初めて知ったのであった。



タキシラ博物館には釈迦の生誕から、瞑想、苦行、断食、涅槃(ねつ)などの一代記の彫刻などが展示されていた。珍しいものでは髭(ひげ)を生やした仏像もあり、顔はそれぞれの民族の特徴を表現していた。中国や朝鮮半島から伝来した日本の仏像は、やはり中国・朝鮮系民族の顔であろう。



博物館の正面玄関の中にあつた仏陀の断食苦行の仏像は国宝の筆頭とされている。骨皮までになって痩せこけた苦行像は、仏教の伝来先の国々では見ることの出来ない逸品であった。肉体の限界の苦痛に耐えることも修行であり、苦しさを乗り越えてこそ人間は精神的に生きられる、と言う表現であろうか。

(右の写真は国宝・仏陀の断食苦行像)

結論的にはガンダーラ仏教芸術の特徴は、紀元前後から5世紀頃までの間に作られたギリシア的に表現した釈迦像であった。

「カシミール問題」(右下図参照)

1947年のインド・パキスタン分離独立当時、カシミール藩王ハリ・シンが、ヒンズー教だったのに対し、住民の8割はイスラム教徒という「ねじれた」関係が発端である。一次(47年)、二次(65年)のインド・パキスタン戦争は、カシミールの帰属問題が引き金となった。



48、49年の国連安保理決議は、住民投票による帰属の決定を求めた。しかしインドは、圧勝した第三次インド・パキスタン戦争(71年)後に結んだ「シムラ協定」で、事実上の国境にあたる「実効支配線」が確定され、住民投票の可能性は排除された、との立場をとっている。(右図参照)



カシミール地方で独立を求める武装闘争が本格化したのは1989年である。カシミール人による独立運動だったはずの闘争が、90年代半ばからパキスタン人やアル・カーイダ系の外国人に乗っ取られ、民間人を巻き込む無差別テロの様相を呈してきた。

イスラム国家パキスタンは48、49年の国連決議を根拠に住民投票を要求し、国際社会の関心を高めるためにテロ闘争を支援してきた。国連決議はインドかパキスタンかの二つの選択肢しかないのである。

半世紀以上に及ぶ両国の激烈な帰属権争いの陰に埋もれているのは、分断されているカシミール人民の独立への願いと、インドに対する憎悪、そしてパキスタンへの不信感である。

「アフガニスタン」 (下図参照)

私の世界漫遊紀行中には「アフガニスタン」は残念ながら無かった。西の隣国「イラン」を回って歴史を繙(ひもと)いて吃驚(びっくり)したことの一つは、イラン全土は数回にわたり「アフガニスタン」(ニスタンは国の意)軍に侵略されたことであった。ゾロアスター教の聖地「ヤズド」(74頁)も占領され、廃墟となってしまった「バム遺跡」(74頁)もアフガンの侵攻であった。

そのような強力であった遊牧民は、中央アジアのステップ地帯を中心として往来し、特にアフガンを中心とする鉱物資源の豊かな地域と、メソポタミア(現イラク)との交易の媒介として常に重要な地であった。(下図参照)

我が国にも影響が大きい唐代初期の「玄奘三蔵」(ゲンゾウサンゾウ)は、629年に都の長安を出発し、仏教経典を求めてインドに向かって旅をした。その頃は中央アジアはまさに遊牧と交易による繁栄のただ中にあった。当時の「アフガン」は「大月氏国」(ダイゲツシク)と称していた。

玄奘三蔵の大唐西域記は数回にわたって読破した。それに刺激されて中国・西域のウイグル自治区からタクラマカン砂漠を踏破し、当時はソ連邦だった中央アジアへも脚を運んだ。また紀元前4世紀・アレキサンダー大王の遠征記も読んだ記憶はあるが、今では遠い昔の話、傘寿を超えてしまった耄碌翁(もろくわう)の脳細胞からは、すでに消えてしまっている。

時は移って19世紀のアフガニスタンは国内的には国家形成期であり、国際関係ではイギリスとロシアの競争の場であった。インドを支配していたイギリスは、ロシアの勢力がトルキスタンなどのイスラム諸政権を圧迫しつつ南下し、アフガニスタンに接近したことは、インドに対する恐怖だと考えていた。

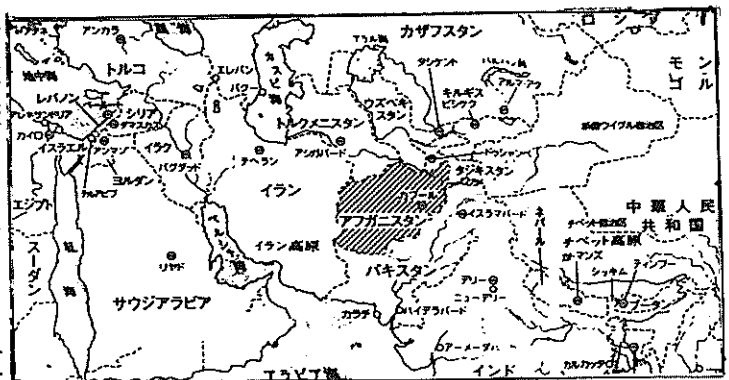
そこでイギリスは2度にわたってアフガニスタンへ軍隊を派遣し、カブールなどの東部の主要都市を占領した。これが第1次、第2次「イギリス・アフガニスタン戦争」(1838~42、78~80)である。

しかしイギリスは大損害を被って敗北した。そこでイギリスはアフガンの直接支配をあきらめて、国王を援助することによって、この国をロシアに対する防壁として利用することにした。

第一次世界大戦後、1919年、イギリスの疲弊(へい)に乗じて、今度はアフガン側がインドに侵攻し、第3次イギリス・アフガニスタン戦争となった。しかし、またも双方から停戦の議が起こり、漸くアフガニスタンの独立が達成された。

第二次世界大戦勃発に際して中立を宣言したが、外国との貿易が激減して経済発展は停滞した。日本は1934年、カブールに公使館を開設し、第二次世界大戦による中断の後、55年に国交を再開して大使館を設置した。

平和な時代は長くは続かず、ソ連軍が南下する侵略から始まって内戦が引き続き、過去20年にも及んで外国勢力に蹂躪(ジュウリツ)されてきた。世界の最貧国の上に更



に上塗(ウツ)りするように殺戮(キツリ)が重なり、私のような旅名人にもアフガンは未開放で受け入れなかった。

4年前に世界の最貧困国家の一つ「ラオス」を訪れることが出来た。これはアフガンと違って戦禍に見舞われなかったからである。過去はイギリス、ロシアを始めとして、今回はアメリカを中心とした超大国が一方的な攻撃を仕掛け、何の罪もない人達を昼夜を問わず殺害している現状を見ると、戦争体験者の一人として即刻、戦闘の停止を訴えたい。

アフガニスタンは古くから東西文明が交わる交通の要衝(ヨウシュウ)で、「アジアの心臓」とも呼ばれた。だから大国の利害が衝突する場所にもなったのである。旧ソ連軍がアフガニスタンから追い出されてからも、なぜ内戦が続いたのであろうか。これは周辺諸国がそれぞれの思惑(シワク)で、国内の各派閥を援助していたことが大きな原因であった。

パキスタンはタリバン(16頁に説明)を支援し、カシミール問題(76頁に説明)でパキスタンと対立するインドは北部同盟(説明下記)を支援していた。又、西隣のイランはイスラムの同宗派の北部同盟を支援し、タリバンを警戒するロシアやタジキスタンも北部同盟支持であった。そして国連の和平会議も99年に開催されたが、実を結ばなかった。

(北部同盟とは、アフガニスタン多数派のパシュトゥン人神学生が中心のタリバンに対抗するため、タジク人の「イスラム協会」、ウズベク人中心の「アフガニスタン・イスラム運動」、ハザラ人主体の「イスラム統一党」の三派で、97年に結成された同盟)

9、11テロ事件でブッシュ米大統領は、事件を起こしたのはイスラム過激派組織「アル・カイダ」(15頁に説明)で、指導者はウサマ・ビンラディンだと声明を発表した。しかし、タリバンにしろ、アル・カイダにしろ、米国はソ連軍を追い出すために作り育てた組織ではなかったのか。貧困な生活を強いられているアフガン国民のことも考慮せず、超大国は自分勝手に我儘な行為ではないだろうか。

アフガニスタンに就いてはテロ事件以来、詳しく報道され出版物も多く、ここでは玄奘三蔵の「大唐西域記・パーミヤーン遺跡」の一部と、「中村 哲」医師の報道を記すことにする。

【パーミヤーン】(梵衍那)

イスラムの偶像禁止の掟によってタリバンは、世界文化遺産の石仏まで破壊してしまった。誠に残念なことである。

大唐西域記を読んでもみると、2体の立仏の石像は、一方が高さ55呎、一方は高さ38呎で、風化してひび割れている。その姿はインド亜大陸のすべての仏像の古典的な特徴をもって刻まれていて、身体にはギリシア的衣服を着け、アレキサンダー大王がもたらしたヘレニズム(ギリシア的な思想や文化に由来する精神)と、インド、中央アジアの古典美術が融合したものであった。



この石仏は古代世界の驚異の一つで、中国とインドからの巡礼の地であった。かつて何千人もの仏教徒が、石仏の周囲にある断崖の洞窟に住んでいた。今回の戦争でも数千人の難民の住居となっていたと思われる。(上の写真は世界文化遺産のパーミヤーン巨大石仏)

『報道されないタリバンの素顔』

17年間、医師としてアフガンで暮らした「中村 哲」氏が、中央公論「01年12月号」に投稿した、「報道されないタリバンの素顔」を掲載する。我々に報道されて来るのは一方的なものばかりで、参考になると信じて概要を記載することにした。

氏は、94年に突如として出現し、96年に政権をとったタリバンよりも、アフガンに就いては古参である。実際のタリバンは理解不能な狂信集団ではなく、融通無碍(ムクムグ)であり、民衆に媚(コ)びる面も持っている。そうした事実が全く伝えられていない。

今回のアフガン戦争に於ける米軍の攻撃は、「理不尽な攻撃」以外のなにものでもない。如何に米国が正当化しようとも、彼ら(アガタ)にとっては、そのように写っている。そして洪水のような報道は、狂信的な部分だけが報道され、一種のオカルト集団の扱いである。

タリバン政権は古風な農村社会を代表する田舎政権で、現地の人は殆ど読み書きすらできず、組織的な動きなどはない。ビンラーディンに対しては、「彼は掟(オコシ)として守るべき客人でだけども、迷惑だ」というのが一般的な受け取り方である。彼に巻き添えを食って、何の罪もない自分たちが世界中から標的にされるのは、理不尽である

89年のソ連撤退後、暫定政権を打ち立てたマスード將軍は自爆テロで命を落とした。日本では好意的に報道された。しかし、婦女暴行、拉致、襲撃、略奪など、とんでもない北部同盟の將軍であった。その混乱を収めたオマルの率いるタリバンは、救世主に映ったのであった。

だが一步アフガンから国外に出ると、タリバンの悪評ばかりである。狂信的な部分だけを取り出して、人権を抑圧するオカルト集団のように報道されている。タリバン=イスラム過激派の悪玉、という偏向した世論をつくりだした。

米英の支援で元の暫定政権(北部同盟)が戻ってくる方が、もっと困る。彼らが帰ってくるなら徹底抗戦するという姿勢は、決してタリバンが煽動(セドク)しているのではない。タリバン政権が崩壊することを彼ら望んでいない。

現在のアフガニスタンは全体から見ると、兵農分離はできていない「農村型中世社会」である。しかし、首都カブールだけは、王族によって積極的に西欧化、近代化が推進された時期があった。それはソ連侵攻までのことである。

当時のカブールは、女性は民族衣装「ブルカ」を脱ぎ、ミニスカートを穿く女性が闊歩し、国王様の城下町の様相を呈していた。これは一握りの富裕族、知識層であった。しかし彼らはタリバンが来る以前に、首都から国外へ脱出していた。残されたのは西欧化の恩恵に与(アタ)らなかつた貧民層と、さらに農村社会から流れ込んできた饑餓(カ)難民であった。

ソ連共産主義の侵攻によって急造の近代化は失敗した。整備された貨幣経済はなく、物々交換が存在する地域が多くあった。つまりアフガンは田舎政権のタリバンでなければ統治できない、封建的中世農村社会である。

イスラム社会では、「儲ける」という商行為そのものが、軽んじられる傾向がある。資本主義経済は否定的に捉えられ、半ば自給自足の生活の中に、突然、現金生活が入ってきた。極端な例は、ロバヤラクダの隊商が、トラックの運送業者に対して反感を持つという構図である。トラックは農民にとって便利だが、それを享受(キョウジュ)できるのは極く一部である。運送需要を拡大しようにも、農村一辺倒の社会には産業がない。結局、近代化の流れで出現した資本主

義的特権階級の存在は、農民にとって許しがたい存在に映ったのである。

こうした中で、相互扶助的に成り立ってきた農村共同体が少しずつ崩れ始めた。この現実に対する反感、反動が強まっていった。米国に代表されるグローバリズムに最後まで抵抗するのは、近代的な経済基盤を持たない最貧国、アフガニスタンと言えるのではないだろうか。

一方、人権活動家の最大の攻撃材料になっているのが、女性を頭からすっぽりと包む「ブルカ」であった。世界中から女性差別の象徴のように糾弾(キョウダン)されているが、これはアフガンだけではなく、伝統的な民俗衣装である。タリバンが無理に押し付けたものではない。日本の女性が昔、和服を着ていたようなもので、女性一般の社会習慣と見るべきである。

勿論アフガニスタンは男社会であり、女性にとっては厳しい社会である。しかし、それを女性虐待につなげるのは浅はかである。彼女等は自分たちが虐待されている意識は全くない。

もともとアフガン人の反英米感情は相当に根深いものがある。イギリスを敵視するのは、過去二度にわたる英国のアフガン征服戦争に由来する。彼らを二度にわたって撃退した自負心が、現在の誇り高きアフガン人の気質を作っているのであった。

反米感情についてはもう少し複雑である。ソ連侵攻時、米国はアフガングェリラ組織(自由の戦士)を積極的に持ち上げ、てこ入れした。その中にビンラーディンなど、アラブ義勇軍たちもいた。しかしソ連が崩壊するとアメリカも引き上げてしまった。「米国に利用されただけだ」という敵意が生じたのは当然であり、パキスタンも同様な感情を持っている。

アフガニスタンが抱く米国に対する極端な敵意は、タリバン以前にさかのぼる話である。彼等の反感は、英米がアフガニスタンへの侵略者(国土を蝕(ムガ)む者、文化侵略者)というイメージが常に底流にある。支援を受けてきたゲリラたちも、今は米の力を借りておこうという程度のもので、結局、敵は敵という認識に変わりはない。

資本主義と対立していた共産主義が世界的に崩壊した後、貧民を代弁するイデオロギーとして、共産主義に代わるものは何も生まれなかった。となれば、貧者にしてみればコーランの中にそれを求めるしかなかった。実際にある程度、アフガンでそれを代弁しているのがイスラム原理主義であった。

しかもアフガニスタンは他の地域で行われたような近代化の手続きを踏んでいない。いわば混乱した中世社会のままである。そこに厳格なイスラム原理主義を掲げたタリバンが登場した。彼等はそれなりのイデオロギー的解決策を持っていた。大地主が逃げ出し階級差別のなくなっていた農村社会で、彼等は一種の平等主義的な政策を執行した。だからタリバンが支援された。

今の世界的な潮流の中では、タリバン政権はいずれ潰(ツク)れる運命にあるだろう。少しずつ農村社会の分解は促進していくだろう。その前に、相当な徹底抗戦が繰り広げられることは避けられない。そしてアフガンが今、経験している混乱は、違った形で周辺諸国に及ぶだろう。

その一つの要因は、旱魃(カガツ)と砂漠化である。地球温暖化によって、乾燥地帯を潤してきたヒンズークシヤカラコルム山脈の消雪が進んでいる。今、アフガン農民の居住空間そのものが、物理的に消滅を続けているが、これは戦争よりも恐ろしいことである。

農村社会が破綻した末の国民総難民化が、現にアフガニスタンで起こりつつある。アフガンを発火点として波及する混乱は、世界に何かを訴えている。西欧主導のグローバリズムが生み出した歪みを、本能的に知っているのは、字も読めないアフガンの一般民である。(抜粋)

あとがき

釈尊やキリスト、ユダヤ、ムハンマドの時代にも大なり小なりの戦争はあった。戦争は世の常のようである。9、11同時多発テロ、その後に続く米英のアフガン空爆で尊い多くの生命が奪われている。そして世界はそれを中止する術を持っていない。進歩発展を遂げた現代の何処に文化・文明があるのだろうか。

両陣営とも正義を謳(ウタ)って「兵戈」(ヘカ)を用い、殺戮(サツリク)することを正当化している。しかし、如何なる事情があっても、何人も人の命を奪うことを正当化することはできない。古代から今日まで行われた多くの戦争は、『自らに正義あり』として行われてきたが、殺戮することに「正義」はなかった。拙書の題名の如く「春秋に義戦なし」である。

幾たびもの戦争がくり返された20世紀に対し、21世紀は「平和と人権の世紀」であることが望まれてきたのに拘らず、最も愚かな行為によって幕を開けたことを悲しまざるを得ない。

初期の仏教の教えを伝える「法句経」(ホツキョウ)には、「この世において、怨みに報いるに怨みをもってすれば、ついに怨みは息(ヤ)むことがない。怨みを捨ててこそ息(ヤ)む。これは永遠の真理なり」と書かれている。

古代中国の老子は「怨みに報ゆるに徳を以てす」、と孔子にまでも教えている。怨みに対しては徳をもって報いるのがよい。そうすれば、怨みを与えた人も、ついにはこれに感化されて、おとなしくなる、と書かれている。(63章)「老子」書は秦末漢初には存在し、別名を「道德経」とも言われている。

キリストの「右の頬(材)を打たれれば左の頬を出せ」という教訓も亦、この言葉のように、怨みに対して処すべき人間の態度を説いているものだと考えられている。

老子は又、「大国は下流なり」と述べている。大国は、川でいえば下流である。細流、つまり小国が集まって大をなしている。国々を統帥する大国としては、強大をほこらず、他国の下流にいて、小国が流れ入るように心がけることが必要である。と説いている。(61章)

米国は世界各地の紛争に介入して自国の価値観を強要し、世界唯一の覇権国家となった。その強大な覇権国のアメリカは他の国々に、われわれの価値観に従うべきだ、と言っているようにしか見えないのである。一つは、自分たちは力を持っているのだから従えと言うことで、他の一つは、アメリカの正義は世界で最も素晴らしいものだから、従うのは当然だと言うことである。

世界の指導者であるべきブッシュ米大統領は9、11テロ直後の声明で、我々の目標はあくまでも「テロの根絶」であって、単なる「報復」ではないと言っていた。言葉の上ではそのように表現できても、戦闘体験者の私から見れば、そんなことは出来ない相談である。「鶏」と「卵」の問題の蒸し返しに過ぎないと言わなければならない。

世界の良識ある人々は、米国の覇権主義的な手法が既成事実化してしまうことに危機感を抱いている。同盟国や隷属国は表向きには米国向けに演出をしているが、実際は自由陣営の中からさえも不協和音が聞こえ出している。その最たるものが「悪の枢軸」論であった。

私は「強きものは勝つが、心正しければ亡びない」と叫びたい一人である。日本人は世界が奇妙に思うほど、素直に敗戦を受け入れることができた。それは日本人は宗教を持たなかった

からである。日本は例外中の例外でイスラム諸国には難しい問題だ。彼等は誇り高きものを持ち、その怨みを晴らそうとする信者が、次々と大量に出てきても不思議ではないのである。

「自由」が大切なことは論を俟(ま)たない。それ以上に私は「平和」を尊びたい。自由を無条件に良いものと考えている人々の愚かさを悲しんでいる。自由は目的にならない性質であり、自由は何かをするための条件・手段に過ぎない。自由の女神を造るよりも、平和の女神を造らなければ意味がない。最優先課題は平和である。

9、11同時多発テロ事件はアフガニスタンに導火して、昨年10月に米軍主体の軍事行動が開始され、約3ヶ月足らずでアル・カーイダの活動拠点は消滅し、軍事革命が結実したように完全に政権交代がもたらされた。しかし世界の有識者の誰もが指摘したように、アメリカは泥沼にはまり込んでしまった。

事件発生以来、私は訪問したことがあるアラビア半島の小国、「カタール」の衛星放送の記事を、注意深く読み続けてきた。その一つのイスラム声明は、「私は神に誓う。パレスチナに平和が訪れるまでは、米国に平和はない」と叫んでいた。このパレスチナ問題こそが彼等テロリストたちの本音である。

戦闘の主戦場はアフガンから「イスラエル・パレスチナ」へと転進し、ムスリム(イスラム教徒)はイスラエルに対し女性までが、身を犠牲にして自爆テロに参加した。ブッシュ米政権のイスラエル寄りの姿勢が、パレスチナの武力衝突を悪化させていったのであった。

イスラムあるいはアラブに関する難問は、「パレスチナ問題」の解決なくしては至難である。冷戦終結から湾岸戦争、同時多発テロ事件、アフガン戦争を経て、世界に比類のない権力を保持した大国・アメリカは、親米・反米あるいは左右の立場を問わず、現実を解決していくことが使命ではないだろうか。

しかし最近のアメリカはリーダーシップの低下が問われてきた。その解答は57頁に記述した「ユダヤ民族とアメリカ」の通りだと考えている。アメリカは迅速に世界の公正な仲介者になって欲しいと希望している。

1985年に私が「イスラエル・パレスチナ」の地に脚を運んだ時は、イスラエルは絶対に「エルサレム」は手放さないだろうと判断した。しかし歳月が流れ、衝突は局地に留まらず、宗教戦争の様相を呈している現在では、サウジアラビアの実質の責任者「アブドラ皇太子」が発表した意見に同感である。即ち、第三次中東戦争以前の国境線に戻さなければ、根本的に解決しないと考えている。(57頁の記事、60頁と62頁の地図を参照のこと)

「アフガニスタン」の国家再建にも諸問題が山積している。産業のない遊牧の国は世界からの善意に頼るのみである。20年間も戦争と内乱が続いてきた国の内部は、複雑で貧困を極め、各種族は群雄割拠して、軍閥は賃金さえも支払われずに失業者となり、不安定な国家に後戻りする危険性ばかりが目映ってくる。ニュースを騒がした北部同盟も敵同士の関係にあり、内戦が再び起こる可能性も充分にある。

アフガンの国民は部族名は知っているが、アフガニスタンという国名さえも知らない状態である。その上、無学文盲(モンク)の彼等には部族だけが世界であった。そのような状態で連邦国家を見事に成立させているのが、「アラブ首長国連邦」である。私は自分の目で確認してきたが、このような選択肢もあるのだ、とアフガンの各種族に訴えたいのである。

「筆を擱(お)く」にあたって、死と紙一重(かじヒ)の険しかった人生を振り返ってみると、修羅場(シュラバ)を生き抜いてきた苛酷(カク)だった人生は、波乱万丈(ハランマンチ)と言う以外に表現の手法がない。その語り尽くすことはできない人生体験とは「戦闘」であり、「戦争」であった。

最も人命が軽視され、死を強要する運命だけしかなかった戦場の体験は、老醜無残(ロウシュムザン)な老耄(オウボウ)の身となった今日でさえも、我が脳細胞に敏感に反応し、どこの国の紛争も我が身に降り掛ってくるような感じがする。21世紀は穏やかな平和に相応しい老後が期待されたが、裏切られてしまった。世界に人材は不在であると絶叫(ゼツキョウ)したいのである。

国を始めとして県・市町村の隅々までの歌い文句は、町づくりを叫んでいる。しかし、この世界に生を享(ウ)けたものの最高の責任は、立派な「後継者づくり」であることを忘れている。

『故事にも一年先を見る者は花を植え、十年先を見る者が木を植え、百年先を見るものだけが人をつくる』と言っている。古いものは全て悪いかのように、古来の道徳や倫理観まで蹴散(キチ)らされてしまった。地球規模の観点不足が嘆かわしい次第である。人が運用するのである。

ただ今は平成14年4月30日早朝である。読売の朝刊に、中国の江沢民国家首席は、小泉首相が靖国神社春季恒例祭に参拝したことに対し、「絶対に許すことはできない」と批判した記事が掲載されていた。江沢民氏に人道を無視した暴言だと抗議する。日本の主権に関することである。何時、彼は「霸王」(王の王の意味)になったのか。日本は中国の隷属国家ではないのである。憤慨しながら記事を終焉したのは、これが「嚆矢」(コウシ)であった。

戦後は「おまけ」人生だと思いながら、とっくに傘寿を過ぎさり、精神力も意欲も知的生産力も低下した上に、肉体は「全身これ病の器」の状態となってしまった。人の命は一寸先が闇(ヤミ)と言う通り、「これからも生死は自然にまかせたい」と思いながら余生を送りたい。

平成14年4月30日(2002)

寺前信次

『下は昭和60年(1985)、アラブの服装を着用した記念写真』



